昭和60年９月15日号（毎月２回１日、15日発行）第28巻・第18号　通巻639号　昭和54年６月２日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
18
9. 15.







南極の氷海のとりこ
観測船ソモフ号の救出

座談会
海洋開発と生態系の保護

超大型輸送機AN一二四

第18号　1985年9月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　右上——飛行中の超大型輸送機AN一二四、左上——AN一二四の乗員、下——離陸を前にしたAN一二四。

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141　東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

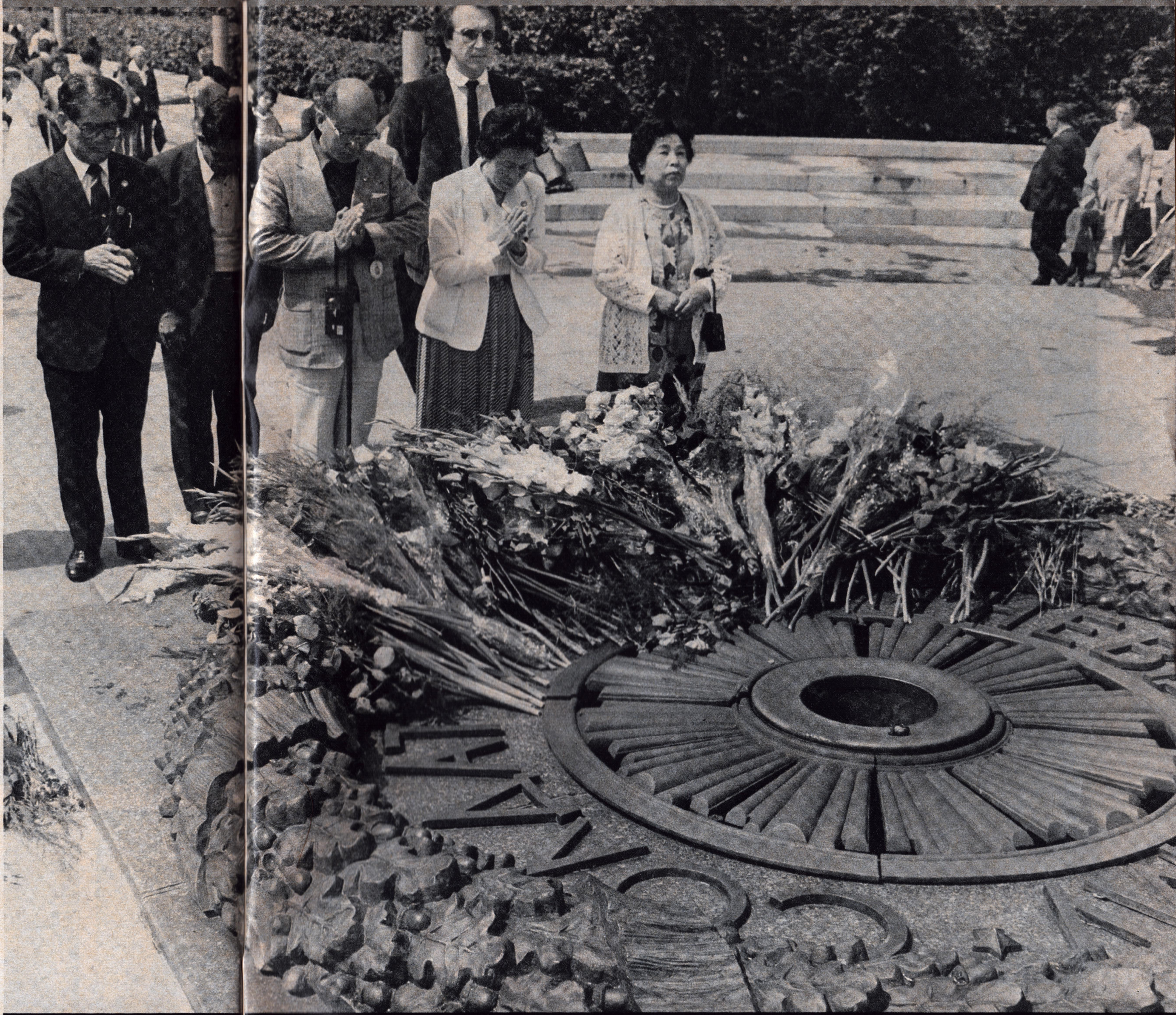
発行所　（株）新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町1—44
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

第2次世界大戦終結40周年

訪ソした日本被団協代表団

カメラ V・リトシ



キエフの無名戦士の墓に詣でる被団協代表団



ミンスクで大祖国戦争博物館を訪れた被団協代表

6月27日から7月3日までソ連平和擁護委員会の招きにより、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の代表団（5名）が訪ソした。日本被団協は47都道府県の原爆被害者団体の協議会で、日本全国三七万人の被爆者を代表する。

代表団はモスクワ、ミンスク（ベロルシア共和国の首都）、キエフ（ウクライナ共和国の首都）を訪れ、ソ連の人々の反戦行動や平和擁護委員会、ソ連平和基金、ソ日協会の活動を知った。

被爆者でもある日本被団協の肥田舜太郎・中央相談所理事長（医師）の話――「われわれは5人ともソ連に来たのは初めてだが、これまでに私

7月3日クレムリンで被団協代表団と会談するA・ボス・ソ連最高会議民族会議議長

◀キエフ市人民代議員ソビエト執行委員会で代表団と会談するガリーナ・メンジェレス・キエフ市副市長



モスクワのソ連平和擁護委員会での記者会見





が回った21カ国で、ソ連では平和、反核のデモ、集会が活発に行われており、ソ連の人々は平和を守る問題にとても気をつかっていると聞かされてきた。

ソ連に来て、ソ連の人々に会って見て、その通りだとはっきりわかったし、ソ連の人がそれこそ一人残らず心から平和を願っていることをしみじみ感じた。なにせ、先の戦争で二〇〇〇万人以上の死者を出し、あの戦争で犠牲者を出さなかったような家は一軒もなかったと言われているくらいだから、ソ連の人々が反戦、平和に熱心なのは当然だと思う。

もちろん日本とソ連の国家体制は違っている。ソ連では政府と国民が一体になって平

ソ連の記者の質問に答える。



和に努めている。ソ連の対外政策全体も平和をめざしている。日本では“下から”行動しなければならないので、ソ連の場合と違った方法や手段でたたかわねばならない。だが目標は同じである。ソ連に来て、いろんな方々と会って、そう思った。

われわれ被爆者は自分の悲惨な経験をもとに、核兵器の犯罪的かつ危険な性格を、もっと詳しくソ連の人々に話したい。われわれが訪問した結果、ソ連の友人たちが核兵器の恐ろしい脅威をますます痛感し、核兵器の完全禁止をめざしてますます積極的にたたかわれることを期待したい。核兵器が宇宙空間に進出する危険が現れている現在、それはますます重要になっている」

永遠の火

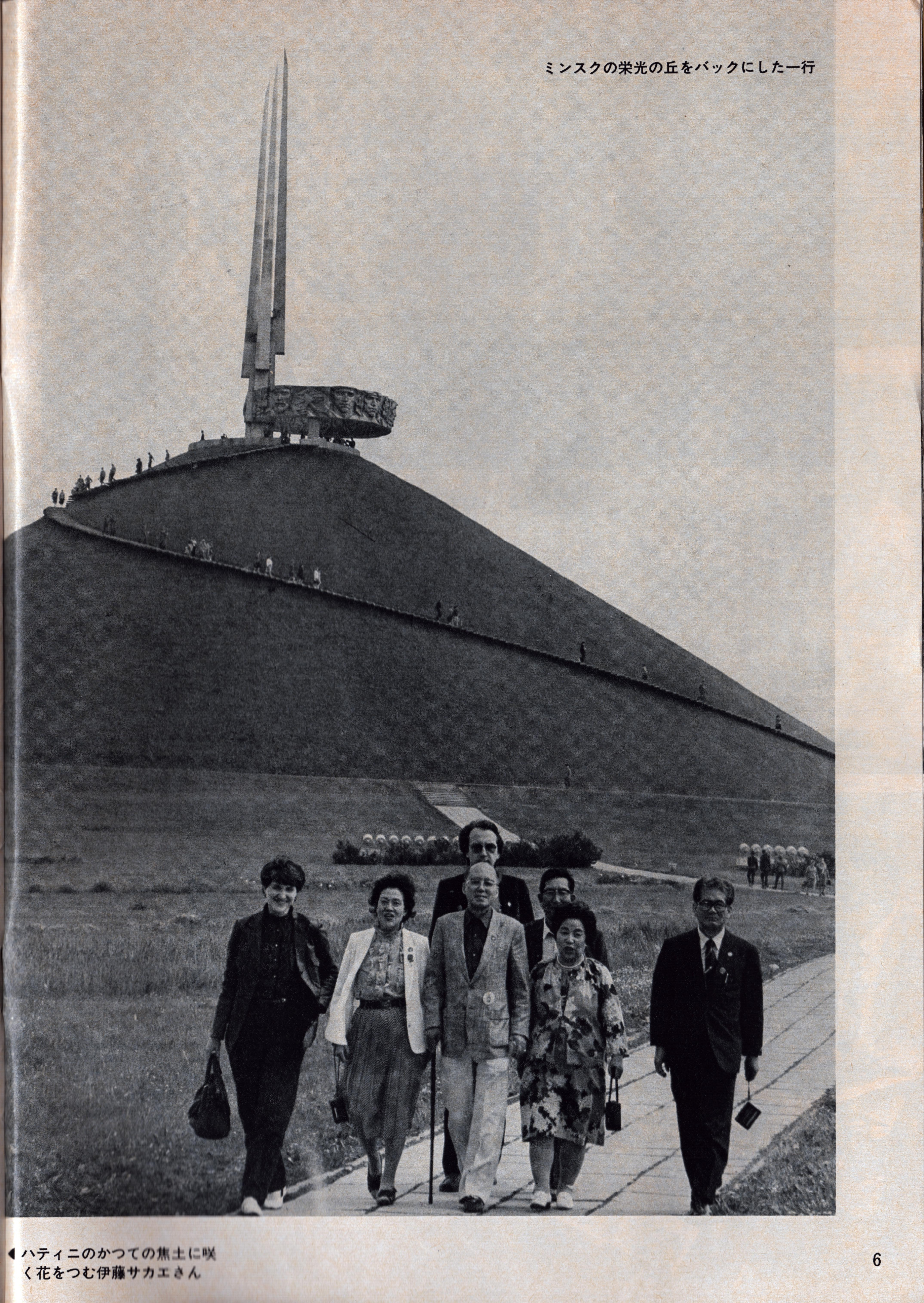
被団協代表団は6月28日から29日までミンスクに滞在して、市ソビエト執行委員会を訪れ、ソ日協会ベロルシア支

ウクライナ共和国平和擁護委員会で一行と会談するボリス・ズレザルツェフ同委員会書記（左端）



戦時中に死んだソビエト市民とソビエト軍捕虜の記念碑（キエフ）の前で▼





ミンスクの栄光の丘をバックにした一行

◀ハティニのかつての焦土に咲く花をつむ伊藤サカエさん



ミンスクの大祖国戦争博物館で

部員と会談した。また一九四三年3月にファシスト軍が一四九人の住民もろとも焼き尽くしたハティニ・メモリアル村を訪れた。

伊藤サカエ被団協代表委員は「ハティニはドイツ軍懲罰部隊のマッチで炎上し、広島と長崎は米国の核爆弾で灰燼に帰した。下手人や手段は違うが、目的は一つ、一般住民の大量虐殺にあった。ハティニでたった一人成人で生き残った身障者のヨシフ・カミンスキーさんは死ぬ前日まで死の村ハティニのガイドを務め、世界がハティニや他の何百というベロルシアの村で起こった惨事を忘れないよう願い、こういう悲劇が二度と繰り返されないよう望んでいたという。私たち被爆者もとても同じで、放射能を浴びた病気の身でありながら、方々を回って広島、長崎の真相を訴えている。二度とあんなことが繰り返されるのはごめんである」と語り、「ベロルシアではとても歓待していただいた。私たちはここに来る前ハティニや戦時中は全くの廃虚と化したミンスクについて多少は知っていたが、ベロルシアの人々はそれ以上に広島、長崎のことをはるかによく知っていた。私たちは、世界を破滅から救うことが、私たちの共通の念願であることを、互いによく理解している」と語った。





ミンスク市のレーニン広場で

広島で原爆を体験し、福岡で教員をしている黒岩貞義さんは「ミンスクで青年たちや元パルチザン部隊員、地下運動者たちといろいろ話し合った。ミンスクから20㎞の栄光の丘で、かつてドイツ軍と戦った二人の初老の男の人と知り合った。お二人は結婚式を挙げたばかりのお子さんと一緒に戦没者に献花に来たのだが、われわれはしっかり握手しあい、青年は旧知の人のようににっこり笑った。われわれは通訳を通さなくても互いに言うことがわかった。平和のことが話題だったからである」と語って、さらに言葉を継いだ。「ソ連の人々は核戦争が地球に何をもたらすかをよく知っている。ベロルシアの若い人たちからソ連で上映されている広島、長崎の記録映画や一九四五年の8月の出来事について書いた本の話を聞いた。われわれは、ソ連の人が戦争防止のために多大の努力を払っていることを確信した。ソ連の平和基金は国民の献金で増えている。この2年間にベロルシアだけで、平和署名、平和行進、集会、デモなどの反戦行事が合わせて一万回催されたそうだ。ソ連は反戦運動に参加しているすべての人に手を差し伸べている」

被団協代表団はベロルシアの第2次世界大戦史博物館を観覧したあと、ファシズムとの戦いで4人に一人の死者を出したベロルシア人を追悼する永遠の火に献花した。

辰岩秀子さんは「広島にも永遠の火があり、原爆犠牲者を弔っている。ここと広島の永遠の火は数千キロを隔てているが、私は二つの火が横に並んで燃えているような気がする。その炎は私たちの思い出を決して消すことはないだろうし、子や孫に平和を訴えるだろう」と語った。

生き残った者に呼びかける

6月30日と7月1日被団協代表団はキエフに滞在し、ウクライナ共和国平和擁護委員会を訪れ、キエフ市人民代議員ソビエトで会談し、ウクライナ大祖国戦争史国立博物館を観覧した。代表団はスイレソ地区でファシスト軍に殺されたソ連市民とソビエト軍捕虜の記念碑とダルニツキー収容所で死んだソビエト軍捕虜の記念碑に献花した。

ウクライナ平和擁護委員会のボリス・ズレザルツェフ書記は、一九五一年の創立以来の委員会の活動について語った。昨年だけで委員会主催の各種行事に四五〇〇万人のウクライナ市民と外国来賓が参加した。ウクライナの現在の平和運動の特徴は、ウクライナの全住民層が運動に参加していることである。ウクライナの工場の平和委員会の数は六万にのぼる。

伊藤サカエ代表委員は被爆のときの印象を次のように語った。「一九四五年8月6日のことを思い出すたびに身の毛がよだつ。目もくらむ白い閃光が光ると、着物が燃え出し、気が付くと爆風で吹っ飛んだ建物の破片の下敷きになっていた。数分後やっと抜け出したが、まちは一面の廃虚になっていた。奇跡的に生き残った人々は見るも無残な姿で、体からは皮膚がぶら下がり、恐ろしさにわれを失い、まわりの火から逃れるために広島の七つの川に飛び込んだが、大勢の人が窒息して死に、死体は海へ流された。

あの時以来40年たったが、原爆を受けた人たちは今も死んでいる。その人たちやその人の子供たちにとって、死は日常の現実になっている。このことを忘れてはならないし、また許してはならない。広島と長崎の犠牲者は、こういう悲劇が二度と繰り返されないよう、また人々が二度と被爆を体験しないように全力を尽くせと生き残った人々に呼びかけている」

※　※　※

7月3日被団協代表団はクレムリンでA・ボス・ソ連最高会議民族会議議長と会談した。ボス議長は日本被団協の内外活動に深い尊敬の気持ちを表明し、核兵器の完全廃絶まで核兵器の抑制をめざしてたたかうソ連の決意を確認し、日本国民がソ連国民と一緒にそのためにたたかうよう呼びかけた。



ミンスクの栄光の丘で、かつて参戦軍人だった二人の父親と出会って交歓する一行。二人の父親は結婚式を挙げたばかりの息子と娘を連れてここへやってきた。

タス通信記者の質問に対するM・S・ゴルバチョフの回答

（一九八五年8月13日）

問い　核爆発に対するモラトリアムの実施というソ連の新たなイニシアチブに対する世界の反応を、どう評価するか？

答え　広範な世論の動向について言うなら、あらゆる核爆発を一方的に停止し、これに加わるよう米国に呼びかけたソ連の新たなイニシアチブは、世界で賛同を受けた、と言う十分な根拠があると思う。米国を含む多くの国で著名な国政担当者、政治家、社会活動家が核兵器実験のモラトリアムの構想を支持し、他の核保有諸国もソ連の例にならうよう求めている。われわれの提案は、具体的な、実感できる措置をとりあげている。人々はこの措置に、核軍拡競争を抑制し、続いて停止させるという希望をかけている。

われわれのイニシアチブがすべての人のお気に召したわけではないことは、わかっている。西側で自らの政策を軍拡競争の一層の煽り立てと結びつけた連中、ここから少なからぬもうけを引き出している連中は、核実験停止を望んでいない。

モラトリアムに反対するのは、核軍備のコンベヤーが停止するのを望まないからだ。彼らはあれこれのやり方で軍事的優位を獲得するという実現不可能な幻想に執着している。と同時に、われわれが宣言した核爆発モラトリアムに関連するものをも含めたソ連の政策について、デマを広めている。

われわれの側からすれば、これは誠実な公明な措置だった。核兵器の増強、その一層の改良をおしとどめるための実際的措置をとらねばならないと深く確信して、われわれはモラトリアムに踏み切った。われわれは米指導部を窮地に立たせるなどという意図は毛頭もっていなかった。米大統領に対しては、われわれのこの行動はあらかじめ書簡で通告されてあった。その書簡の中でわれわれは米側に対し、同様の措置をとるよう提案した。米指導部がこの呼びかけに前向きにこたえることを期待したい。

モラトリアム問題についてのワシントンの高官の公開発言は、残念ながらワシントンではいま主としてこのような回答をなんとかうまく回避する道をしきりにさがしているとの印象をつくり出している。全世界はこれとは別の態度を期待していると言っても、間違いではなかろう。

問い　このほどレーガン大統領は、米国は核実験のモラトリアムに応じることはできない、なぜなら自らの核計画を完遂する必要があるからだ、と語った。しかも彼は、ソ連は集中的な核爆発シリーズを完了したので、一息つくことができるのだと主張した。本当にそうなのだろうか？

答え　ソ連指導部は核爆発の一方的停止を決定する前に、この問題を綿密に全面的に検討した。この措置に踏み切るのは、われわれにとって決して容易なことではなかった。一方的モラトリアムを実施するためには、実験計画を完遂しないまま中断しなければならなかった。

しかも本年に入ってからモラトリアム宣言までの期間にソ連が実施した核爆発の回数は、米国のそれと実質上同じだ。現在までに行われたあらゆる核実験を問題にするならば、米国が行った回数はソ連よりはるかに多い。ホワイトハウスはこのことを知っている。

しかし一方的モラトリアムの決定を下すにあたり、ソ連が指針としていたのは、そういった数の勘定ではなくて、原則的な政治的考慮であり、核軍拡競争の停止を促進し、米国その他の核保有国と同じ措置に踏み切らせようとする意図であった。われわれの目的は核兵器実験の完全全面停止であって、爆発の合い間の息つぎとやらではないのだ。

核爆発のモラトリアム実施は米国の利益にならないという意見が述べられている。だがモラトリアムは死をもたらす核兵器の一層の改良の停止をめざす道での重要な一歩である。しかも実験停止が長く続けば続くほど、蓄積された兵器の〝老朽化〟のプロセスはそれだけ速く進む。さらにモラトリアムは、核実験停止協定の成立、核兵器全般の廃絶への前進のために最も好適な条件をつくり出す。

そこで疑問が生じる。ここで一体何が米国の利益、米国民の利益にならないのか？　この道が利益にならないのは、圧力を頼りにし、地上に次々と新しい種類の核兵器を開発していく方針を練り、軍拡競争を宇宙に波及させることを目標とした連中だけである。だが、ワシントンがそれをめざすと再三言明してきた平和と国際安全の強化の真の利益は、一体どうなるのか？

核実験停止を望まないことを、米国が核軍備の分野で〝立ち後れ〟ているという理由で説明する試みが行われている。これは言いのがれにすぎない。かつて米国では、爆撃機の〝立ち後れ〟、のちにはミサイルの〝立ち後れ〟がうんぬんされた。しかしこれはいつも明らかなごまかしであって、後になってワシントンが自らそのことを認めてきた。言い替えると、〝立ち後れ〟うんぬんのおしゃべりは、軍事的優位の獲得をめざす場合に、軍備制限問題を解決しようとする実際の願望が存在しない場合に、持ち出されているのだ。だがこれは、まさに政治的指導部が決定を下すべき問題なのであって、その決定は〝ソ連の脅威〟についてつくりあげられている神話にもとづくのではなく、現実の情勢、自国の安全の真の利益、国際安全の利益から出発して下されなければならない。

問い　核爆発停止提案の文脈のなかで査察問題をどう見るか？

答え　わが国や米国、その他の国々にそなわっている科学技術力は、たとえ小規模でも核爆発は検出され、明らかになるという十分な確信を与えてくれる。逆のことを口にしている連中は、それが事実と違うことを知っているのだ。

もちろん、核爆発停止の一方的措置は、核兵器実験の完全全面禁止問題を最終的に解決できるものではない。この問題を永久に解決済みにするには国際協定が不可欠だ。この協定は、相応の義務のほかに、各国レベルと国際レベルの両方のしかるべき査察措置体系を含むものとなろう。要するにわれわれは核爆発停止に対する査察に賛成だが、実験停止がオブザーバー立ち会いの実験継続にすり替えられることには反対だ。

ここで、核兵器実験の完全全面停止問題が決して目新しいものではないことを指摘しておく。数年前にこの問題はソ米英三国交渉の過程で詳細に検討された。そこで査察問題も微に入り細をうがって審議された。多くの点で三国は相互理解に近いところまでいった。ところが米国がこの交渉を中断させてしまった。その理由は、作成された制限条項がペンタゴンの構想を妨害したからだ。

われわれは一度ならず交渉再開を米国に提案してきた。今日も、核兵器実験の完全停止を呼びかけている。ソ米両国が核実験を実施しなければ、このような交渉を行い、交渉で成果をあげることもずっと容易になるであろう。

しかし米国は交渉のテーブルに戻ることを望んでいない。このことは、ほかでもない米国こそが核実験の停止も確実な査察体系も望んでいないことを意味している。それ以外の結論は出せない。

核兵器実験停止問題はジュネーブ軍縮会議で検討すべきだと言う人がいる。それもよかろう。われわれはそこでもこの問題を審議する用意がある。だがジュネーブでは米国その他の西側諸国はすでに長期間にわたってこのような交渉の実施を妨害している。したがって問題は、核兵器実験の停止をどこで検討するかということではない。重要なのは、予定されているソ米会談をも考慮に入れて、この問題を真面目に、引き延ばすことなく検討することだ。

問い　それでも核実験問題の前向きの解決を期待できると思うか？

答え　できると思う。われわれの提案に対する米国の現在の態度は楽観を許さないが、それでも希望は失いたくない。なぜかというと、ソ米両国が負っている責任は余りに大きく、安全保障の大きな問題の解決からのがれることはできないからだ。

われわれが提案しているのは、核兵器庫の一層の増強を停止し、その削減、究極的にはその廃絶という課題の解決に本格的に着手する現実的可能性にほかならない。

伊藤サカエ日本原水爆被害者団体協議会代表委員の手紙へのM・S・ゴルバチョフの返書

尊敬する伊藤さん！

あなたのお手紙を読んで胸をうたれました。広島、長崎への米国の野蛮な原爆投下の犠牲者の身にふりかかった悲しみと途方もない苦しみに深く同情します。

広島と長崎の悲劇が世界のいかなる場所でも決して二度とくりかえされることのないように、われわれの地球上で核兵器の新たな犠牲者が出ないように、というあなたの熱烈な願いには全く同感です。

ソ連は、核兵器が出現して以来、その廃絶を粘り強くめざしています。すでに一九四六年にわが国は原子兵器の禁止に関する国際条約の締結を提案しましたが、米国がこの提案の実現を妨害しました。現在もわれわれは核兵器の完全禁止と廃絶に踏み切ろうとしない西側の態度に直面しており、その結果われわれはこの最も重要な課題の可能な中間的解決策を探求する必要にせまられています。

ソ連はいまも核兵器の廃絶をめざし

て積極的にたたかっています。われわれは他の核保有国との合意が成立すれば、いつでも核軍縮に着手する用意があります。ソ連は、宇宙での軍拡競争の開始をくいとめ、地上での軍拡競争を停止し、核軍備の完全な廃絶までにいたるその抜本的削減に移行するために、米国とジュネーブで交渉を進めているところです。しかしこの交渉での米国側の姿勢が合意の達成を妨げています。

ソ連は核戦争を始める気はなく、核兵器を先に使用しないことを公約しました。すべての核保有国が同様の措置をとれば、国際核兵器使用禁止条約の締結に好適な条件が生まれるでしょう。

われわれの新しい平和的イニシアチブ——本年8月6日の広島の悲劇の日からあらゆる核爆発を一方的に停止するという決定——は、危険な核兵器ストック増強競争の停止をめざすものです。われわれのモラトリアムは一九八五年いっぱいとなっていますが、米国側としても核爆発の実施を差し控えるなら、その後も有効となるでしょう。

このイニシアチブが世界の世論から受けた断固たる承認と幅広い支持は、これがすべての国の国民の期待と願望にこたえるものであることを裏づけています。今度は米国その他の核兵器保有国が同じく核爆発に終止符を打つ番です。それは、広島と長崎の原爆犠牲者の冥福を祈ることになるだけでなく、戦略的安定と地上の平和の強化に実際に貢献することになるはずです。そうすることによって、国際核兵器実験完全全面禁止条約の締結に好適な条件ができるでしょう。

わが国は地球のさまざまな地域に非核地帯を作ろうという多くの国の努力に理解を示しています。たとえば、北欧、バルカン半島、東南アジア、アフリカでの非核地帯の設置にわれわれは賛成しています。太平洋南部での非核地帯設置をめざす同地域の国々の努力は称賛に値します。

広島、長崎の原爆投下40周年を前に、われわれが理解しているところでは日本国民の広範な大衆の意思を表している〝非核三原則〟に具体化された日本の非核の地位をなんぴとも侵害しないようにすることが特に重要です。ソ連はこの三原則を尊重しています。他の国々も口先ではなく行動で同じ態度を示すことが大切です。

しかしながらわれわれは、日本を米国の核の基地に変え、米国との同盟関係の体系の中はもとより現代世界全体の中での日本の軍事的役割を高めようとする強まる一方の試みを無視することはできません。このような試みは、極東とアジア・太平洋地域の緊張を激化させる危険をはらんでいます。どうやら、必ずしもすべての人が第2次世界大戦や広島、長崎の原爆の教訓からしかるべき結論を引きだしたわけではないようです。

第2次世界大戦中二〇〇〇万人を失ったソ連国民は、核破局を容認しないという決意に満ちています。わが国では広島、長崎の悲劇は広く知られています。ソ連の人々は全地球上の核の脅威の完全な決定的廃絶をめざして立ち上がっている日本やその他の国の反戦・反核運動と連帯しています。この運動は、その参加者の幅が広がれば広がるほど、その隊列が団結すればするほど強くなります。

日本原水爆被害者団体協議会とその会員の皆さんが核戦争防止と核兵器禁止・廃絶をめざす闘争で成果をおさめられることを希望します。

敬具

一九八五年8月3日

M・ゴルバチョフ

（なお、この返書は8月5日、広島市において伊藤さんに直接手渡された）

伊藤サカエさんは語る



インタビューに答える伊藤サカエさん

本誌M・エフィーモフ記者は8月6日広島で、日本被団協代表委員伊藤サカエさんに会い、伊藤さんあてのM・S・ゴルバチョフの返書について感想を求めた。

「日本被団協は、ソ連、米国、中華人民共和国の指導者に対し、平和を守るための努力を増大しようという呼びかけを行いました。ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長からの返書が先ず第一番に届きました。今のところはまだこの返書しかありません。広島被爆40周年の記念集会の時に私たちはこれを受け取りました。

ゴルバチョフさんの言葉を聞いて、私たちはゴルバチョフさんの心から平和を求める気持ちを感じました。私は世界中のすべての人々が、大きな期待をもってソ連の核実験一時凍結の決定を聞いたと思います。核実験凍結が8月6日から効力を持つということは、私たち被爆者にとって特別の意味があります。こういう中で、もし米国がこのイニシアチブを支持しなければ、米国は孤立するでしょう。

レーガン大統領が提唱しているSDI（戦略防衛構想）に対するソ連の態度はよく理解しています。ソ連の態度はソ連だけでなく、世界全体の運命に対する不安を反映しています。それでもなお平和は守り通せるという希望をもって私たちは生きています。この立場からソ連の核実験凍結の決定は大きな展望を開いてくれます。ソ連のこのイニシアチブについて日本人は出来る限り長く承知していなくてはならないと私は思います」



広島の被爆者と語るアトポフ・ボルゴグラード市長

世界平和連帯都市市長会議に出席して

——アトポフ・ボルゴグラード市長に聞く

8月初め、核のない国際平和をめざす第1回世界平和連帯都市市長会議が広島と長崎で開催され、ソ連からV・アトポフ・ボルゴグラード市長が参加した。

ボルゴグラードの名は、第2次世界大戦史上最大のスターリングラード戦と結びついている。この戦いは一九四二年にドイツ軍部隊の全滅をもって終了し、事実上戦争全体の帰すうを決した。

ボルゴグラードと広島は姉妹都市である。会議開催中、ソ連代表団には会議の主催者側から大きな配慮が示された。8月6日の広島被爆40年平和記念式典のさいV・アトポフ市長はすべての姉妹都市を代表して原爆犠牲者の碑に献花した。またボルゴグラード市長は今回の姉妹都市訪問を機会に広島の名誉市民になった。

V・アトポフ市長は本誌記者に会議の印象を次のように語った。

「ことしすべての進歩的な人々は人類史上最も破壊的で最も多くの血を流した第2次世界大戦の終結40周年を記念した。しかし、戦争の恐ろしさは人々の記憶に生々しく残っており、戦争の後遺症は完全には取り除かれていない。諸国民は悪と狂気の勢力に対する理性の勢力のこの勝利のために高い代償を払った。戦争のあらしは五〇〇〇万の人命を奪った。ソ連はそのほぼ半数の二〇〇〇万人を失ったのである。

私が市長をしているボルゴグラード市は、人類史上最大のスターリングラード戦の中心になった。破壊的な戦火にさらされた市は、事実上地表から完全に消滅し、数万の一般市民が死んだ。

平和を守りたいという共通の願いに動かされて、われわれは多くの苦しみをなめた広島にやってきた。広島は、過去の過ちを繰り返さないように、つねに警戒心を持たなければならないという永遠の警告である。もし人類がスターリングラードと広島の教訓を忘れたなら、文明の終えんになるかもしれない。

ボルゴグラード市民はソ連のすべての人々と同様に、戦争を防止し、軍拡競争を中止させ、核兵器を廃棄することを主要な課題と見ている。われわれは核実験にモラトリアムを設けようとのわが国の政府の決定を熱烈に承認し、これが危険な軍拡競争防止への建設的な一歩であると考えている。率直に言って、この良い一歩が会議参加者の圧倒的多数によって一致して支持されたことは非常にうれしかった。

広島との姉妹関係について少し述べておきたい。最近この関係は明らかに活発になった。展覧会、アマチュア芸能団の公演、代表団の交流が行われている。いまも広島にはわれわれ代表団のほかにボルゴグラードのアマチュア・アンサンブルが来演しており、そごうデパートではわが国の民族工芸展が開かれている。

ボルゴグラードと広島の姉妹関係がさらに発展することを期待したい」

日航機事故にソ連政府が見舞電

ソ連閣僚会議は日航機事故に関連して中曽根首相あてに次のような見舞電を送った——

東京
日本国総理大臣　中曽根康弘閣下

多数の人命の犠牲を伴った航空機事故に関連して深くご同情申し上げます。ご遺族に対して心から哀悼の念を表明します。

ソ連閣僚会議

モスクワ、クレムリン
一九八五年8月13日

ゴルバチョフ・クニヤル会談



7月27日、M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は、党中央委の招きで訪ソしたアルバロ・クニヤル・ポルトガル共産党書記長と会談し、両党の活動についての情報ならびに若干の国際問題についての意見を交換した。双方は、世界の緊張が宇宙の軍事化をねらう米国とNATOの帝国主義層の危険な行動によって起こっており、平和と諸国民の安全を守るには全平和勢力が協力し、活発に行動することが必要であることを確認した。（写真は握手する両党書記長）

総評代表団の訪ソ



6月30日から7月4日まで黒川 武・総評議長を団長とする総評代表団が全ソ労働組合中央評議会（労評）の招きで訪ソし、モスクワでS・A・シャラエフ全ソ労評議長を団長とするソ連労組代表団と会談した。双方はソ日労組の活動情報を交換し、現在と国際労組運動の緊要問題を審議した。またソ日勤労者間の相互理解と善隣を深めるための双方の労組の交流と協力を一層発展させる措置が定められた。黒川団長は記者団に訪問の成果について語った。（写真は記者会見中の黒川団長）

レニングラードの大島大阪市長



7月5、6日の両日レニングラード市当局の招きで、姉妹都市大阪の市代表団（団長・大島靖市長）が同市を訪れた。昨年の両市の友好関係樹立5周年を記念して、大島市長は沿海勝利公園の友好歩道にカシの若木を植樹した。

（写真はレニングラードのイサーキー寺院広場前の大島市長夫妻と案内のシバエフ・レニングラード副市長）

強まるソ中経済・貿易関係

7月10日から16日まで姚依林・中華人民共和国副首相がソ連を公式訪問した。7月10日クレムリンでI・V・アルヒポフ・ソ連第一副首相と姚副首相はソ中経済、通商問題で話し合った結果、双方は一九八六－九〇年度貿易・支払い協定と中国の工業施設の建設、改装における経済・技術協力協定に調印した。両協定に基づいてソ連は中国に機械設備、輸送手段、原料、建設商品、化学製品を供給し、中国から農業、工業原料と消費物資を受け取る。一九八六年から5年間の相互貿易額は約一二〇億ルーブルとなり、一九九〇年のそれはことしの約2倍の三〇億ルーブルとなろう。またソ連は電力、鉄鋼、機械、石炭、化学工業、運輸などの分野の中国の七つの施設の新設、17施設の改装に協力する。また7月11日のN・A・チーホノフ首相と姚副首相との会談で、双方はソ中関係を正常化するために共に努力することを確認した。

（写真は協定に調印するI・V・アルヒポフと姚依林副首相）



シベリアで活躍する"小松"製ブルドーザ



このほどソ連は日本から650馬力の新型ブルドーザ「小松D455A」を買い付けた。

このブルドーザは建設作業に使われている最大級のブルドーザの一つで、すでに30台がシベリア・極東の大建設場で使われている。

建設・土木機械の運転手を養成するイルクーツクの技術学校ではセミナーが開かれ、小松製作所の派遣員がソ連の専門家たちにこのブルドーザの構造や取り扱い方などを説明した。（写真はブルドーザの取り扱い方をソ連の担当者に説明する小松製作所の係員）

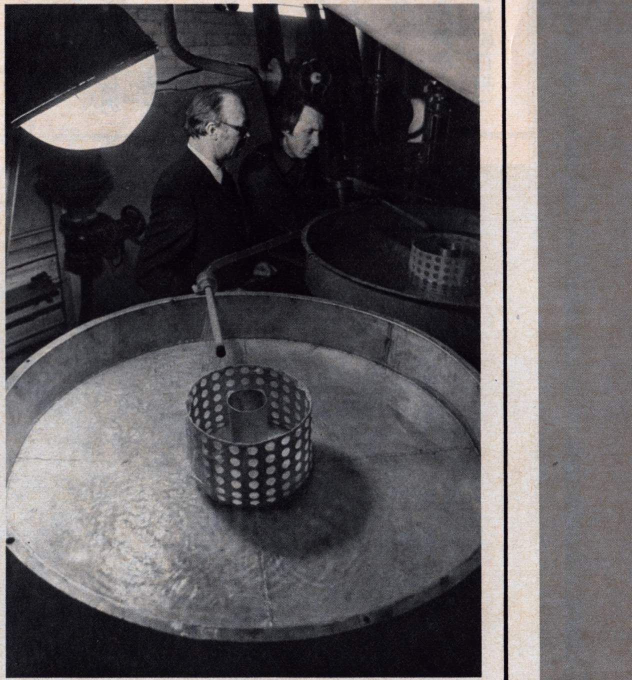
話題を拾う

工場でコイを養殖

レニングラードの「エレクトロン」研究所は金属の水槽で魚を養殖する自動工場を設計し、年間水槽１平方mあたり100kgの魚を供給すると意気込んでいる。この水槽の水は循環方式で供給され、感度のよい計器が水の生物学的純度を監視する。

研究所はとりあえずコイの流れ作業・ポリサイクル養殖をめざしており、集約的な方法の成果が待たれている。（写真は工場の内部と養殖したコイ）







トムスクの木造建物の保存

シベリアの古いたたずまいを保ってきたトムスクのまちも、時代の流れとともに成長し、整備され、かつての面影は消えつつある。

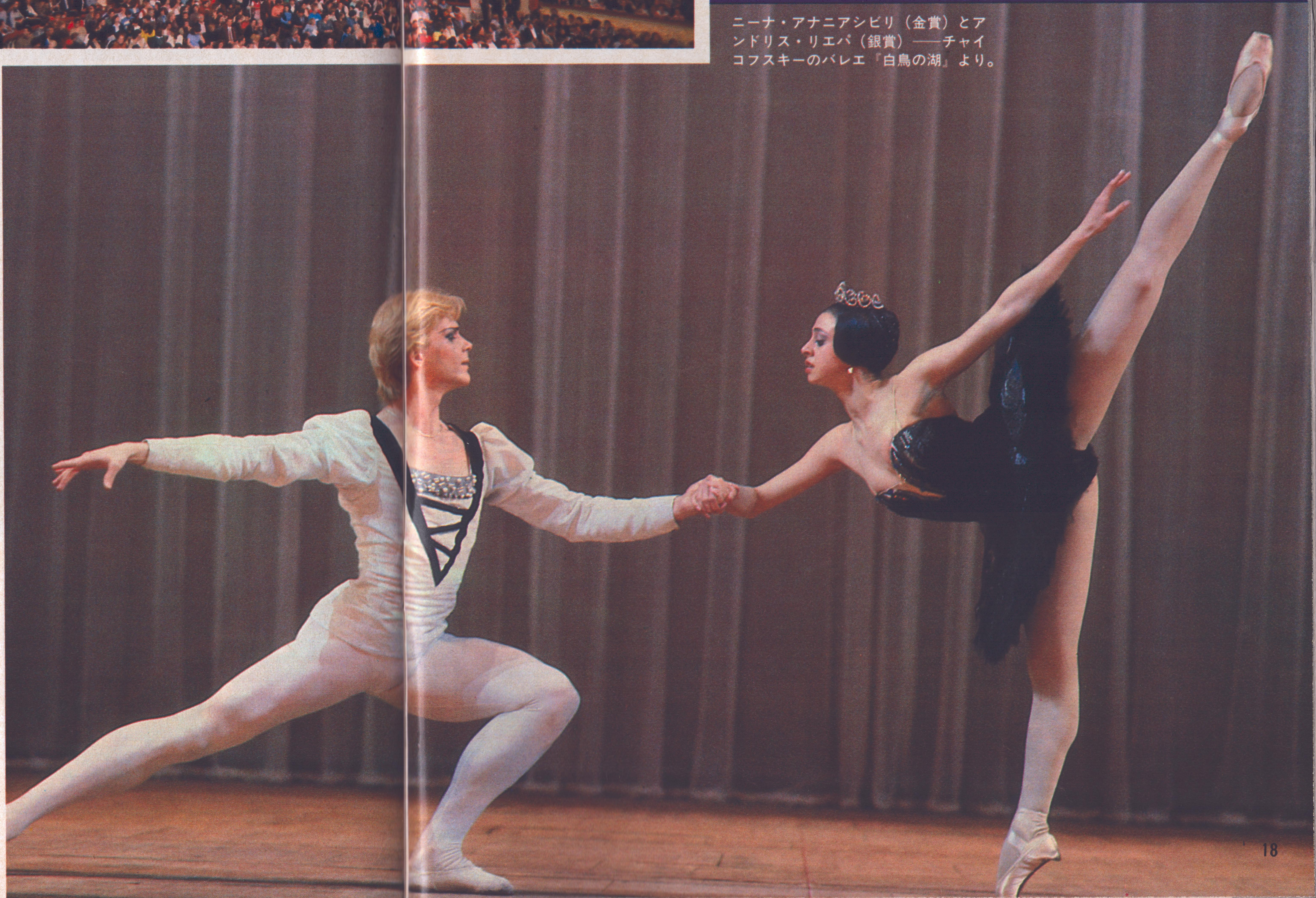
これでは古い建物がなくなるとあって、建築家や建設関係者は、市民やツーリストの目を楽しませている独特の彫刻を施したトムスクの古い建物の保存に努めている。

「特殊設計復元」研究所シベリア支部の高級家具を作る職人たちは、建物や窓・扉のかまち、時代ものの家具の復元に一生懸命である。（写真はトムスクの住宅の木彫りの飾り。ごく普通の木造住宅も木彫りの装飾でこんなに美しくなることを示す見本の一つ）

森本さんが銀賞

——第5回モスクワ国際バレエコンクール

本誌記者 マリーナ・ハチャトゥーロワ
カメラ A・マカロフ



ニーナ・アナニアシビリ（金賞）とアンドリス・リエパ（銀賞）——チャイコフスキーのバレエ『白鳥の湖』より。



▲コンクール開催中のボリショイ劇場の客席

6月12—26日、モスクワで第5回モスクワ国際バレエコンクールが開かれた。このコンクールは、プロのバレエ芸術家やバレエファンの熱い関心を呼ぶのが常だ。ここに来れば、舞踊表現の伝統が違うさまざまな国の古典バレエに直に触れられるからである。今回モスクワでは古典作品だけではなく、現代振付家の作品も披露された。

コンクールの出場順序を決めるくじで一番を引き当てたのは日本の越智久美子さん。越智さんの演技でコンクールが始まるわけだから、彼女はたちまち取材陣の注目を集めてしまった。

「ダメよ、ダメ！ わたし、とても縁起をかつぐの。だから、質問にはお答えしたくないわ。1番を引いてしまったのですもの！ もしわたしが失敗し

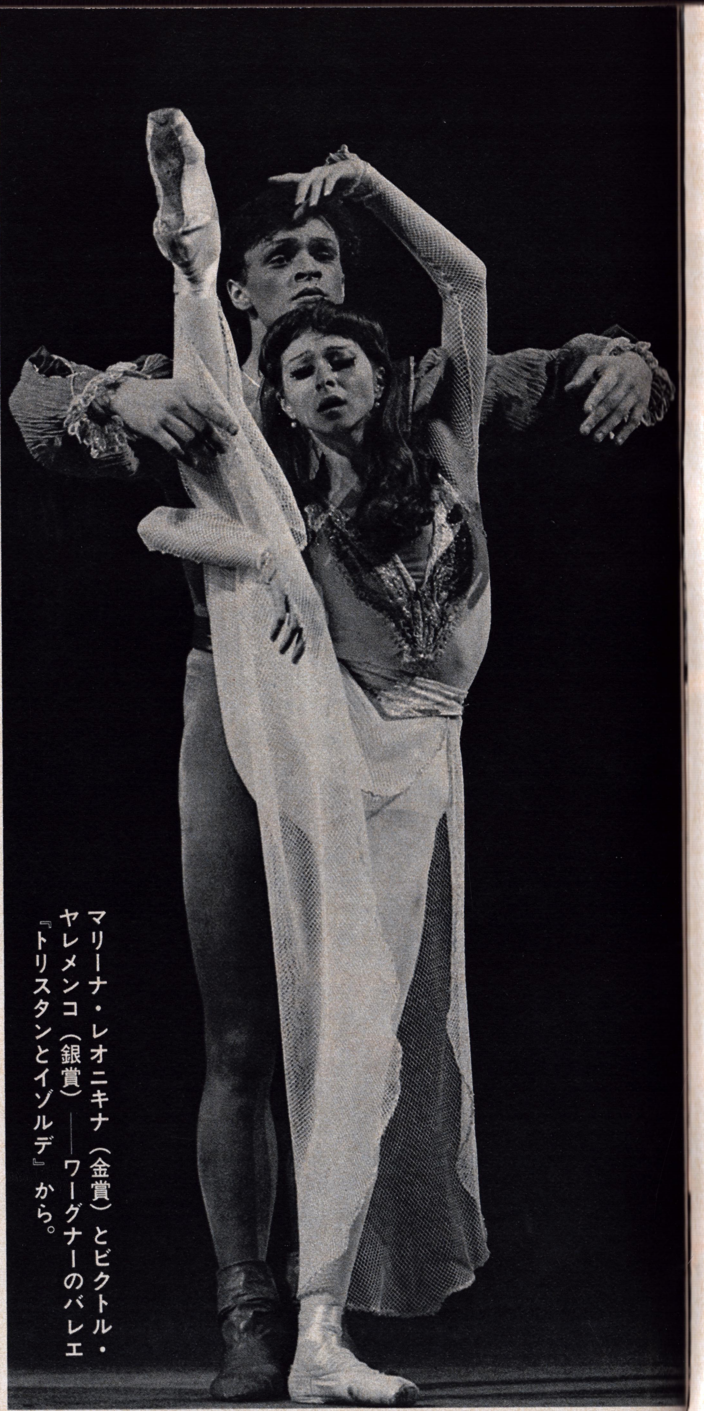


フリオ・ボッカ（アルゼンチン、金賞）——ミンクスのバレエ『ドン・キホーテ』より。

たら、みなさんの質問がいけなかったことになるのよ、そんなこと、お望みじゃないでしょ？」――ジャーナリストたちが彼女を取り囲み、一番を引き当てた感想を聞き出そうとした時、越智さんはこうことわった。
　越智さん（25歳）はコンクール参加経験の豊かな踊り手であり、パリではアンナ・パブロワ賞に輝き、8年前には第3回モスクワ国際バレエコンクールで銅メダルを受賞した。当時は前田久美子と言った。一九七九年にはソ連で公演したこともあり、ソ連の観客にもなじみのあるバレリーナだ。今回、越智さんはソ連のパートナー、ワレリー・ラントラトフ（審査の対象外の参加）と踊り、成長した技巧となかなか落ち着いたバレエを見せた――なにしろボリショイ劇場の舞台に最初に登場したのだ。
　モスクワの国際コンクールは4年に1度開かれる。今回は19カ国から90人の踊り手（17歳から25歳）が参加した。日本からの参加は恒例となり、日本人踊り手の力量はよく知られている。今回も新聞雑誌の評では日本人参加者全体のレベルの高さが指摘された。
　日本は最も粒ぞろいの踊り手を送り込んで来た国の一つで、これは日本におけるこのコンクールに対する関心の高さを物語っている。周知のように、これまで、何人ものソ連の教師が日本のバレエ界で働き、成果を上げた。今回日本のバレリーナのパートナーを務めたのがほぼ全員ソ連人だったことを述べないわけにはいくまい。前述のワレリー・ラントラトフのほか、ニコライ・フョードロフ、チムール・ファイジエフ、ウラジーミル・キリロフ、アンドレイ・シャヒンらで、いずれも審査の対象外の参加者だ。日本人ダンサー覚心浩嗣さんも同様の資格で矢野陽子さんと踊った。バレエ教師宮城昇さんも予期しなかった審査対象外のパートナーを務めることになり、教え子の森本由布子さんとデュエットを踊った。ダンサーとしてはすでに"高齢"の宮城さんが見事にパートナーの代役を務めた事実は、宮城さんのアーチストとしての資質だけでなく、人間的資質――この場合は少なからぬ勇気が必要だった――がものを言った。観客は彼のこの態度を高く評価し、拍手を惜しまなかった。第1次予選で宮城さんは、同じ舞台の上で愛弟子のすばらしい成功の目撃者となった――チャイコフスキーの『白鳥の湖』から32回のフエテをあざやかに決めた森本由布子さんに観客は割れんばかりの拍手を送ったのである。
　コンクールの規定により、第1次予選の課題はクラシックバレエ。第2次予選は世界的に有名なクラシックからパ・ド・ドゥかまたはヴァリアシオン（ソロの場合）と現代振付家による創作バレエのフラグメントかバレエコンサート用の作品。本選はロシアのクラシックバレエからのフラグメント。本選に進出したのは24名。
　審査は大変に厳しく、日本から参加した12人のうち越智久美子、石井（田中）梨花、斎藤ゆかり、森本由布子、成沢淑栄さんの5人が第2次に進出した。日本の5人を含め、第2次に残ったのは14カ国の47人。12点満点で8点以上の評価を受けた人たちだけだ。
　第2次予選はいつもながら、第1次にくらべてプログラムはより多彩だった。幸運にもこの日、ボリショイ劇場の入場券を手に入れたバレエファンは、さまざまな民族のクラシックバレエの伝統を知り、現代舞踊におけるダンサーの個性を評価できた。
　例えば、越智久美子さんはミンクスの『ドン・キホーテ』からパ・ド・ドゥを非のうちどころなく演じた後、堅田喜三九の曲に関　直人が振り付けた創作バレエ『絹』を踊った。非常に表現が難しい民族的色彩に貫かれたこの小品はバレリーナに正真正銘の妙技を要求した。森本由布子さんは、アダンの『海賊』からパ・ド・ドゥを輝くばかりに踊って割れるような拍手を受けた後、喜多郎の『着物』（宮城　昇振付けの現代バレエ）を披露した。
　「このコンクールの特徴は全予選を通じて出し物を完璧に仕上げなければならないことです。どれか一つでも競争相手に席を譲ってしまったら、成功のすべてのチャンスを失うことになりかねません。第2次予選で森本由布子に起こったことがそうでした。彼女はクラシックバレエで素晴らしい出来を見せました。持てるすべてのいい面を出し切ったと思います。表現の豊かさ、美しさ、稀有の跳躍、驚くべき回転。『白鳥の湖』のこれほど超絶的な演技を見たのは初めてです。それなのに彼女は現代舞踊では十分に力量を発揮できませんでした――工夫も、美しさも、内容もありませんでした」
　ソ連の名プリマでコンクールの来賓マイヤ・プリセツカヤは森本由布子の演技をこう批評した。だが審査員団はそれでも森本さんを日本人の中でただ一人、本選に進出させた。本選での演技で森本さんは再び芸術性の豊かさとしたたかなプロ根性を見せつけ、第2位と銀メダルを受賞した。
　審査員団についてぜひとも述べておかねばならない。世界で活躍しているそうそうたる振付家、舞踊芸術家33人が審査員団を構成した。審査員長は今回も、バレエ史上に残る作品を発表しつづけているボリショイ劇場の主任振付家ユーリー・グリゴロビチ。日本からの審査員は有名なバレエ評論家でバレエ史家の薄井憲二氏。薄井氏は何度もモスクワ、レニングラードを訪れたことがあり、ロシア語を話す。薄井氏は「審査員として日本のバレリーナと組んで踊った素晴らしいソ連のパートナーたちに感謝したい。クラシックバレエをやる男性が日本には大変少ない。ましてやコンクールに参加を希望する男性舞踊手となるとなお少なくなります。しかしこういう日本の事情が結局、ソ連と日本のダンサーを接近させることになりました。コンクールの期間中、バレエ教師の交換、共同公演についての交渉が持たれました」と語った。
　緊張の連続だったコンクールの2週間がまたたく間に過ぎた。最終日、審査員団が最終結果を出した。8カ国、19人の入賞が決まった。
　デュエット男性でただ一人、第1位、金賞に選ばれたフリオ・ボッカ（アルゼンチン）は今コンクールの大発見だった！　デュエット女性部門の第1位、金賞はニーナ・アナニアシビリ（モスクワ）とマリーナ・レオニキナ（ボロネジ）。男性ソロではアレクサンドル・ベトロフ（モスクワ）とワジム・ピサレフ（ドネック）が第1位、金賞。
　銀賞は男性ソロ――アンドリス・リエパ（モスクワ）、ビクトル・ヤレメンコ（キエフ）、セルゲイ・ビハレフ（レニングラード）、パブロ・サボイ（仏）、デュエット女性――ガリーナ・ステパネンコ（モスクワ）、森本由布子（日本）。
　銅賞は男性ソロ――チャン・ベイツャンとチャオ・ミンファ（中国）、デビッド・マック＝アリスター（オーストラリア）、リー・グイヒン（米国）、デュエット女性――タチヤナ・チェルノブロフキナ、ジャンナ・アユポワ、カイエ・クイルブ（以上3人ソ連）、マリア・ギベショワ（チェコスロバキア）。
　「こんな大きな舞台で踊ったのは初めてです。最初は特に緊張しました。ボリショイ劇場の舞台は傾斜があるので、日本のまったく平らな舞台に慣れた私には転びそうでこわかった。こんなむずかしいコンクールでメダルをいただけるなんて、思ってもみませんでした。このコンクールは私に自信を持たせてくれました。新しい力が湧いて来ました」――森本由布子さんはこう語った。


一番最初に踊るのは誰だろう――みんながかたずをのんで見守った。一番くじを引いたのは日本の越智久美子さん。「こんな大きなコンクールで最初に踊るなんて、こわいわ！」

森本由布子さん（銀賞）と宮城　昇さん――チャイコフスキーのバレエ『白鳥の湖』から。



マリーナ・レオニキナ（金賞）とビクトル・ヤレメンコ（銀賞）――ワーグナーのバレエ『トリスタンとイゾルデ』から。



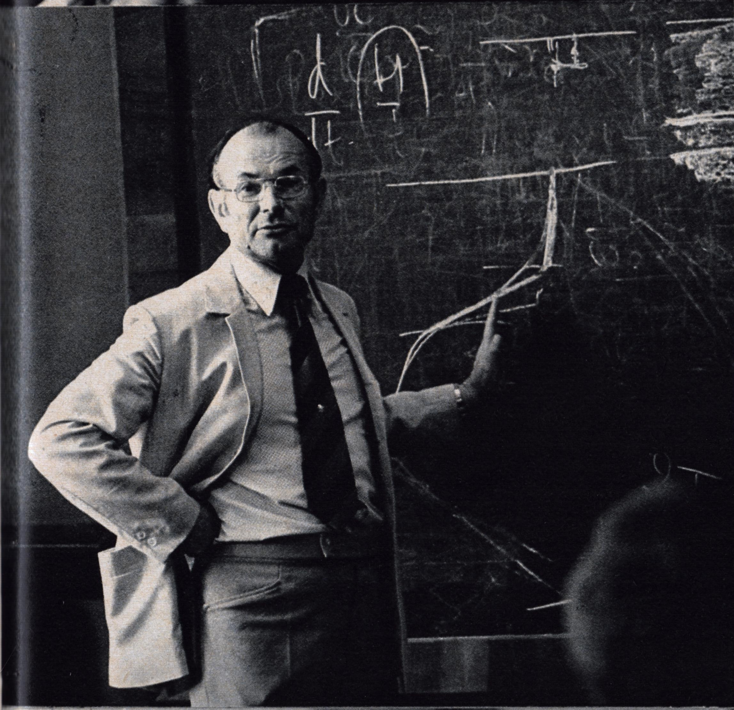
世界の海洋は人間に必要な食糧、エネルギー資源、原料資源の巨大な源泉である。予測によれば、紀元二〇〇〇年までには海洋は動物性たん白質の半分を供給し、水中の畑や牧場で養殖される動物と海草は人類の食物の20%以上になろう。しかし海洋からエネルギーや食物を獲得することだけでなく、海洋を略奪的な搾取と文明の廃棄物による汚染から守ることも、海洋の調査研究に携わるソ連の科学者たちの強い関心を集めている（次ページの座談会参照）。

座談会

海洋開発と生態系の保護



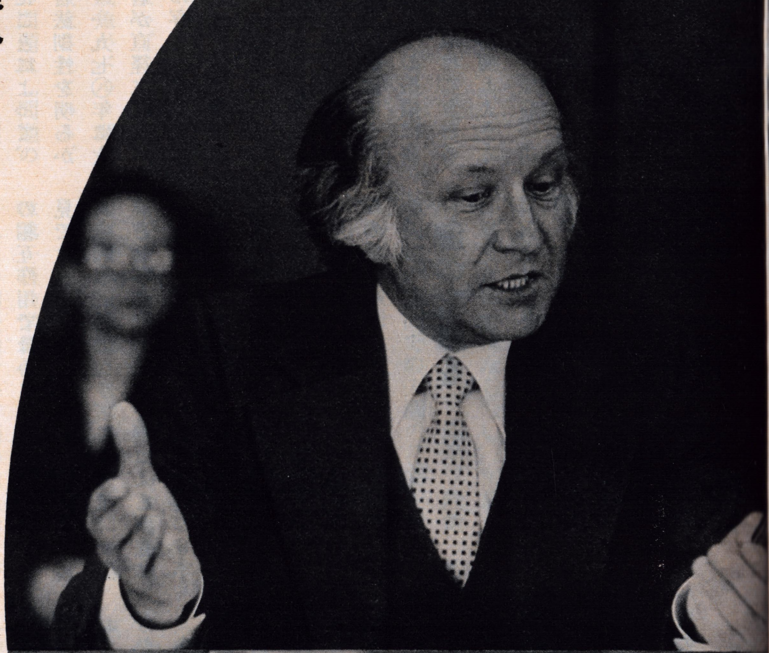
グリー・マルチュク・ソ連科学技術国家委員会議長・アカデミー会員



レオニード・ブレホフスキフ・アカデミー会員



セルゲイ・ストゥデネツキー
国際海洋研究会議副会長



ゲンナジー・ポリカルポフ・南海生物学研究所実験室長・ウクライナ科学アカデミー準会員



アンドレイ・モーニン・ソ連科学アカデミー海洋学研究所長・ソ連科学アカデミー準会員

海洋学者の発見

マルチュク　人間の海洋学的活動は新段階に入った。以前には海洋の秘密を知りたいという人間の願望を満たすことが主として問題になっていたが、今日では海洋の研究と開発が死活的に必要なことになっている。急速に発展する文明のために、地球の富を確保し増やすという課題が出てきた。人口動態学者の意見は、二〇〇〇年には地球の人口は少なくとも五五億—六〇億人に、22世紀の初頭には一二〇億人になるという点で一致している。これに関連して、海洋は食糧資源の巨大な源泉とみなすべきだ。小さな微生物から巨大な哺乳動物まで一八万種類もの生物が水中に住んでいるからだ。今日すでに沿岸に海洋牧場をつくったり、一部の種類の魚を新しい生息水域に人為的に移すことが現実的な課題になっている。

しかし海洋を食糧倉庫とだけ考えてはならない。われわれの文明は発展しながら、地球のエネルギー資源、原料資源をますます多く消費している。特に石油とガスは不足してきているのに、その消費量はコンスタントに増えている。新しい油層を探す必要がある。陸地では望み薄だが、海洋の水深の浅い水域が残っている。今日すでに大陸棚での石油とガスの採掘が、石油とガスの全採掘量の約1/4を占め、急速に増大している。将来、海洋の底から銅、ニッケル、コバルトといった貴重な金属を得ることができるだろう……　現在の推計では、海底のマンガン団塊を採取すれば、向こう30年間に二億九〇〇〇万tのニッケル、二億四〇〇〇万tの銅、六〇〇〇万tのコバルト、六〇億tのマンガンが得られる(参考までに挙げておけば、一九八一年に米国はニッケル二〇万一三九〇t、銅二一五万t、コバルト六一六〇t、マンガン一一五万tを消費した)。その上、海水自体もさまざまな鉱物質に非常に富んでいる。海洋の広範な工業化の時が到来したのだ。

ブレホフスキフ　海洋を工業化することは絶対に必要で、これはすでに行われている。もっとも、時として性急

に、軽率に、だが。

多くのことが証明しているように、人類は海洋への合理的な進出ではまだやっと一人前になりつつあるところだ。海上装置やタンカーでの再三の事故の結果を思い起こせば十分だろう。技術は今のところ完全と言うにはほど遠い。まだまだやるべきことが沢山ある。何よりもまず海洋自体を研究することである。

海洋の研究は間断なく行われている。ソ連の水物理学者が中部大西洋とインド洋で、米国の水物理学者が太平洋で深海の逆流を発見したことによって、熱帯の海水の動きの合法則性を明らかにすることができた。一九七〇年に大西洋でソ連の海洋学者が直径二〇〇―三〇〇㎞の巨大な渦の存在を確認した後に、同じような渦がすべての海洋で発見された。

海洋で最近発見された水中波は特別の関心を呼んでいる。これらの波は非常にのろく、その振動期は表面波よりも著しく長いが、しかしその振幅は数百mに達しうる。われわれはこれらの波の発生のメカニズムを解明しようと試みている。

モーニン　われわれには大気と大規模な海流の大循環の合法則性が分かっている、とすでに言うことができる。この点で特別の役割を果したのが、大洋で長期の海流観測をした熱帯大西洋のソ連の調査隊〝ポリゴン〟、バーミューダ三角水域のソ米合同調査隊〝ポリモデ〟、その他である。

これらの調査隊は、昔から有名な大海流を背景にして強力な渦巻きが海洋に発達することを示した。この渦巻き運動はよく解明されている大気中の低気圧と高気圧に似ている。だから大気力学の多くの理論的命題は、大洋の循環理論をつくるためにも適用できる。

グリー・マルチュク・アカデミー会員が提唱した、世界の海洋では大気との相互作用でほかより活発な水域を発見できるという考えは、すでにわれわれの国家的計画〝ラズレーズイ〟で発展させられた。この計画による調査は一九八一年に開始された。最初の5年間で、天候の本質的な変化をもたらす大洋と大気の温度の異常を形成するメカニズムを知ることができるものと期待している。次の5年間にはもうこれらの異常を予測できるようになろう。

海の宝庫を

ストゥデネツキー　この20年間に人類が世界の海洋から得る食料品の重要性は特に強く感じられるようになった。一九六一年から八一年までに魚類その他の海の生物の漁獲は、世界全体で四三三〇万tから七四八〇万tに増大した。

今日では世界の住民一人当たり、年間15kg以上の水産物が漁獲されている。その半分以上は飼料用ミール、さまざまな配合飼料、肥料に加工されてはいるが、水産物は文句なく食糧問題の解決に役立っている。これはいわば海洋の間接的貢献だが、われわれが何よりもまず関心があるのは漁業である。魚は世界の住民の不足している良質の動物たん白源だからだ。

今日まで伝統的な種類の魚の漁獲は、主に北半球の温帯水域の大陸棚や大陸斜面に集中している。水域の全面積のわずか10―15%が世界の漁獲高の大部分を占めている。これは操業の便利さ（漁港が近いこと、あまり深くない所で漁ができること）と、大陸棚が高い生物学的生産力を持っているという自然の生物学的理由による。

しかし公海での漁業の可能性を過小評価してはならない。公海の漁業資源の開発は、一部の種類の魚に対する現在の高められた漁獲負荷を考慮に入れるなら、大きな可能性を約束している。五〇〇種の漁業対象のうち、現在およそ90種の魚が漁獲されている。つまり、最も貴重な種類だけが漁業の対象になっているのだ。新しい水生生物の漁獲の見通しの調査と評価が進められ、ギンダラ、オヒョウ、ソコダラといった一〇〇〇m台の深海に住む魚の漁法の開発が行われている。われわれは発光カタクチイワシ――小さな深海魚で数百万t漁獲することができる――の漁の可能性を研究している。

多くの魚が食べている動物プランクトンの漁は極めて有望である。近年漁業関係者はオキアミ漁を開発し始めた。その資源量は数億tと評価されている。かいあし類もこれに劣らず有望である。オキアミもかいあし類も多くのたん白と脂肪を含み、その肉は栄養的に牛肉に劣らない。

マルチュク　あなたは漁業における不均等な漁獲負荷について述べた。恐らくニシンが姿を消した原因はこの点にあるのだと思う。

ストゥデネツキー　ニシンの場合は、再生産の必要性を考慮せずに行われ、親魚の群れを破壊してしまうような漁業の最も悲劇的な例の一つだ。

ニシンは最も量の多い海産魚とみなされていた。そしてその資源の減少は、主要漁業国の漁船団の操業能力が危険な限界に達したことを示している。現在漁業は単に個々の魚群にだけでなく、しばしば海の生態系全体に影響を及ぼしていると言える。だから魚類資源の研究と保護における国際協力は切実な問題だ。

しかし科学的に根拠のある操業の調整は、魚類資源を増やし漁獲量を増大する唯一の道ではない。第二の方向は人工産卵場、人工漁礁の設置、魚の採餌区域の土地改良、すなわち魚群の再生産と索餌の条件の改善である。そして第三は海洋牧場――魚類とさまざまな海洋生物の人工増殖である。

海洋牧場は毎年人類にカキとイガイのほぼ全漁獲量、ホタテガイの1/3を供給している。海洋牧場は主に不凍海を持つ諸国で発展していると言える。にもかかわらずわれわれも海洋牧場で一定の成果を収めており、しかもそれは南の海だけに限らない。特にサケ・マスの数百万尾の当歳魚がバルト海やバレンツ海の水域に放流されている。

マルチュク　海洋の問題は〝問題の大海〟だと言われている。今日人間の手中にあるのは先端に骨のついたもりではなくて、ニューヨーク最大の高層建築がすっぽり入る底引き網である。ジャック・イブ・クストー、アレン・ボンバーなどのような現代の有名な海洋学者が語った、海洋からエネルギーや食物を獲得することはいわば第二の課題で、生命そのものの源、地球上のわれわれとあなたがたの存在の源としての海洋の確保が第一の問題として残るだろう、という言葉を思い出すのもむだではないと思う。海洋を略奪的な搾取から、文明の廃棄物による不合理な、今世紀まで前例のなかった汚染から守ることである。人類は、もし今後も生き続けることを願うなら、社会・経済体制の相違はあっても、この面で団結しなければならない。国際法の厳守のためだけでなく、海洋、陸地、地球周辺の空間での人間の行動を規制するような強固な、真に全人類的な科学的基盤をつくるためにも団結しなければならない。基本的な科学的基盤は水上および水中の調査研究の現代的技術、たえず改良される技術をも前提としている。

モーニン　そうだ、水中および水上の学術調査船団は量的にも質的にも増えるだろう。すでに今日、ソ連の科学は第一級の学術調査船を持っている。これらの調査船で多方面の水上および水中の調査研究を行い、得られた観察資料を直ちに処理することができる。わが国はこのような大型船を数十隻持っている。その多くは、特に今日の水文地質学には欠かせない潜水調査艇を搭載できる。

判明しているように、地球の地質学的発展の多くの基本プロセスを認識するためのカギは大洋底にある。そして海底からそのカギを手に入れることは、特殊な装備を持つ水上および水中の船舶の助けを借りて初めて可能になった。

ソ連の水文地質学者たちは、大陸プレートの動きを引き起こす深部プロセスの発生に科学的説明を与え、早くから中央海嶺の本質を解明した。彼らは大洋底での玄武岩磁気を地球化学的に説明した。また、津波や一連の他の重要な地質学的プロセスを引き起こす地震のメカニズムも研究した。

マルチュク　海洋の富を経済活動に巻き込むにあたっては、人間は将来の世代のことを考え、海洋の生態系の保護のために最大限の努力を払わなければならない。

生態系を守れ！

ポリカルポフ　生態系が最大限どの程度の汚染に耐えられるかということについての正確な知識が必要だ。ここに世界の海洋表面の鉛によるグローバルな汚染に対するわれわれの評価の一例がある。水銀やポリ塩化ビニールではなく、鉛こそが最も危険な汚染物質であることが分かった。今日、生態系は辛うじて鉛を除去している。今後この鉛の除去のプロセスが〝詰まる〟こともありうる。そうなれば海洋の死活的に重要な層での鉛の集中が始まろう。酸素とプランクトン藻の生産に対する鉛の影響がいつ出てくるかということは、極めて深刻な問題になっている。この問題の回答をできるだけ速く得ることが必要だ。

すさまじい工業・農業活動は海の生態系に大きな変化をもたらしている。人類が原因となっている影響のさまざまな条件下でこれらの生態系がどれほどの信頼性を持っているかを明らかにするには、多くの国の専門家の努力を結集する必要がある。科学者たちが国際放射線生態学者連盟を結成したのは偶然ではない。連盟の活動に25の先進国の代表が参加している。その課題は今のところ原子力発電だけに関係しているが、しかし連盟は、核戦争の脅威の増大に関連して現代の焦眉の問題の解決を回避することはできないだろう。

人類には、自然との合理的で、均衡のとれた、健全な共存を確保することで多過ぎるほどの心配事がある。とても軍拡競争に力を割いている余裕はないはずだ。すでに今日、人間は生物圏を破壊する能力を持っている。しかし人間が技術的手段によって再生できる自然の機能は一つたりともない。たとえば、必要な量の酸素の生産を考えてみればいい。比類のない極めて貴重な現象である生物圏を破壊させないこと、これはわれわれの猶予できない課題である。

海底の資源は誰のものか?

法学博士候補 L・ボリソフ

沿岸諸国の管轄権外の海洋の底に眠る天然資源は、誰のものか? 最近この問題は重大問題となっており、事実上すべての国がその解決に関心を寄せている。なにぶん海洋底の若干の区域にあって、大量の銅、ニッケル、コバルト、マンガンを含有する推積岩——多金属凝塊の開発権を誰がどのような条件で所有するかが問題になっているからだ。

一九六七年の国連総会でA・プラド・マルタ大使が各国の管轄外の海底を「人類の共同財産」にすることを提案して以来、一九七四年からの国連第3次海洋法会議の会期を含めた国連のわく内で、前記資源の開発活動の法的規制問題は、検討に検討を重ねてきた。国連のほとんどすべての加盟諸国の外交官と法学者が8年にわたって交渉を続けた結果、やっと海洋の平和利用の大多数の種類を詳しく規制した条約を作成することができた。

その意義は極めて大きい。世界の諸民族は、主に領土を争って数千年間も戦争をやってきた。世界の諸民族、全人類、その現在、未来の世代は、海洋を国際資源紛争の原因にしないよう切望しており、各国の利害が衝突する場所で、問題の平和的解決を図りたいと願っている。ましてや科学技術革命の時代を迎えた今、海底を含む海洋の天然資源の無統制な略奪を防止し、科学的な裏付けのある開発を確立しなければ、原則的に見て資源は根こそぎ採り尽くされてしまう恐れがある。諸国家が広く互恵の協力をやり、各国の利害を互いに考慮に入れてこそはじめて、海洋とその資源の研究調査、利用という政治的にむずかしい問題の解決は可能である。

外交の成果

一九八二年に作成され、一五九カ国と諸機関が調印した国連海洋法条約は本文三二〇条と九つの付属書から成る。これは単なる技術的なテキストではなく、事実上どの行、どの言葉も、諸国家の重大な、原則的とさえいえる政治的利害にかかわりがあり、長い交渉と、決して簡単とはいえぬ妥協の結果成立したものである。

条約の作成もスムーズには進まず、先進資本主義諸国と発展途上諸国、沿岸諸国と内陸諸国、群島諸国と海峡沿岸諸国などの利害が衝突した。

最大の難問の一つは、各国の管轄権外の国際海底区域(いわゆる深海海底)の法規制の問題であった。会議のすべての参加者はかなり早くこの区域とその資源を「人類の共同財産」と宣言することに同意したが、この概念の解釈とこの概念に基づく海底の多金属鉱物開発活動の具体的規制の設定は、難航した。「人類の共同財産」という概念をいわゆる新国際経済秩序(発展途上諸国はこの秩序の確立をめざして積極的にたたかっている)の基本要素の一つと見ている発展途上諸国は、とくにこの問題に強い関心を示した。

先進資本主義諸国ならびに発展途上諸国は、深海底の規則問題で他のグループの国の正当な利益を無視する一方的な立場をとることが多かったと言わねばならない。そこで社会主義諸国は建設的でダイナミックな政策をとり、つまるところバランスのとれた客観的に互恵の妥協的な解決を図らねばならなかった。そして全体として交渉は、外交史上最大の妥協をやってのけた。

こうして作成された条約は、公海の自由の原則を保障し、領海と大陸棚の外縁の範囲や国際海底区域とその資源の利用方式を定め、排他的経済水域、群島水域、国際海峡について規定している。

こうして勝利を祝うときが来たかに思われたが、ある意味ではたたかい、条約に定められた原則や基準の実現をめざすたたかいは、始まったばかりであった。

前例のないこと

条約第11部に定められた国際海底区域の開発規定によると、国際海底機構とこの機構に属する国際公社(エンタープライズ)(この公社は国家、国営企業、私企業と並行して自主的に海底から鉱物を採取する)が設立される。こんな例は史上はじめ

てで、世界で初めて国際機構=企業が加盟諸国によって集団的に管理されて、開発が諸国グループの大半の経済状態と世界経済全体に大きな影響を与える可能性のある鉱物資源の採取と販売にたずさわる。

さらに条約によると、国際機構は加盟諸国のかなり重大な経済的利害にかかわる若干の問題に関する決定を採択しても差し支えないし、またあらゆる具体的な事態に即応し、ときには一部の国またはそれらの国のグループのはっきりした同意を得ずに決定を採択してもかまわない。この規定により一連の国々には一定の困難が生じる。国際公社に鉱物採取技術を移転する問題に関する規定も、一連の国には困ることである。条約の条件によると、条約が発効するには、最低60カ国の批准が必要である。現在批准国は二〇数カ国であるから、近く条約が発効するとは思えない。発効の障害になっている前述の困難や他の若干の困難を除去または緩和する任務を負っているのは、国際海底機構と国際海洋法裁判所の準備委員会であり、委員会はすでに3回会期を開催している。委員会は例外なくすべての国が条約の諸原則に反する行動を差し控えてこそはじめて成功を収めうる。この点をここで強調しておかねばならない。

海底区域の留保

第3次国連海洋法会議の諸決議により、条約発効前に資源の事前採掘ができる若干の海底区域が割り当てられ、留保される。当面日本、ソ連、フランス、インドに1区域ずつと米国、英国、カナダ、日本、イタリア、西独、ベルギー、オランダの会社を擁する四つの国際コンソーシアム(企業連合)に一区域ずつ、計8区域以内が割り当てられることになっている。これらの決議のねらいは、海底調査と海底資源開発技術の研究に対するこれらの国やコンソーシアムの投資を守ることにある。

資源の探査、試掘申請は準備委員会が受理、登録する。申請受理の条件によると、自国名または国営企業、コンソーシアムの名で申請を出す国は、条約に調印しなければならず、また申請した国際海底区域の座標の重複指定と関連して起こる紛争も調整しなければならない。

ソ連、フランス、日本、インドは実質的にこの二つの条件を実施し、条約に調印し、準備委員会に申請を出した。さらに一九八四年12月末に区域の座標を交換し合い、ソ連、フランス、日本の区域の一部重複に伴う問題の調整交渉を始めた。交渉の結果係争問題はすべて解決した。残余の困難を取り除くには、準備委員会の他の全委員の一致した決定が必要であるが、これら4カ国の申請が近々中に準備委員会に登録される公算は大きい。

しかしこの問題を解決するうえでも、準備委の活動全体にとっても、条約未調印の米国およびその若干の同盟国、まず同じように未調印の英国と西独の行動が、重大な障害になっている。四つのコンソーシアムの資本の大半を握るこれらの国が、条約に調印しない以上、四つのコンソーシアムは実質的に登録権を失った。準備委員会ではだめだとあって米、英、西独は他の五つの先進資本主義諸国と組んで、昨年8月深海底資源に関するいわゆる暫定取り決めを結んだ。この協定は、条約の代わりに海底資源の開発と海底区域の自分勝手な分割の体制をつくろうとするもので、世界の圧倒的多数の国々から強く非難された。

それにもかかわらず、米国政府は太平洋の国際海底区域のマンガン団塊の探査許可を一連のコンソーシアムに与えた。これと関連して一九八五年6月6日付のタス声明は「深海底資源を勝手に専有するという形であらわれた、国連海洋法条約に違反する行動は、それが誰の行動であろうと、ソ連は承認してこなかったし、今後も承認しない」と指摘した。さらにタス声明は、一九八四年8月3日付の分離協定を実現しようとする米国の行動は、「米国が圧倒的多数の国々の糾弾を受けたその方針——条約を掘り崩し、海洋で勝手な行動が行われるという状況をつくり出すことをめざす方針をとり続けていること」を証明していると強調した。

分離協定参加国の中に条約に調印し、さらに準備委員会に深海底区域開発の申請を出し登録を待っている国々も入っているという事実は、遺憾千万である。これらの国は深海底資源に対する米国の勝手な分裂行動を支持し、実質的にその行動に参加して、準備委員会の活動の成果を大きく妨害しているだけでなく、自国の国益をもはっきり傷つけている。

この先どうなる?

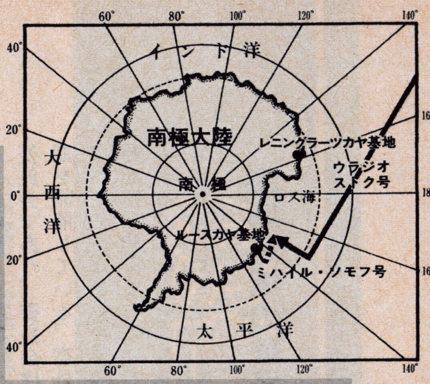
この先事態はどうなるだろうか? 一方にほとんどすべての国が調印した条約があり、準備委員会が活動している。別の一方に、条約の掘り崩し、一方的な優先権の取得、深海底資源のよりよい、より大きな部分の奪取をねらった、世界共同体の明確な意志に反する勝手気ままな不法行動が見られる。

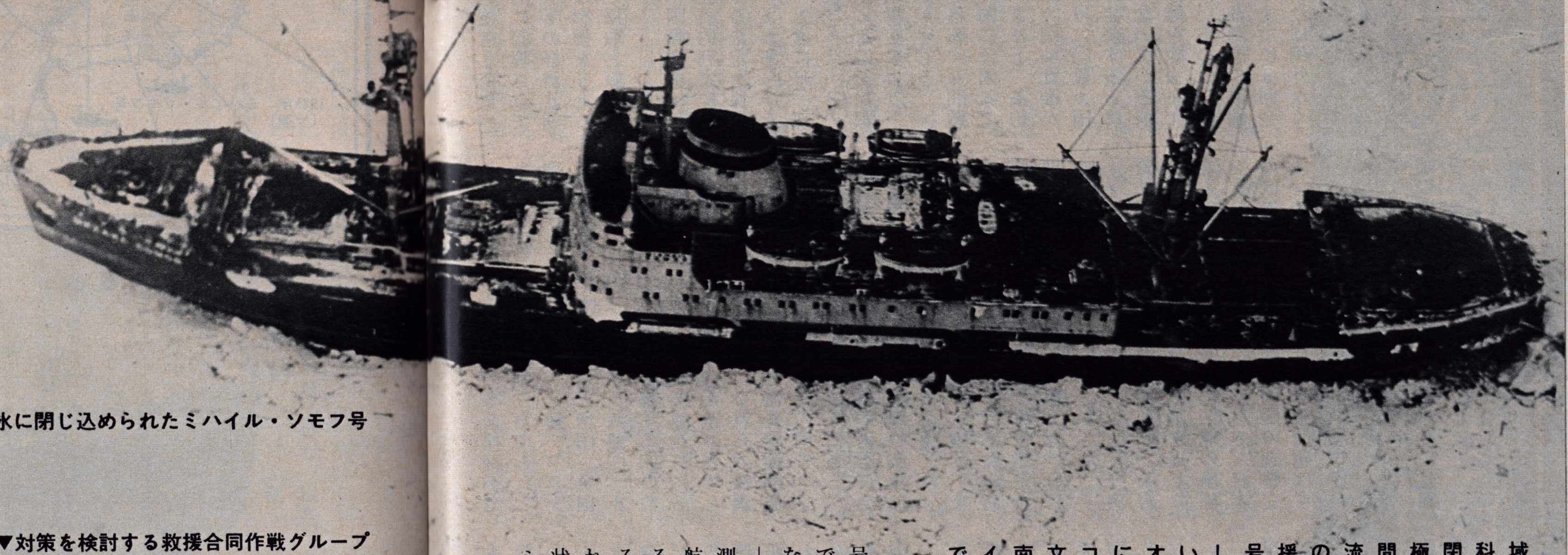
さて、国際海底機構の創設がぶちこわしになるか、国連海洋法条約が実現するか、それとも何十カ国もの多年の努力が、海洋とその資源の調査・利用という極めて重要な政治、経済問題を互恵の国際法的解決に導くかどうか、二つに一つである。海洋に諸国民の互恵の協力関係が樹立されるか、それとも混乱と横暴が支配するかは、現代諸国家の政治的意思にかかっているから、各国の責任は極めて重大である。ソ連は各国がこのことをよく認識するよう呼びかけている。

南極の氷海のとりこ

観測船ソモフ号の救出

本誌記者 ウラジーミル・ハルラメンコ





氷に閉じ込められたミハイル・ソモフ号

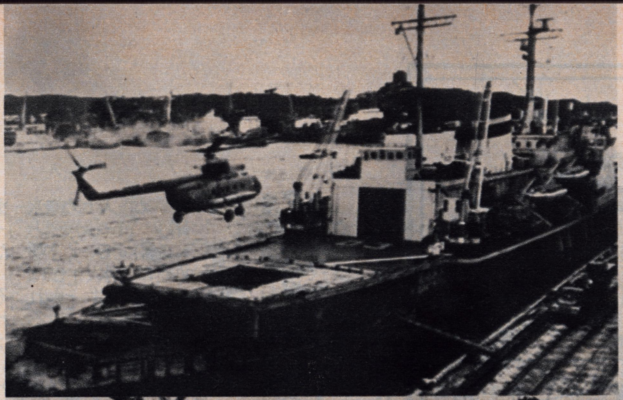
南極のロス海（西南極の太平洋水域）でソ連の第30次南極観測隊の旗艦、科学調査船ミハイル・ソモフ号が氷に閉じ込められてしまった。南極の冬と極夜の困難な条件のもとで、一三三日間にわたってミハイル・ソモフ号は漂流を余儀なくされた。観測隊の他の船の乗組員や、ミハイル・ソモフ号の救援に駆けつけた砕氷船ウラジオストク号の特別隊員たちは、漂流海域の恐ろしい自然力に対して、勇気、団結、高い技能をもって立ち向かった。ウラジオストク号がミハイル・ソモフ号救援に向かっている間、記者（ハルラメンコ）はボリス・ヒーミチ・ソ連国家水文気象・自然環境監視委員会北極海・南極海局局長にインタビューし、ミハイル・ソモフ号が氷から解放されるまで、局長とコンタクトを取りつづけた。

「ディーゼル電気船ミハイル・ソモフ号が氷に閉じ込められてしまったことで、船長と乗組員を責めることはできない。南極の秋から冬への移行期（3－4月）には、1日先の氷の状態を予測することさえ不可能なのだ。氷海を航行する者にとって最も手強い敵である強風は、特に〝風極〟と呼ばれているルースカヤ基地地域のあまり調査されていない一帯では、数時間のうちに状況を変えてしまう」とボリス・ヒーミチ局長は語った。

ミハイル・ソモフ号がこの地域に着いたのは3月9日、通常の南極調査作業のスケジュール通りだった。ミハイル・ソモフ号はルースカヤ基地に物資と交替の越冬隊員を送り届け、さらにレニングラーツカヤ基地とモロジョージナヤ基地へ行くことになっていた。3月15日、荷役作業中、とつぜん強風が吹き始め、風速は50ｍにも達した。そうでなくても困難な状況は、極度に悪化した。強風は氷の流れを変え、船は氷に封鎖されてしまった。

氷に閉じ込められながらも、ミハイル・ソモフ号は荷役作業をつづけた。極夜のわずかな光（1昼夜のうち2－3時間薄明るくなる）を利用して、船員とヘリコプターの乗員はルースカヤ基地へ燃料や食糧を輸送した。彼らの勇気のおかげで、基地への翌1年分の補給は完了した。レニングラーツカヤ基地へ物資と交替の越冬隊員を届ける仕事は船団の他の船――パーベル・コルチャーギン号、カピタン・ムイシェフスキー号、科学調査船アカデミー会員ネクラソフ号が遂行した。

その間ミハイル・ソモフ号は、自力で北へ脱出しようと試みていた。ルースカヤ基地地域での主要な危険は氷山である。少し前に棚氷から分離したばかりの氷山があちこちに浮かんでいた。そんなのが近づいたら、押しつぶされてしまう。強い風が吹けば、当然のことながら危険は増大する。ミハイル・ソモフ号は氷の割れ目や開水面を選ん



救援のためにナホトカを出発する砕氷船ウラジオストク号



出発を前にしたウラジオストク号の乗組員



ミハイル・ソモフ号と通信するレニングラードの北極・南極研究所の無線局長N・オシペンコ（右）

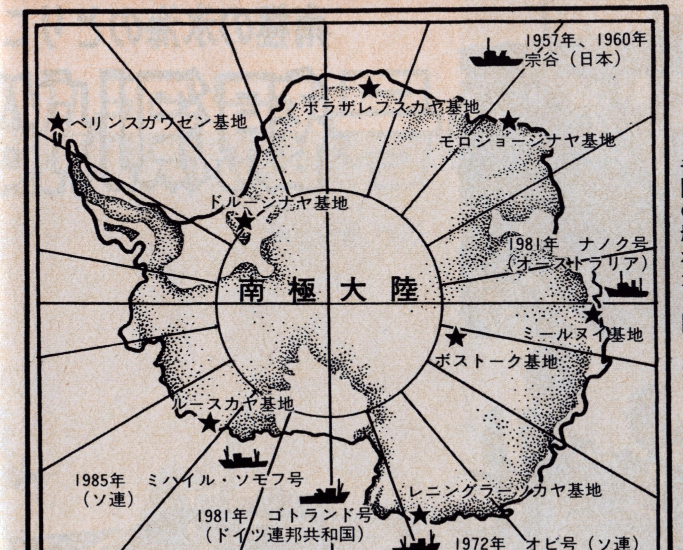


▼対策を検討する救援合同作戦グループ（左から人工衛星の情報分析専門家V・エフセーエフ、北極・南極研究所副所長N・コルニロフ、同部長A・ロマノフ、同副所長E・コロトケビチ、同所長B・クルツキフ、水文気象局長R・パンチュギン）

で危険な氷山域から脱出することに成功したが、こんどは広大な太平洋海氷原の真っただ中にいることになってしまった。それはいわゆる重い氷、残留氷と呼ばれる"年季"の入った氷が埋め尽くしている海域である。4月に入って氷に固く閉ざされてしまったため、船は身動きがとれなくなり、氷と一緒に西へ、ロス海の方へ漂流し始めた。漂流は春（9－11月）までつづくと予想された。

このような状況のもとで、ミハイル・ソモフ号の乗組員の大部分を船団の他の船へ移すことが決定された。ヘリコプターで77人が運び出され、乗組員の一部、科学者、ヘリコプターMI8のパイロットたち、計53人が残った。撤退組と残留組を分ける原則はただ一つ——船の維持といくつかの調査研究に必要な最小限の人員が残ったのである。これまで、この海域で冬を過ごした者はだれもいない。状況の重大さにもかかわらず、科学者たちはこのチャンスを逃したくなかったのだ。パイロットたちには氷状の偵察と人々を氷上に移す——危険が迫ったら太平洋海氷原の北端で常時待機しているパーベル・コルチャーギン号に移す、という課題が与えられた。

素朴な読者なら次のような質問をするかもしれない——南極の冬の氷海を長期間漂流するのは非常に危険なのに、なぜ全員を撤退させなかったのか、と。記者もこの質問を、極地へ行ったこともあり、長年にわたって砕氷船で北極海を航行した経験のあるボリス・ヒーミチ局長に向けてみた。局長は答えた。「船を棄てるのは沈没するときだけだ。"生きている"船を運命のままに任せる伝統はソ連にはない。極限的な条件のもとで人々の安全を最大限保障する——これが問題の唯一正しい解決法だ」



各国の船が氷に閉じ込められた場所



▼氷状偵察に飛び立つミハイル・ソモフ号のヘリコプター

レニングラードの北極・南極研究所の責任ある専門家たちも、モスクワに特別に編成されたミハイル・ソモフ号救援のための国家水文気象・自然環境監視委員会、海運省、民間航空省の合同作戦グループのメンバーも、同じ意見だった。

ミハイル・ソモフ号に乗っている人々の安全を確保し、船を助けて厚い氷の中から導き出すために、6月12日、ナホトカから砕氷船ウラジオストク号が出発した。砕氷船は南極大陸に向かって急行し、7月1日にはもうニュージーランドの首都ウェリントンに着いた。ここで最大限の燃料と食糧を積み込んで、さらに前進した。

航海は苦しいものだった。砕氷船は南極行きは初めてだったので、これまで経験したことのない揺れを再三体験した。たとえば7月9日、非常に強い風のため波の高さが6－7mに達し、船の傾斜は時折45度に近付いた。7月15日砕氷船は、パーベル・コルチャーギン号がソモフ号を見守るという容易ならぬ当直を務めていた海氷原の端に近付いた。砕氷船はコルチャーギン号からヘリコプターを受け取り、南への航海を始めた。この航海では氷の中を一〇〇〇km以上進まなければならなかった。

砕氷船は出来て間もない氷を割り、古い残留氷の障壁をたたき割った。砕氷船は前進しながら、細かい氷と雪の浮いた水路をあとに残した。何度も甲板からヘリコプターが飛び立ち、極夜の中で氷の上を旋回しながら砕氷船が前進しやすい道を探し求めた。

氷海航行の戦術に通じているレニングラードの北極・南極研究所の学者グループは、ソモフ号の上でソ連の人工衛星や南極観測ステーションからの氷状に関する情報を集めて分析し、砕氷船の航行を科学的、能率的に進めるようにした。不断の緊張状態の中で、モスクワとレニングラードの国家水文気象・自然環境監視委員会の専門家たちが砕氷船やソモフ号とたえず無線連絡をとりながら同じ仕事を行っていた。

ワレンチン・ロドチェンコ船長を始めとするソモフ号の乗組員は船の機関と装置をたえず作動状態に保っていたので、ソモフ号は氷の状況が許せばいつでも積極的な行動を開始する用意ができていた。調査研究活動も中断されなかった。ソモフ号は今日までだれも詳細に調査しなかった水域で、事実上浮漂科学実験室に変わった。ソモフ号では系統的な観測——気象観測、水文学的観測、氷の観測が行われ、人工衛星からの情報が受信されていた。この水域の氷の厚さ、浮漂、形状について、強力な圧縮を受ける中での氷と船体の相互作用について貴重な科学情報が得られた。

7月23日、ウラジオストク号から発進したヘリコプターがミハイル・ソモフ号近くの氷に降りた。両船の間に"血の通った"不断の連絡が確立された。MI8ヘリコプターは最初の飛行でソモフ号の乗組員に最も必要な物、何よりもまず肉親や近しい人からの手紙を届けた。いまや乗組員全員は、砕氷船本体が船に近づいて来るのを一日千秋の思いで待っていた。

……砕氷船の前にはあとわずか70kmの氷の障害が横たわっているだけだった。しかし、氷の厚さが2－3mあるため、ウラジオストク号は直進を阻まれた。この型の砕氷船は連続砕氷航行だと厚さ1m20cmまでの氷盤しか砕くことができない。このためここでは、助走をつけて船首を氷盤に乗り上げて氷を砕き、船をバックさせて再びこれを繰り返す、チャージング航行でしばしば前進しなければならなかった。目標はごく近くにあったとはいえ、これは極めて困難な1キロ、1キロだった。

ゲンナジー・アントヒン船長とサドチコフ副船長がたえまなしに当直を務めた。アルトゥール・チリンガロフ救援隊長もブリッジから離れず、無線でヘリコプターと砕氷船の行動を調整していた。

この水域の氷状はめまぐるしく変わる——冬季の厳寒期だと言うのに、風と潮流はたえず氷盤に水面や割れ目をつくる。砕氷船のすべての部署、何よりもまず船長の主要な課題は、良好な通路を見逃さず、適時に発見し、必要な方向に進むことにあったが、この課題は遂行された。

モスクワ時間7月26日8時30分（船内時間17時30分）、砕氷船ウラジオストク号はミハイル・ソモフ号の前の最後の氷壁に到達し、11時までにソモフ号の周囲の氷を割り、船を誘導しはじめた。そこは南緯74度54分、西経一五三度2分の地点だった。ようやくソモフ号は氷海の捕らわれの身から解放された。前夜はまだ砕氷船とソモフ号の間に70kmの距離があり、待ちに待った出会いがこんなに早く実現するとは信じがたかった。長い長い静止状態の後に、ミハイル・ソモフ号は砕氷船が作った水路を自力で進んだ。

前方にはさらに容易ならぬ数百カイリが控えており、両船の乗組員は氷との緊張した闘いを続けている。しかし読者の皆さんがこの号を受け取るころには、南極を舞台にしたこの叙事詩的事件は無事完結するものとわれわれは確信している。8月6日にミハイル・ソモフ号とウラジオストク号の乗組員に伝えられたミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長のメッセージにも、この確信と、両船乗組員の忍耐と勇気、自己の責務への忠誠に対する高い評価が述べられている。ソ連の船員と研究者たちの勇敢な行為は、人類による極地開発史の新たな一ページとして後世に残るだろう。

ソ連の視点

平和な未来をめざす反核闘争

V・アルセニエフ

世界はいま、不穏な時代のまっただ中にある。すでに蓄積されている大量の核兵器は人類の存在そのものをあやういものにしている。さまざまな大陸の何億もの人々が、核破局の脅威、広島、長崎が繰り返されることの脅威に対してますます強い不安を感じている。

これが現代の現実なのだ。そしてまさにそのことのために、地球上に住む人々は、政治、宗教その他の信条にかかわりなく、理性の声に耳をかたむけ、積極的な共同行動によって核破局防止に尽力することを余儀なくされている。

先ごろモスクワからは核兵器のない世界をめざそうとの呼びかけが行われた。日本原水爆被害者団体協議会（被団協）のメッセージに答えたミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は、核兵器の廃絶とその行使の危険の解消をめざす路線に一貫して従うとの、ソ連指導部とソ連国民の決意を改めて強調し、戦争と武器のない世界を理想とするソビエト国家の原則的な対外政策路線の詳細で論拠のある説明を行った。

ソ連は、地球上のどこであろうと"新たな広島"の出現を許さぬよう、できる限りの努力を払っている。平和と軍縮をめざす闘争の一貫した立場からソ連は今日、ジュネーブで核軍備・宇宙軍備に関するソ米交渉を行っている。ソ連は、交渉の相互に関連のある三つの方向すべてに関して現実的な提案を打ち出しており、それについて米国側と達した合意に完全に従って行動している。その合意の中には、核兵器の完全廃絶を軍備制限・削減分野における努力の最終目標とするとの条項も含まれている。目下のところ、軍拡競争の宇宙空間への拡大を阻み、地上での軍拡競争の停止を導くような決定的な転回がみられないのはソ連のせいではない。

もう一つ思い出してもらいたいのだが、ソ連は、原子力時代が幕をあけたばかりの一九四六年に早くも核兵器禁止に関する国際条約の締結を提案し、その後も一度ならず善意を発揮し、国際緊張の緩和や核戦争の危険の防止を呼びかける提案を行ってきた。広島の悲劇の日である本年8月6日からすべての核爆発を一方的に停止し、米国側にも核爆発の自制と同様のモラトリアムの実施を求めるソ連の新たな平和イニシアチブもその一環だ。核兵器を生産・入手せず、自国の領土内に保有しない国々に対し核兵器を行使しないというソ連の約束もそうだし、国連の演壇から打ち出した軍縮分野におけるソ連の一〇〇を越える提案もそうだ。ソ連は、世界のさまざまな地域に非核地帯をつくることをめざす多くの国の努力にも理解ある態度をとっている。しかしそこでは、ソ連その他の社会主義諸国の態度いかんにすべてがかかっているわけではない。自分たちの野望のために緊張の激化をあて込み、"第一核攻撃"戦略を保持し、さまざまな地域、ひいては全世界をもっぱら将来の核破局の舞台とみなしている勢力もある。しかも、同盟諸国にも核兵器を押しつけ、それらの国を公然と核の人質に変えようとする試みがなされている。それらのもくろみの危険性は、どんな調停者的言辞、いかなる"防衛構想"によっても隠すことはできない。

そうしたもくろみの実施は阻止できるし、阻止しなければならないとソ連人は確信している。ソ連の指導部が一度ならず言明してきたように、この気高い目的の達成を心から願うすべての人々と協同行動をとる用意がある。

人々の意識の中で広島、長崎の恐怖は、"非核三原則"を政策の基盤に据えている国、日本と結びついている。ソ連はこの原則を尊重している。しかし、非核三原則の絶対的順守を疑う声が諸外国ばかりでなく日本国内でも聞かれることについては警戒心をもたないわけにはいかない。核兵器を搭載した米国の軍艦や潜水艦が日本に寄港し、核兵器の装備可能なF16戦闘爆撃機が日本領土に配備されているといった報道が頻繁に聞かれるようになった。「どうやら、必ずしもすべての人が第2次世界大戦や広島、長崎の原爆の教訓から、しかるべき結論を引きだしたわけではないようだ」とゴルバチョフ書記長は強調した。

ソ連は、平和を愛する日本国民に大きな尊敬の念をいだき、日本国内の反戦、反核運動に連帯しており、ソ日関係の前向きの発展をあらゆる手段で促進しようと努めている。ソ連の世論によれば、善隣と互恵協力、信頼はソ日間の相互交流の決定的要素となるべきであり、そうなれば隣国である両国にばかりでなく、全世界の平和と国際安全の強化にも役立つはずだ。こうした立場に立つソ連は日本に対し、政治・軍事分野における極東での信頼醸成措置を審議・作成することを提案し、日本側が非核条項を一貫して厳守することを約束するなら、日本に対し核兵器を行使しないという約束を確認するような協定を締結する用意があることを表明した。日本と善隣関係のうちに暮らしたいとの意図はソ連のその他の建設的な提案でも強調されている。

広島、長崎への原爆投下の40周年にあたる今年、すべての善意の人々は、「ノーモア・ヒロシマ！」と声を合わせて呼びかけている。ソ連の一貫した対外政策路線は、地上のすべての人にとって最も切実なこの課題の解決に現実的な貢献をもたらしている。

現実主義的立場は"力の政策"と相いれない

――ソ米首脳会談を前にして

ノーボスチ通信政治評論員　ワジム・コルツノフ

きたる11月19―20日にジュネーブで開かれるソ米首脳会談の準備が、モスクワとワシントンで始まった。

この首脳会談は、ソ米関係の緊張の克服や、未来のための建設的な路線を策定するためのよき相互理解に役立つ好ましいチャンスを開くものとなりうる。ソ米首脳が交渉のテーブルについてさし迫った問題を討議するという事実自体は、ソ米双方に多くのことを義務づけていると言える。

国際世論の大多数は、6年ぶりのソ米首脳会談の再開を朗報として歓迎した。歓迎したのは、世論の大多数であって、決して全部ではない。たとえば米国のタカ派は、いまのところふだんのとおり悪名高い"力の政策"の気分と軍事的優位をめざす冒険主義的もくろみを抱いて、首脳会談の開催の決定を迎えており、一部の者は会談の前進を阻止し、冒頭から会談をぶちこわそうとはっきり努めている。たとえばR・パール米国防次官補は7月13日東京新聞記者とのインタビューで、米国はソ米核・宇宙軍備交渉を行き詰まらせた"スターウォーズ"計画を絶対に見直すつもりはないと述べた。残念ながら米国の指導部内には、R・パールのような人はほかにもいる。

もちろん会談の結果を今から予測するのは時期尚早である。だが、ソ米関係や国際生活全体のさし迫った問題に対する若干の原則的なアプローチについて、今の段階で考えてみるのも悪くはあるまい。

シュルツ米国務長官は近づいたソ米会談をコメントし、米国政府は米ソの政策の違いをはっきりわきまえており、社会体制の違うソ米関係を建設的に発展させることは、むずかしい問題であることを知っていると指摘した。

ソ連側も、ソ米両国の対外政策が根本的に対立していると見ている。しかし、そうであっても双方の首脳が、現在および未来の世代の運命に対する責任感と善意をもてば、双方はソ米両国民の相互の安全と全人類の安全のために、対決から相互の利益に基づく協力へ通じる道を発見することができるし、また発見すべきである。

今日ソ米間に見られる社会体制やイデオロギーの違い、多くの国際問題でのさまざまな見解は、以前にも見られたものであり、かつて両国は互いに理解し合い、多くの分野で協力し、共通の脅威にさらされたときは同盟国にさえなった。だからそういう違いは決して乗り越えることのできない障害ではなかった。人類の存在そのものを危うくする共通の脅威が一〇〇倍に増大したいま、どうして両国は脅威回避の現実的な道を発見できないことがあろうか？

このかなりむずかしい課題を解決するためのソ連指導部の原則的な態度は、すでになんども述べられてきた。たとえば昨年12月英国議会で演説したM・S・ゴルバチョフは、その原則的態度を数語でまとめ、「法則に従ってたえず変化している現代世界の現実に立ち、皆がともに暮らすことをたえず学ばなければならない。私はこう言いたい」と述べた。

たとえ誰が自分のイデオロギー的見解で現実の事実を見るにしろ、事実はあくまでも事実であり、この地球上に二つの社会体制が存在することは、あくまでも現代の歴史的現実である。そして現時点の現実は、世界の上に核戦争のダモクレスの剣がぶら下がっていることである。

ここから出てくる、万人が認める唯一の結論は、社会体制のいかんにかかわらず、国の指導者たるものは、手を組んで共通の危険とたたかい、さし迫った諸問題を武力ではなく、政治で解決するようにしなければならないということである。国際世論が近づいたソ米首脳会議に期待するのは、とりもなおさずこのようなアプローチである。世界の何百万という人々は、首脳会談が何よりもまず軍事対決のレベルを引き下げるのに役立ち、世界を十分に安定させることを期待している。

それと同時に、軍拡競争の抑制に関するソ米間の合意がどんなに重要でも、その合意でソ米関係の重要問題が全部片付くわけではなく、現代の国際生活の全般的健全化と切っても切れないつながりをもつソ米関係の他の面が少なからず残るのは当然である。ソ米両国間の信頼の雰囲気づくり、両国の経済交流の発展、世界の多くの地域の紛争発火点を取り除くための両国の影響力の行使は、疑いもなく相互につながっており、平行して解決しなければならない課題である。これらの課題を解決するには互いの利害と世界の現状を踏まえた全面的によく熟考したアプローチが必要である。ソ連はそういう態度をとるのにやぶさかではない。

音と言葉の世界への手さぐり

――耳の不自由な子どものための全寮制学校

本誌記者 エレーナ・プレスニャコワ　カメラ V・ビャトキナ

モスクワ第一〇一全寮制学校には先天的あるいは後天的に（何らかの難病に侵されて）完全に聴力を失った子どもたちが三〇〇人以上も学んでいる。専門家の意見だと、聴神経が生きていれば絶対的（または全体的）な聴力喪失はない。だからまだ聴神経が生きているあいだに（大部分の聴力障害者にあてはまることだが）話すことを教えれば、話せるようになるチャンスがある。小さい時から始めればそれにこしたことはない。アンプを使って音を強め、特別に開発されたプログラムに従った特訓を多年にわたって続けることにより、この学校の教師たちは、欠陥学の専門家と共同で、子どもたちを音の世界へ導こうと試みている。セミョン・クリボベド校長は、「耳が聞こえるよう、あるいは聴力が戻るよう手助けをする――これは医者がやることであって、われわれの目的ではありません。子どもたちが唇の動きを読み取り、何よりもまずしゃべれるようになること――これがわれわれの基本課題です」と言う。

この学校の授業は不完全中等学校（8年制）の普通の教授要目に従って行われているが、全課程に8年ではなく12年が割りあてられている。全学年にことば、つまり話し方の授業がある。これは大変複雑な課程なので、第1学年から第5学年までの全クラスで一人ひとりの生徒に、週に1時限から3時限の聴力の個人教授が振り当てられている。

教師陣は一一二名。全教員と放課後生徒の世話をする生活指導教員の大部分はろうあ教育学の専門家である。低学年の担任イリーナ・フォードロワ先生は普通学校の単なる教師よりろうあ教育の専門家の仕事の方がやりがいがあると言う――「普通の学校より私たちの方が生徒との関係が密だと思います。生徒のことばの形成のプロセスが目の前で見られますし、人間的関係を制限している複雑な言語的障害を子どもたちが克服するのを助けてやり、それと並行して一定の知識も与えてやれます。私たちの仕事の方がクリエーティブだと思います」。耳の不自由な子どもを教えるのは大変な仕事で困難も多いが、今までの13年間一度もイリーナ・フォードロワ先生は普通の学校に移りたいと思ったことはない。

25歳のガリーナ・ルイシナ先生はレーニン記念モスクワ国立教育大学5年の時にここで低学年を教え出し、それからもう4年になる。

「仕事はとてもおもしろい。生徒たちの確かな手ごたえを感じますし、努力が報われる場合が多い。生徒にとって授業は基本的情報源だし、新知識を獲得する泉の一つなので、授業中の態度は実に規制正しく、活発です。これは教師にとっていつもとてもうれしいことです」と、ルイシナ先生。

この種の特殊全寮制学校の先生たちの給料は、その仕事の複雑さが考慮されて、一般の教職員の給与に20％上積みされた額が国から支払われるようになった。現在これらの教師たちの毎月の給料は仕事量、仕事歴、学歴によって二〇〇―三〇〇ルーブルで、国の平均賃金より高い。

全学年を通じて、先生たちは生徒の親たちと緊密に連絡を取り合う。定期的に親学級が開かれ、経験豊かな教師が、その一週間に子どもが学校で身につけたり話したり聴いたりする技能を子どもが家にいる間に（普通は日曜日



第1学年のことばを勉強する時間



1年生のレーナ・レシチェンコ（左）とサーシャ・トロフィモフ

◀ガリーナ・ルイシキナ先生と生徒。ここの先生は生徒たちに対して単に先生であること以上のものが特に求められる。

と休暇中）忘れてしまわないよう、家庭ではどう教えたらいいかを親たちに説明し、実際にやって見せる。

1クラスは5人から成り、最高でも12人以上になることはない（新しい規則で勧告されている普通学校の基準では1学級25人）。イリーナ・フョードロワ先生は1クラスの定員数について、「これは十分に適性な人数です。私たちの仕事はほとんどもっぱら、個人的に子どもに接するマンツーマンの教授形態を想定していますから。生徒数が少なければ少ないほど教師は子ども一人ひとりに最大限の注意が注げますし、マンツーマンの指導が出来ます」と語った。

学校には医者と看護婦がいて毎日生徒の健康を見守っているし、年に1度は全生徒が診療所や欠陥学研究所付属の特別聴力センターで健康診断を受ける。

ソ連のすべての学校と同じようにここでの教育も無料だ。しかしそのほか国は学校と寮生活にかかる費用の全額を負担している。1日4回の食費は無料（普通の学校の場合は朝食・昼食代は保護者の負担）だし、教室で使う学用品・教材、教科書、必要な衣類・靴も無料で支給されている。このために全寮制学校は毎年国から約九万三〇〇〇ルーブルの支給を受けている。

労働教育には普通の学校よりも大きな意義が与えられていて、5年生からは週4時間の労働の授業がある（普通の学校は週2時間）。この時間に女の子は裁縫や料理を、男の子は仕上げ工の仕事や木工を習う。夏休みになると上級生は、授業で初歩的知識を与えられた実際の職業技術を企業の実習で試すことによってより深く知る。こうして卒業する頃になると、確かな技術こそ身につけていないが、実際の仕事の見当はつき、これは将来の自分の進路、職業を選ぶ上で大変参考になる。

学校を卒業すると普通は就職するが、完全中等教育終了の資格を得るため、働きながらあと3年間、難聴者のための勤労青年夜間学校で勉学をつづけることも出来る。あるいはまた耳の不自由な学生のための特別クラスがある若干の中等専門学校（機械操作、経理業務、歯科技工、航空、機械製作、その他）に進学することも出来る。

「新しい学校改革は中等学校生徒の職業的方向づけを強化する問題を提起しましたが、われわれはすでに実際にこの問題を解決しはじめました。教育用の小工場の設置を計画しています。最新の設備の中で生徒たちは生産的労働に従事するようになるでしょう」――校長はこう語った。

この場合ことわっておかねばならないが、学校改革法によって規定されているのは最上級生――9―11年生の職業的方向づけに関する作業だが、ここ全寮制学校の就学年限は8年である。種々の疾患形態を持った児童を教育する特殊学校に対してはこの問題は今のところまだ検討されていない。

この種の全寮制学校のカリキュラム、教授法に修正を加えねばならぬ時が訪れたのは確かで、学校改革法もこれを規定している。欠陥学の専門家は現行の就学年限12年を9年に短縮する道を探している。現在、卒業時の生徒の年齢は19歳か20歳で、これはもう独立生活に入っていても少しもおかしくない年齢だ。教師歴23年のアーラ・グレビチ先生は次のように語った――「私たちはすでに新しい教授法によるある実験を行いました。現在よりももっと難しい教授要目にそって子どもを教えてみました。なかなか好ましい結果が出ています。さて今度はこの実験は欠陥学研究所で承認されなければなりません。あれこれの科目について学習時間数の削減を提案しました」

この学校は子どもたちにとって単なる教育機関ではない。ここは事実上、生徒にとって第二の家庭であり、同時に友だち同士でつき合い、いろいろなサークル活動をし、スポーツ部に入って汗を流すクラブのようなものである。休暇中も生徒たちはしばしば学校にやって来る。大変に親しくなった友人や先生が懐かしいのだ。自分の息子や娘にとって両親の権威より先生の権威の方がはるかに上だ、とちょっぴり寂しげに嘆く母親や父親の声もかなりひんぱんに聞こえて来る。

卒業生たちはやがてこの学校の門を出て、自分の人生行路を選ぶ。どんな独立した大人でもそうであるように、この道の行く手には数々の心労と問題がある。だが毎年同窓生たちは、この豊かな多様性を秘めたわれわれの周囲の世界を認識し、知覚する能力をくれた恩師たちに会いに、ここを訪れる。



休み時間

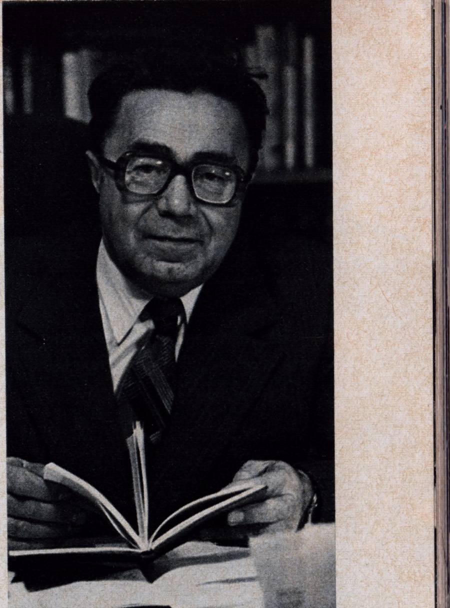




◀労働の時間。仕上げ工の仕事を指導するのはドミトリー・イワノフ先生（経験豊かな職人で、すばらしい教育者だ）。

▼低学年生のお昼寝の時間。やさしく寝かしつけるイリーナ・フョードロワ先生。





教育改革1年目の成果

――コンダコフ・ソ連教育学アカデミー総裁にインタビュー

5年、あるいはそれ以上の期間を予定している学校改革という大事業が、始まってからまだ1年しかたたないというのに、その成果を論じていいものだろうか？　五〇〇〇万人以上の生徒が47の民族語で学んでいる既成の教育制度の建て直しがわずか1年ぐらいでできるものだろうか？　こうした問題は一朝一夕で解決のつく問題でないにはちがいないが、現実に第一歩は踏み出されたものである。その第一歩とはどんなことか？

これらの問題についてソ連教育学アカデミーのミハイル・コンダコフ総裁（写真）にワレリー・プルート本誌記者がインタビューした。

――まず、普通教育学校と職業学校の改革を国が思い立った原因にさかのぼってみる必要があると思うが。

その原因を要約すると、科学技術進歩の猛烈なスピード、コンピューターの使用による生産工程の総合的オートメ化と機械化、社会の発展にともなって生じたいろいろな問題だと言える。これらの全部がひとつになって、教育の質を高める方法を求めよう、次の世代の労働教育をより完全なものにしようということになったのである。

――"教育の質"とは具体的にはどういうことか？　その点でどういう成果があったか？

教育の質とはまず教育の内容そのものにかかっている。こんど、きわめて権威のある機関（教育省、高等・中等専門教育省、国家職業技術教育委員会、科学アカデミー、教育学アカデミー）が協力して、「中等学校における普通教育の統一水準」を制定した。これは、（都市、農村部の）普通学校の生徒とか職業技術学校の生徒の別なく、生徒の知識にたいする要求を一本化する非常に重要な措置だ。学校改革前の10年制普通学校ではなく、11年制普通学校の新しい標準カリキュラムを作成する土台になるのがこの「統一水準」なのである。この計画は承認されて、実施されはじめた。これによって初等学校（小学校）の課程は一年延びて、4学年制となり、6歳から就学して、1週20時限（1時限35分）の授業を受けるようになった。

もう一つの重要な改革は生徒の社会的に有益な生産活動の時間が大幅に増やされ、ほぼ2倍になったことだ。

――普通学校の労働教育を強化するには相当議論があったが、この点についてのご意見は？

私の意見は、論議に加わった大多数の人たちの意見と同じで、労働教育の強化は時代の要請であり、学校改革の最重要課題だということだ。ほかのことと併せて、高学年の生徒が、学校内の工作場であれ、実習生産コンビナートであれ、あるいはまた工場内の実習職場であれ、力相応の実際の労働をやれば、その生徒がこれまで身につけた理論的な知識の確かさや深さをチェックすることになるし、そういった知識が形式だけのものにならないようにする助けにもなるし、また現代にはなくてはならない独学の欲求を刺激し、自分のレベルを高めたいという気持を起こさせる。ところで、こういった課題がこんど学校の双肩にかかってきた（企業と緊密に協力していくのはもちろんだが）のは、至極当然だ。いまや若者は17－18歳まで学校にいることになった。働く習慣を養って技術を身につける機会はこの時期をおいてほかにない。

――それだけでなく、学校改革は見通しとして普通職業教育によって普通中等教育を補完するという課題を学校の双肩に負わせている。そうなれば、学校は卒業生に卒業証書と一緒に、特定の職業技能を習得したという証明書を出すことになる。

「今日のソ連邦」一九八五年第18号付録
「今日のソ連邦」昭和60年9月15日号（第28巻・第18号・通巻六三九号）付録

宇宙の平和的開発のために

国連事務総長あてのソ連外相の書簡

尊敬する事務総長閣下

ソ連は「非軍事化の条件下での宇宙空間の平和的開発における国際協力について」の問題を第40回国連総会の議題に入れるよう提案する。

この提案を出すにあたりソ連は、人類がいま選択に直面しているとの立場から出発している。宇宙が地球住民の生活条件改善のためのますます実感できる成果をもたらすことになるか、それとも彼らにとっての新たな死の危険の源泉と化すか。地球人の宇宙時代にふさわしい唯一の理性的選択は、宇宙の軍事化を許さず、平和的活動のためにそれを温存するという方向で行うことができるし、行わなければならない。

この問題は緊急の性格をおびるにいたった。兵器が宇宙に入り込まないうちに、これを解決しなければならない。この危険は日ごとに強まっている。すでに攻撃用宇宙手段をつくるための具体的な開発作業が行われている。このプロセスを停止させなければ、軍拡競争はあらゆる方向でさらに大規模な集中的なものとなり、補足的に新たな物的、知的資源をのみこみ、各国の共同の平和な宇宙活動への道に乗り越えがたい障害をつくり出すであろう。

ソ連は、国連総会があらゆる国、特に宇宙の分野で大きな潜在力をもつ国々に対し、宇宙空間での軍拡競争防止の効果的措置を遅滞なく取り決めるよう改めて強く呼びかけることを提案する。これは平和目的のための宇宙の研究と利用での広範な国際協力の条件をつくるだろう。

ソ連は具体的な措置をひとまとめにして実施するよう提案する。これらの措置は、この分野で発展途上諸国に全面的援助を与えることをも含めて、宇宙を平和的に研究し、宇宙技術をすべての国の幸福のために利用する上での各国の努力の統合を促進するだろう。この全人類の課題の順調な解決は、宇宙空間非軍事化を効果的に保障する合意が成立した場合に可能となるであろうことは、明白である。

宇宙の平和的開発を保障する事業での早急な進歩に役立ちたいとの意図に動かされて、ソ連は文書「非軍事化の条件下での宇宙空間の平和的開発における国際協力の基本方向と原則（ソ連提案）」を国連総会での審議のために提出する。

事務総長閣下、本書簡を国連総会の手続規則に定められた説明書と見なし、添付の文書「非軍事化の条件下での宇宙空間の平和的開発における国際協力の基本方向と原則（ソ連提案）」および決議案とともに、国連総会の公式文書としてご配布下さるようお願いする。

ソ連外相

E・シェワルドナゼ

（プラウダ、一九八五年8月17日号）

国連総会決議案「非軍事化の条件下での宇宙空間の平和的開発における国際協力について」

会進歩のために使われるべきだと確信している。そこにいたる道は、地球上のすべての国の共同の集団的努力の中にある。

ソ連は、善意の立場から、われわれの地球の運命に対する責任を自覚し、すべての国と国民に対してこの歴史的課題の解決に共同で着手するよう呼びかける。ソ連は全体の事業に貢献することをめざして、非軍事化の条件下での宇宙空間の平和的開発・利用における国際協力の基本方向と原則に関する本提案を国際連合の審議に付するものである。

（プラウダ、一九八五年8月17日号）

総会は、宇宙空間の開発・利用を平和のもとでの幅広い対等な互恵国際協力の場とすることを保障するとの決意に満ち、

核戦争の危険性の急激な増大につながり、軍備の制限・削減の見通し全体を打ちこわし、宇宙空間の平和的開発での国際協力の発展に乗り越えがたい障害を作るような宇宙空間での軍拡競争を手遅れにならないうちに阻止することの切実な必要性を認識し、

宇宙空間の研究・利用がすべての国の国民の科学技術、経済、社会の進歩をはじめ、開発と経済的立ち後れの克服という課題を含めて人類が直面しているグローバルな問題の解決に最大限効果的に役立つようにすることを保障したいとの意図に従って、

1 すべての国、特に宇宙分野できわめて大きな潜在力をもつ国々に対して、宇宙空間での軍拡競争の防止をめざす効果的措置を講じるためにあらゆる努力を傾注し、それによって平和目的のための宇宙の研究・利用における幅広い国際協力の条件を整えるよう呼びかける。

2 宇宙の非軍事化が効果的に保障される条件下で、宇宙開発の分野で発展途上諸国を援助することも含めて、平和的宇宙活動での諸国の努力を一致、調整、結集し、宇宙の軍拡競争防止のためにすでに締結されているか、あるいはこれから締結されるであろう諸協定の順守状況の必要な監視の実施を促すために世界宇宙機関を設立することが、宇宙の平和的開発とこの分野での国際協力の発展の事業できわめて大きな実際的措置となるであろうとの確信を表明する。

3 非軍事化の条件下での宇宙空間の平和的研究・利用における国際協力の問題を十分に検討し、このような協力の基本方向と原則を調整するために、大きな宇宙潜在力をもつ国々やその他の関心をもつ諸国の参加する国際会議を遅くとも一九八六年中に開催することを決定する。この会議は、世界宇宙機関の実際的設立には、宇宙空間の非軍事化を効果的に保障する合意が成立して初めて着手できるという点を考慮に入れて、このような機関の設立の問題を検討するであろう。

4 国際会議開催のために宇宙分野で大きな潜在力をもつ国々が参加する、メンバーを制限しない準備委員会を設置する。

5 この準備委員会に対し、活動報告と相応の勧告を第41回国連総会に提出するよう提案する。

6 国際会議の開催に関するあらゆる意見や提案を委員会に伝達するため、一九八六年2月末日までに事務総長に通告するようすべての国に要請する。

7 「宇宙空間の非軍事化と平和的開発の事業での国際協力について」と題する項目を第41回総会の予定議題に含めることを決定する。

（プラウダ、一九八五年8月17日号）

一九八五—八六学年度から普通中等学校で教育を始める専門技能リストがすでにできている。これは七六〇種類の一般的な職業技能を網羅したものだ。ところで、6月に終わった前学年度中に、学校の近辺にある企業との間に、その企業の工場で生徒の職業教育実習を行う内容の長期契約を結んだ中等学校校長が多い。いくつかの中等学校が一つの実習生産コンビナートを利用して生徒の職業実習をするという方式はすこぶる効果的だ。七〇年代の初め頃はこういうやり方で中等学校生徒の生産実習をやっていたコンビナートはモスクワにたった一つしかなかったが、いまではそれが44もあり、全国では約三〇〇〇になった。中等学校の高学年生徒四五〇万人のうち二一〇万人、つまり45%がこういった実習生産コンビナートで職業実習を受けている。

——新しいカリキュラムには改革前の中等学校にあった人文・社会系の科目と理数系の科目の比率がそのまま残っている。だが、この新しいカリキュラムのなかには新しい科目もちゃんと入っている。1学年と2学年で教える「環境を知ること」、8学年の「生産の基礎。職業の選択」、10、11学年の「情報理論とコンピューター技術の基礎」などだ。こういった科目のうちどれが一番重要だと思うか？

周到に選び抜かれ、内容が充実した教授要綱には一番重要な科目とか二義的な科目とかいうものはない。だが、もちろん、これから一番大事になってくるのは、高学年がコンピューターやプログラミングについて学ぶ科目だろう。

こういう根本的に新しい学科の導入はまったくむずかしいことで、現場の先生方にも教育行政機関の幹部にも学者にもこれから大いに努力してもらわねばならない。指導要綱はもうできているし、生徒用の教科書も教師用の指導手引き書もできている。数年中には全国各地区にコンピューターを完全な形でそなえたセンター校を一つか二つ設けるようにするつもりだ。これができれば、それらの学校を基盤にして全国どこでも情報理論の基礎を教えられるようになるだろう。

——それには教師自身の教育をしなければならないと思うが……

確かに、だいたい学校改革というものは教員の養成の近代化なくしては実現できないものだ。だから、教育大学の新しい教授要綱がすでに準備中で、新しい専門科目をそれに入れることになっている。教員の給与の3割ベースアップとか、学生奨学金の引き上げなど、物質的刺激の措置が取られることにも触れておいてよいだろう。情報理論とコンピューター技術の基礎を教える教員の養成については、理数科教員のために特別の夏期コースを開くことが決まっている。教育大学の新卒業生は母校で情報理論とコンピューター科目の教育を受ける。こういうことは大変な仕事で、いま各総合大学、工学関係の大学、教員研修機関がそのために動員されている。

一九八六年には情報処理・コンピューター科目用教科書のコンクールが行われることになっている。なお、今後は標準教科書をつくる場合には同様のコンクールがしきたりになるだろう。こういった標準教科書の執筆には"生粋"の学者と現場の教員と教授法専門家からなる執筆グループが当たっている。これまでの経験から見て、こういった"三つの力"が結びついた方式が一番よい効果を収めるようだ……

学校改革のような大事業の実行が手っ取り早く円滑に行くものでないことは言うまでもない。けれども、この学校改革の構想が活力にあふれており、確実な物質的"援護"を保障されていること、そして今後数年間が構想の実現の上で決定的な段階になるということは、今日でもはっきりしている。

パンフ配布のお知らせ

次の5点のパンフレット（代金無料）を差し上げます。郵送ご希望の方は、送料分の郵便切手を添え、書名を明記の上、ソ連大使館広報部パンフ係へお申し込み下さい。いずれもノーボスチ通信社出版局の刊行です。

☆『ソ連——百問百答』（新書判一九二ページ、送料二〇〇円）

☆『環境問題——人類全体の問題として』（Y・カザコフ著、A5判32ページ、送料一四〇円）

以上2冊セットの送料は二五〇円です。

☆『シベリアの資源』（新書判72ページ、送料一七〇円）

☆『シベリアの科学』（グーリー・マルチュク著、新書判一〇七ページ、送料二〇〇円）

☆『自然の保護』（ユーリー・シニャコフ著、新書判56ページ、送料一七〇円）

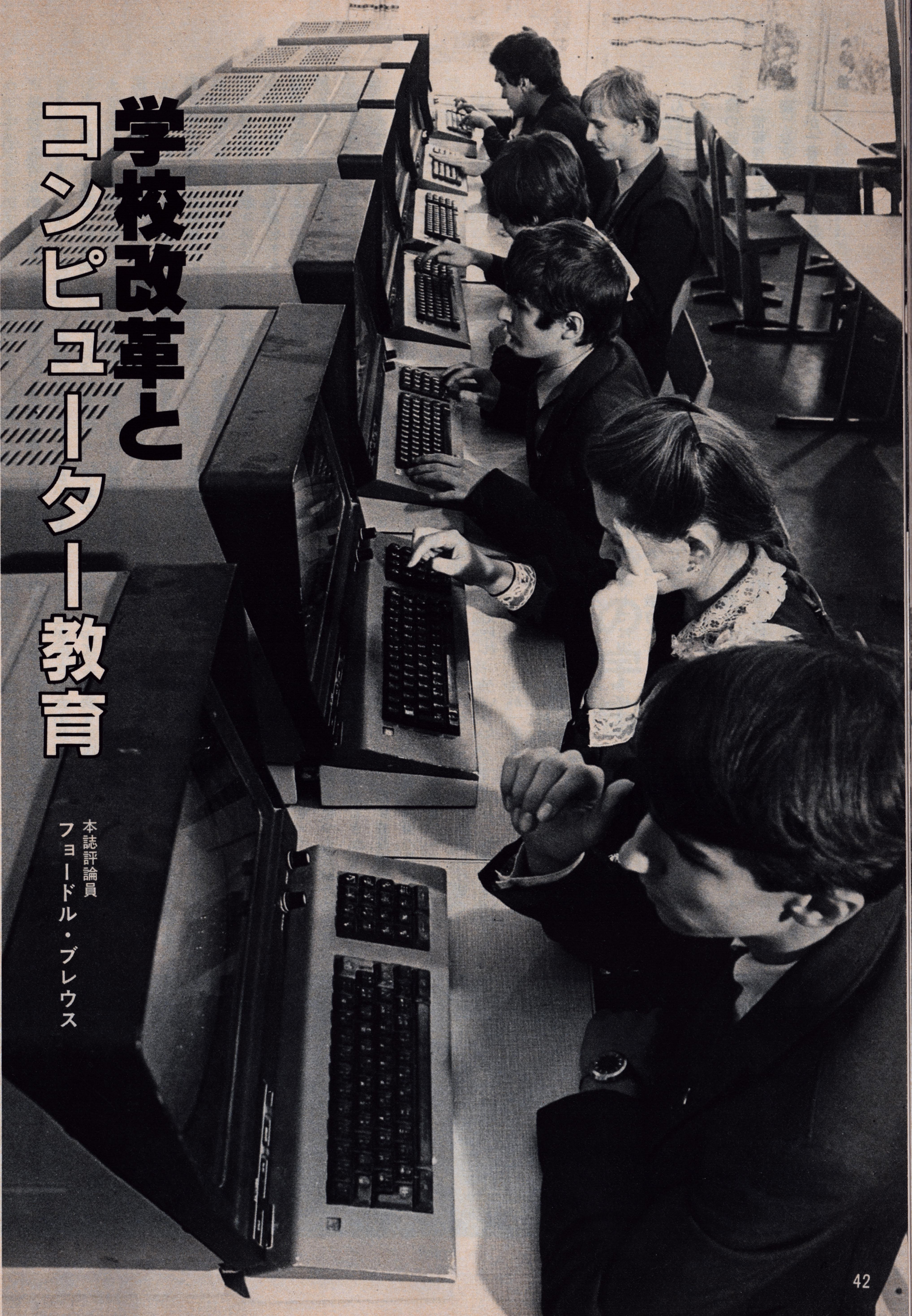
以上3冊セットの送料は二五〇円です。

また、以上5冊セットの送料は三〇〇円です。

なお、パンフレットによっては、品切れになるものもありますので、その節はご容赦下さい。

学校改革とコンピューター教育

本誌評論員
フョードル・ブレウス



新学年の始まるこの9月1日から、ソ連のすべての中等教育施設では「情報理論とコンピューター技術の基礎」という新しい科目が導入される。これはソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議が共同で採択した特別の決定に基づく措置である。

現在の中等学校で学ぶ者は、将来、高等技能をもつ労働者になろうと、あるいはエンジニア、研究員、企業経営者になろうと、みな必ずコンピューターやオートメ化された生産管理システムと付き合わねばならなくなる。ソ連では紀元二〇〇〇年までのコンピューターの開発と生産に関する計画ができており、来年の第27回党大会でこの計画は新5カ年計画（一九八六—九〇年）ともっと細部まで突き合わせをすることになっている。しかし、すでにことしだけでも生産工程の自動管理システムが八〇〇セットほど稼働を始める。普通中等学校と職業技術学校の卒業生はこのような技術についてある程度知っておかねばならない。ソ連科学アカデミーのアナトリー・アレクサンドロフ総裁も指摘したとおり、猛烈な勢いで発達している機械の世界と、安定を望む人間の世界を調和させるには、サイバネティクスの大々的な導入より外に方法がない。人間はこういった調和の確立を子供のときから心がけねばならない。

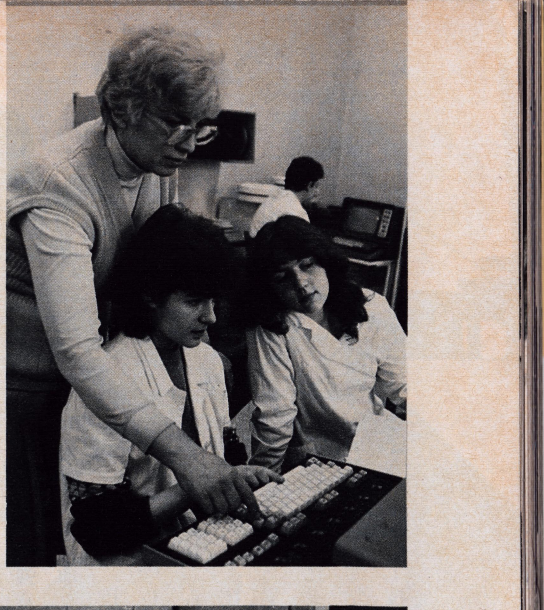
ソ連の普通学校は根本的な改革の過程に入りつつある。一九八五年以前のソ連の普通中等教育は10年制義務教育だった。それが、いまでは新しい学校改革にしたがって、普通中等教育は普通職業教育で補強されることになった。学校改革は5年ないし10年かけて、段階的に実施される。この学校改革のまさに発足段階で、「情報理論とコンピューター技術の基礎」という科目が高学年クラスのカリキュラムに導入されるのである。

中等学校の生徒にコンピューター技術を習熟させるという課題は、焦眉の課題である。政治家も、学者も、経済指導者も、教育家も、また一般の世論も、青少年にコンピューター技術の全面的で深い知識を持たせることが国の科学技術の進歩を促す重要な要因になるはずだ、という結論に達した。

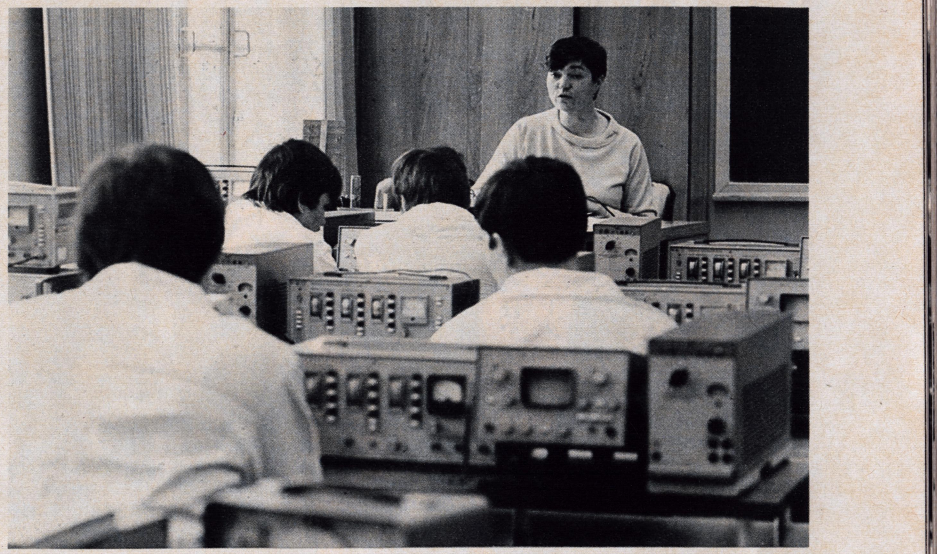
中等教育にコンピューター技術の科目を導入することになってから、まったく新しい問題が少なからず起こってきた。問題には二つの面がある。一つは、国全体としてコンピューターの不足が感じられるという点、もう一つは、プログラマーは必ずしも教師ではなく、教師は必ずしもプログラマーではないという点だ。言い替えれば、まず教師がコンピューターの知識をもたね

右　キエフ第132学校9学年のプログラミングの授業
下　テープ駆動装置を操作するオペレーターとキャリヤーからデータを入力する9年生のサーシャ・フェドセーエフ君（モスクワ第123学校で）





右　10学年のプログラムのデバッグの授業（モスクワ第123学校で）



下　学校の電子装置調整実験室。生徒たちはここでICの働きを学び、オシログラフや音声・パルス発生装置でハードウェアの故障を発見し、直す練習をする。



左　問題が解けて歓声を上げる生徒たち（キエフ第132学校で）

ばならないということだ。そこで、教師のためにすでに数十種類の教育プログラムができあがっているし、教科書も準備されている。

〝教師の再教育〟は簡単ではない。技術的にも、心理的にも。とりわけ、教師のなかには、西側諸国の経験が示しているように、コンピューターはもちろんのこと、電卓でさえ生徒の数学の知識水準を低下させると考えている者がいる。この心配は根拠がないわけではないが、数学教育の質とコンピューターの使用は別に相容れないものではない。ただカリキュラムを再検討して、より完全なものにする必要はある。

「情報理論とコンピューター技術の基礎」という新科目は一九八五年9月1日から学校の時間割りに現れる。ことしの春から教師の研修が大々的に行われ、コンピューター室も設けられた。生徒の技術製作の指導やピオネール会館、各種クラブ、文化宮殿でのクラブ活動などの課外活動にもコンピューターが広く利用されることになっている。また第一段階として各州の中心地で物理学、数学の教師が新学年にそなえて必要な研修をすでに受けたし、新学年からは教育大学に情報理論の教師を養成する専攻科を置くことになっている。

学校の授業へのコンピューター教育導入に関連した問題はソ連のみでなく、社会主義共同体のすべての国でも積極的に解決に取り組んでおり、絶えず経験の交換が行われている。一九八五年の春にはこの問題で経済相互援助会議（コメコン）加盟諸国の専門家会議が開かれた。そのほか、ソ連の学者は、コンピューターのしっかりした基礎教育が開発されていると考えられる英国、フランス、日本へ視察にも行ってきた。

学校改革が進むと、ソ連の中等学校は11年制になる。第1学年への入学年齢は現行の7歳から6歳になる。高学年では一般普通教育と一緒に労働教育が行われ、生徒は一般的な職業技能を身につけることができる。中等学校を卒業した者がそれ以上の技能を身につけたければ、中等職業技術学校の1年制の専攻科か2－3年制の中等専門学校で勉強すればよい。そこから高等教育を受ける道も開けている。

こういったことはすべて、ソ連憲法にうたわれている国民の教育を受ける権利、働く権利、職業を選ぶ権利にまったく合致している。

ソ連全国に広がる中等学校網のたいへんな規模や、そこで四五〇〇万人以上が学んでいることを考慮すれば、中等学校にコンピューター教育を導入するという問題を解決するのは簡単ではないし、非常に金がかかる事業である。

科学アカデミー会員のアンドレイ・エルショフの意見によれば、ごく初歩の水準のコンピューター知識を習得するためだけでも、一〇〇万台以上のパソコンを授業に使わねばならないし、もっと将来の見通しとなれば、この数ははるかに大きくなるはずだという。また二〇〇〇年までに普通中等学校と職業技術学校に七万のコンピューター室を設けることが計画されている。

学校改革に関連して、それでなくても膨大な教育予算はさらに増える。国家は学校改革費として一一〇億ルーブルという巨額を支出している。このうち、三五億ルーブルは教員その他教育関係者の昇給（約六〇〇万人が平均30－35％昇給する）に充てられる。

教育への投資は十分引き合って余りがあるというのは、1ルーブル使ってもほぼ4ルーブルになって戻ってくるという意味ばかりではない。新しく生まれ変わる中等学校では生徒の芸術教育、情操・道徳教育、体育に力を入れることになっている。つまり、幼少時から円満な人格を形づくることが重視されるのである。これは社会主義社会の理想に合致している。

科学技術

パリ航空ショーに登場した 超大型輸送機AN124

ウラジーミル・コリニコ

飛行中のＡＮ124



さる5月31日から6月9日までパリのルブールジェ空港で開催された第36回パリ航空ショーで、世界最大の超大型輸送機AN一二四が出展され、センセーションを呼んだ。AN一二四はオレグ・アントノフ設計局が開発したもので、この設計局は20年前の第26回パリ航空ショーのときも、当時としては世界最大のAN22（アンテイ）を出展して評判になった。

「われわれは記録やセンセーションをねらって航空機を開発しているのではなく、国民経済、とくに新しい地域の開発にどうしても必要というので大型機をつくっている。ソ連ではANのマークをつけた輸送機が、新しい地域の開発に大活躍している（ANはアントノフという姓の略語）」とピョートル・バラブエフ所長は語った。

オレグ・アントノフ（一九〇六—一九八四）を所長とする設計局がウクライナのキエフに設立されたのは40年前で、頑丈で信頼性が高く、経済的な航空機の開発が目標だった。

経済性が主な長所とあって、いまソ連の航空路の3/4にAN機が就航している。そのうちのAN2は1・5tの貨物または10—12人の乗客を運ぶ複葉機で、一九四七年にこの設計局が世に送り出した一号機であり、今でも使われている。

20tの大型貨物を運び、長さ五〇〇—六〇〇mの滑走路から飛び立つことができる4発のAN12は、一九五〇年代末から製作されている。

原生林と沼地に覆われた西シベリアで石油とガスが発見されたとき、鉱床の短期開発に活躍したのが輸送機だった。しかし緊急に届ける必要のある設備が大き過ぎて、当時の航空機の貨物室に収まり切らないことがよくあった。そこでアントノフ設計局は80tの貨物（一〇〇tまでの貨物の運搬記録もある）を積むことができるAN22を開発した。

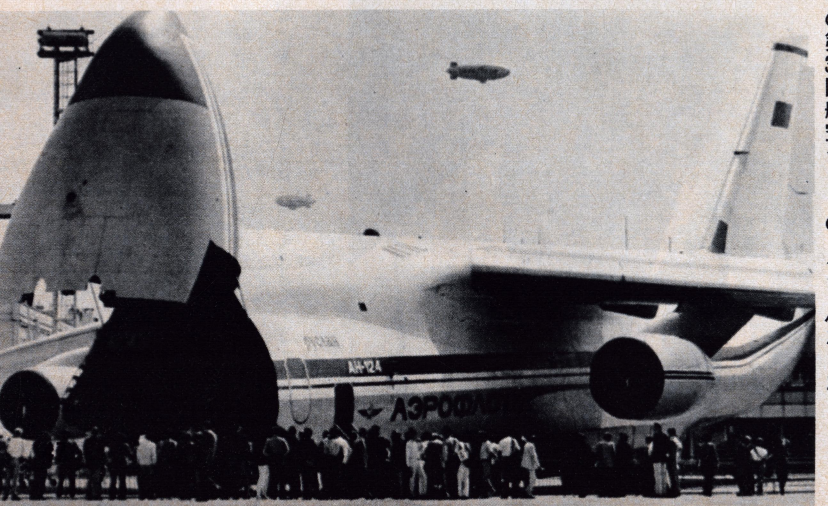
現在ここの設計局の所長はピョートル・バラブエフ（53歳）で、多くのAN型機の設計を手がけてきたベテランである。AN一二四（ルスランというプーシキンの作品の主人公の名が付いている）も彼の指導のもとに開発された。

バラブエフ所長はAN一二四についてこう話してくれた。

「新型機は時代の要求に応えて開発された。大規模な建設場のある未開発地区へ運ぶ貨物の量はどんどん増えており、特別大型の貨物を運ぶ必要がますます痛感されるいま、新しい航空機が必要になった。新型機は故人になったオレグ・アントノフが構想し、われわれがその構想を実現させた」

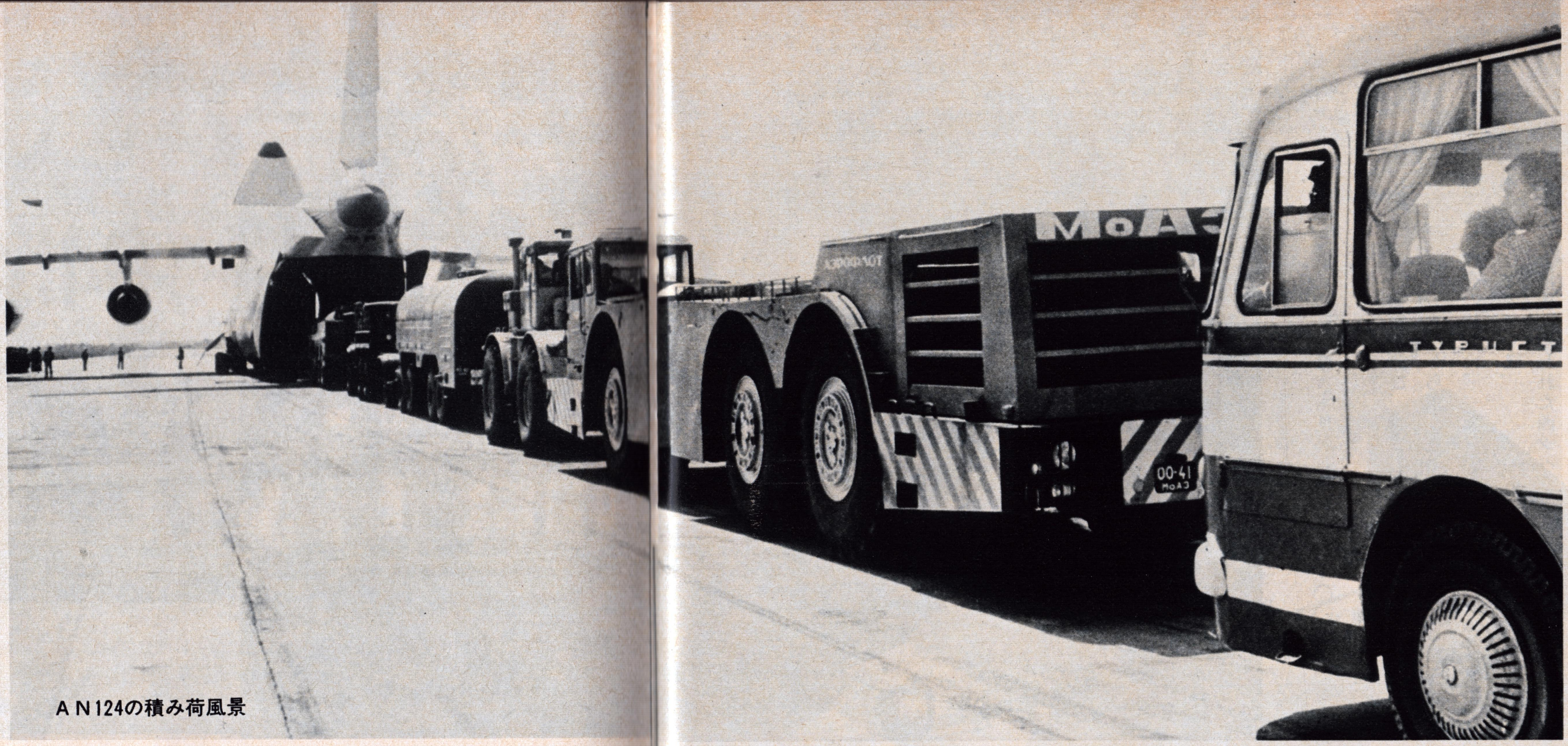
最大搭載量が一五〇tなので、非常に大きな貨物も運搬できる。貨物室（長さ36m、幅6・4m、高さ4・4m）には機首の貨物扉と後部貨物扉から貨物を搬入し、大型バス、トラック、ブルドーザなどが二列に並ぶ。

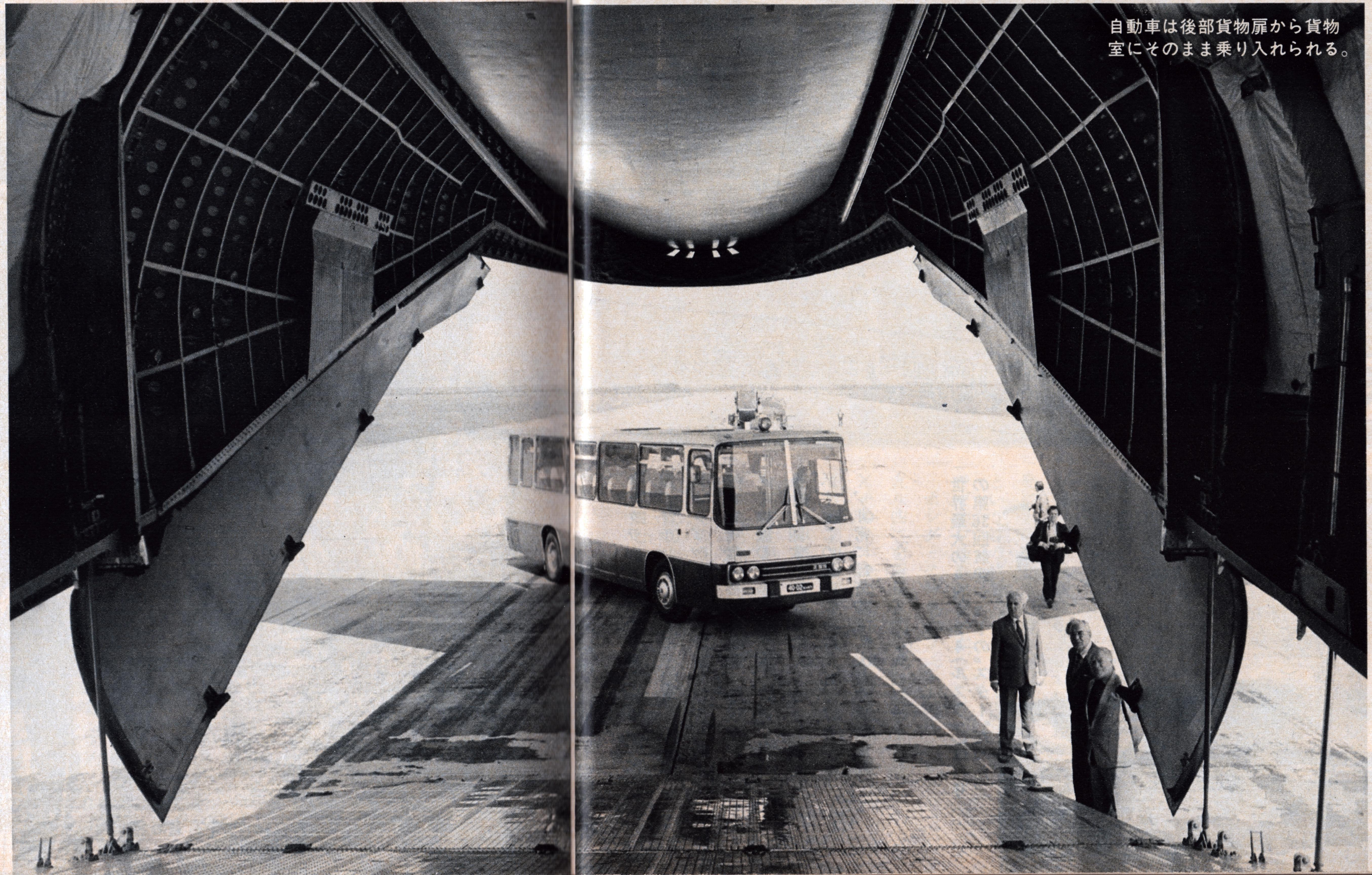
貨物室から上の階に上がることができ、タラップわきに交替乗員用の4部屋のフラットがある。乗員6人が入るコックピットは大きさから見て、船の操舵室そっくりだ。機内のコンピューターは機の全系統の状態、位置、飛行条件に関する情報をたえず表示装置に示す。この機の長所はそれだけではなく、非常に経済的で、大量の貨物を運



世界最大のＡＮ124（ルスラン）はパリの第36回航空ショーの〝スター〟だった。

ぶ場合の燃料消費量は、IL76やAN22のそれの1/3である。
AN一二四は図体がとても大きいが、巡航速度は毎時八五〇kmと速い。航続距離は一万六五〇〇km。遠隔の地区に貨物を運んでから基地の飛行場に戻って給油ができることも、AN一二四の重要な長所の一つである。
「この機に満足しているか?」と所長にたずねると、「テストパイロットは機がおとなしく思うとおりに動いてくれてよいと言っているし、この機の恩恵を受ける僻遠の土地の開発者たちもきっと満足してくれるだろう」という答えが返ってきた。
ちなみにAN一二四は全幅73・3m、全長69・5m、全高19・8m、エンジンはソ連初の高バイパス比ターボファンのロタレフD18T。7月26日、AN一二四は一七一・二一九tの貨物を積んで高度一万七五〇〇mまで上昇し、世界記録をマークした。現在の公式世界記録は米国のC―5A(ギャラクシー)の一一一・四六一t、高度二〇〇〇m。


AN124の積み荷風景


自動車は後部貨物扉から貨物室にそのまま乗り入れられる。

催し物のお知らせ

☆ボリショイサーカス日本公演

筑波・エキスポプラザ(9月4—10日)、仙台・宮城スポーツセンター(9月13—16日)、前橋・群馬県スポーツセンター(9月20—23日)、横浜・横浜文化体育館(9月26—29日)、浜松・市体育館(10月3—6日)
▽お問い合わせは、エミー・インターナショナル内ボリショイサーカス公演本部(電話03・234・7207)へ。

☆オシポフ記念国立ロシア民族オーケストラの公演

東京厚生年金会館(9月30日)、小樽市民会館(10月2日)、北海道厚生年金会館(3日)、秋田市文化会館(5日)、宮城県民会館(6日)、埼玉会館(7日)、神奈川県民ホール(8日)、沼津市民文化センター(9日)、四日市市文化会館(10日)、高松市民会館(11日)、鹿児島市民文化ホール(14日)、熊本市民会館(15日)、九州厚生年金会館(16日)、長崎市公会堂(17日)、下関市民会館(18日)、福岡市民会館(19日)、岩国市民会館(20日)、京都会館第1ホール(21日)、神戸国際会館(22日)、大阪フェスティバルホール(24日)、静岡市民文化会館(25日)、名古屋市民会館(26日)、長野県民文化会館(27日)、富山市公会堂(28日)
▽電話予約・お問い合わせ先/民音・予約センター(電話03・363・9151)、各地民音事務局

☆ミハイル・プレトニョフ・ピアノコンサート

東京文化会館(10月22日)、伊那市民会館(10月25日)、刈谷市民会館(10月26日)、大阪・シンフォニー・ホール(10月28日)、東京・昭和女子大学人見記念講堂(10月30日)、東京・新宿文化センター(10月31日)、松本・松本音楽文化ホール(11月1日)、東京文化会館(11月7日)、埼玉・埼玉会館(11月8日)
▽お問い合わせはジャパン・アーツ(電話03・235・3021)へ。

1945年で終わらなかった戦い

キエフ駐在本誌記者 セルゲイ・ハルチェンコ



▶木立に囲まれたキエフ傷病軍人病院の本館



看護人のエレーナ・オホートニクに付き添われて庭に出たアレクサンドル・シニュコフ。彼は大祖国戦争に参加し、名誉3級勲章と剛毅記章を授与された。

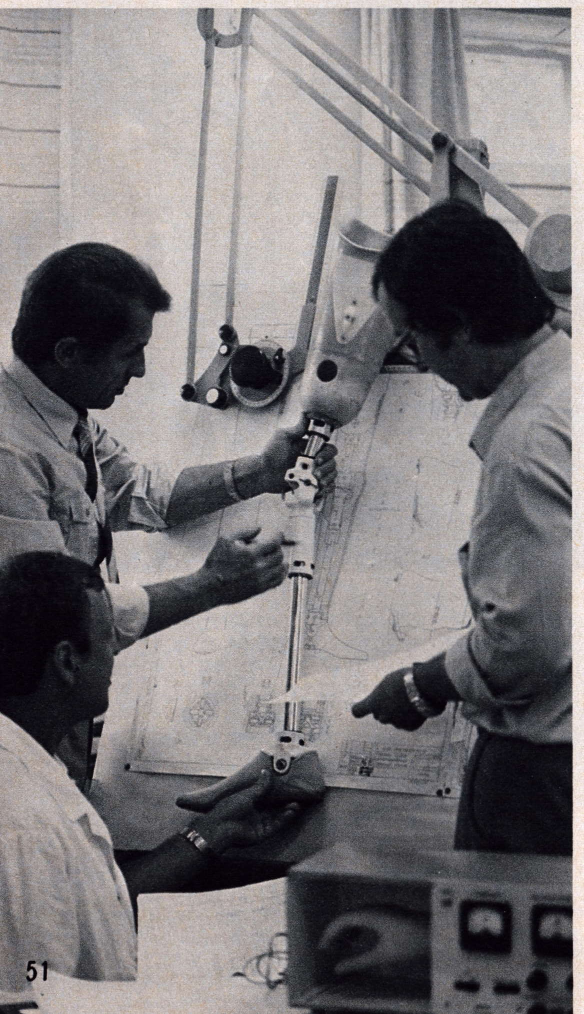
ドニエプル川を見下ろす大きな丘の頂上に立つと、ウクライナ共和国の首都キエフのパノラマが開ける。戦争が始まった一九四一年6月22日早朝、キエフはヒトラー・ドイツ軍の最初の空襲を受け、一九四三年には退却するヒトラー軍により焼き払われた。ウクライナの解放には一〇〇〇以上の部隊が参加した。いまの世代には、この戦闘がどれほど激しいものだったか想像がつかないかもしれない。しかし戦闘に直接加わった人たちはまだ生きており、一九四五年に終わらなかった戦い――痛みや病気との戦いを今も続けている。

ドニエプル川の丘の近くに新しい大きな傷病軍人病院が立っている。この新しいキエフ傷病軍人病院の患者の中に退役将軍のフョードル・ポドリンヌイがいる。彼はキエフ解放戦に参加し、戦争で三度負傷した。いまは杖にすがってやっと歩いている。やはり入院患者のエフィム・シュリマンもかつてはオートバイ大隊の軍曹としてキエフの解放に加わった。重傷を負って約3カ月間意識不明で入院していたが、シュリマンの運動機能は戻らなかった。

患者の中には婦人もいる。



傷病軍人は熟練した医師と看護婦に注意深く見守られている。



義足の製作に取り組む病院の特別設計室の研究員たち

その一人、リジア・アリソワは18歳で前線に志願し、スターリングラード（現ボルゴグラード）で戦った。無線電信手だった。戦争は彼女の家族を奪い、重傷が彼女から子供を生む能力を奪った。

キエフ傷病軍人病院にはプール、サウナ、各種マッサージ室なども完備し、ここは事実上サナトリウム的な施設になっている。しかし、この病院にはサナトリウムのようなのんきさはない。手術室がたえず使われていることを言えば十分だろう。

病院長アンドレイ・ケボルコフは言う。「新たな、もっと恐ろしい戦争を引き起こしかねない紛争が世界では止むことがない。われわれ外科医はまだ前の戦争の結果にひきずられているというのに」

傷病軍人、参戦軍人に対する国家の配慮は、薬を含む無料の医療だけではない。事実上戦争の初期から今日に至るまで、ソ連政府は計画的にこの人たちの年金を増額してきた。また、働く力があり働くことを希望する人のためにはできるだけよい労働条件を作っている。傷病軍人は優先的に新しい住宅をもらえ、家賃は全額あるいは半額免除される。また無料のサナトリウム利用券、都市交通機関の無料乗車券と年に1回、鉄道の無料往復乗車券が支給される。

イワン・ジューシキンもこ



うした特典を受けている一人。片足を切断したこの60歳の参戦軍人は設計研究所の指導的な専門家だが、1年半に1度の割で自分のために特別にあつらえた新しい義足と数足の靴を受け取る。また7年に1度、手だけで運転できる新しい自動車を無料でもらう。

傷病軍人への配慮を改めて示したのが、戦勝40周年に当たって出された戦争参加者と戦没者遺家族のための追加の特典に関する政府決定だ。

第2次世界大戦で戦った人々……どれほどの思いをし、どれほどの辛酸をなめたことか……彼らの胸のうち、頭の中には当時の激しい戦闘と喪失、流された血や傷の痛みについての誇らしい、そして悲しい記憶がいまなお消えずに生きている。と同時に、自分の身に振りかかったことをいまの子供たちに決して経験させないために、その記憶と、子供たちの未来に対する大きな責任感が生き続けている。だからこそ参戦軍人たちはキエフで反戦集会が開かれると必ず参加するのだ。〝新しい戦争を許すな！〟と呼びかけながら。

▲キエフの参戦軍人たちの反戦集会でレーガン大統領宛ての手紙を読み上げるオリガ・グラジロワ（左）。彼女も戦争に参加し、負傷した。

心臓に弾が入ったままで



「おじいちゃんの心臓には、本当にこんな弾が入っているの？」と、6歳の孫娘カルリガシが聞く。

「患者の心臓部に異物（弾丸）が見られる」——カザフ共和国ジャンブル市に住む第2次世界大戦の参戦軍人ケンジェバイ・ウマロフのカルテにはこんな記述がある。

この事実を最初に確認したのは前線の外科医たちで、一九四二年のことだった。モスクワ郊外でドイツ侵略軍との激しい戦闘が行われていたその頃、再診を要するとの診断書付きで負傷したウマロフ上級中尉が野戦病院に運ばれてきた。盲管銃創で、出血はそれほどひどくなかったが、治療しても容体は好転しなかった。レントゲン撮影をしたところ、ほとんど信じられないことが確認された。ウマロフの心臓にはドイツ軍の自動小銃の弾が入っていたのだ。

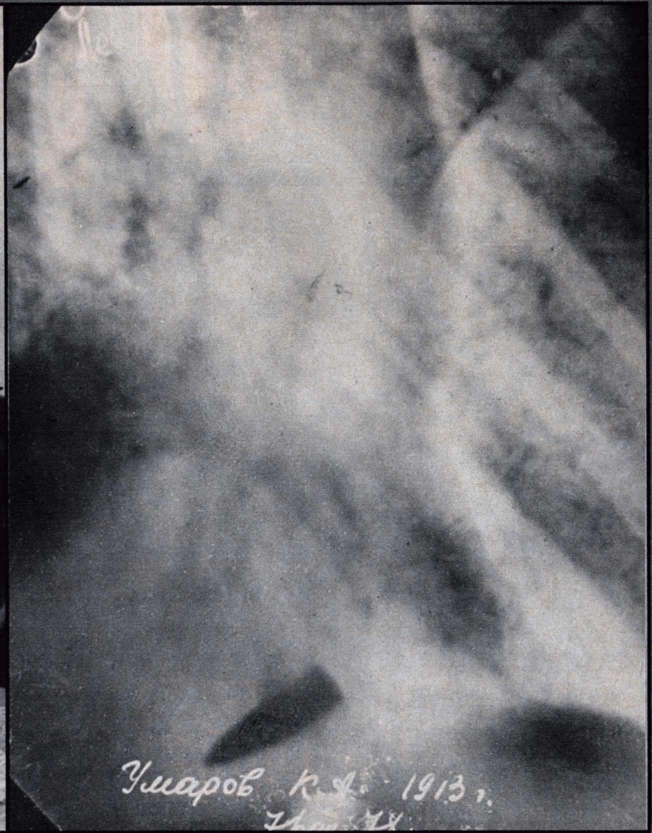
その後ウマロフは治療のためクラスノヤルスク（東シベリア）の病院に送られた。そこの医師はどうすべきか長いこと迷っていたが、容体が悪化しない限りは弾丸を刺激しないことに決めた。

負傷と心臓に残る弾丸のため、ウマロフは前線に戻ることを許されなかったが、同じ年の8月にはすでにカザフ共和国キジルクム市で軍事委員として働き出した。しかし傷はやはり健康に影響し、一九四四年には軍務を完全に離れた。

その後もウマロフは燐鉱山建設に参加したり、地区執行委員会の副議長として活躍。現在はジャンブル市の医学校で経理担当の副校長をしながら、参戦軍人委員会でも活動。医師たちはこの珍しい患者の健康を注意深く見守っているが、特に異常は見られないという。



ケンジェバイ・ウマロフ（1913年生まれ）は43年間、心臓にファシストの弾を入れたまま生きている。



ケンジェバイ・ウマロフの心臓のレントゲン写真。左下に弾が見える。

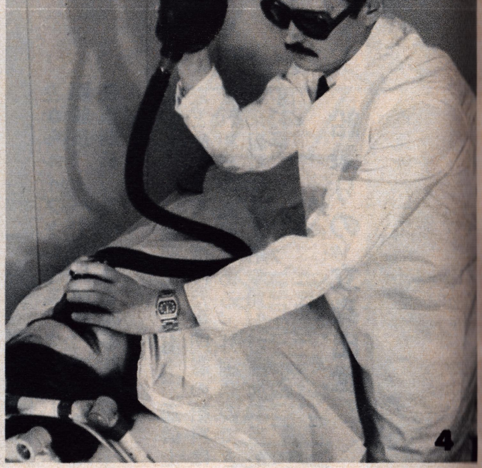
外国航路で働く人々

本誌レニングラード駐在記者 セルゲイ・シメリョフ　カメラ A・ニコラエフ











1　ボリス・ルイプキン船長

2　四等航海士のアレクサンドル・ミハイロフ

3　副船長のゲオルギー・スメヤーノフ

4　船医のオレグ・オパーリン

5　先任機関員のワシリー・カナビン

船乗りという職業はとてもロマンチックな職業だ——陸上で生活し陸上で働いている人の多くはこう考えている。

ボリス・ルイプキンはディーゼル貨物船クラスノドン号の船長としてハバナからレニングラードに戻ってきたばかりのところだったが、疲れ切った様子でこう論じる。

「ロマンねえ、まあ、結構なことさ。それはそうだが、われわれは14昼夜もかけて時化つづきの大海原を渡ってきたばかりなんだ。5カ月も家を留守にして、帰っても船での仕事や海運公社の仕事があって家族といっしょにいたのはたったの二晩だよ。あと数日間で積み荷を終えたら、また出航だ。われわれ船乗りの毎日は楽でない仕事でいっぱいなんだ。この世の中をロマンチックに見るなんて、それはその人の性格で、職業のせいじゃないと思うよ」

クラスノドン号の四等航海士アレクサンドル・ミハイロフは、自分の内部にひそんでいるロマンチックな人間が目を覚ますのは非番の時間だけだという考えだ。

「さんさんと日が輝いている、絵のような美しい海岸伝いに本船が進んでいく。暖かい風がオレンジ畑の香りを運んでくる。ぼくは当直の仕事が終わったので、ふなべりに立って、美しい風景を眺めて楽しむ——というのが、ロマンを感じる時ですね」

クラスノドン号はバルト海運公社所属のばら積み貨物船一五七隻のうちの一隻。この海運公社の所有船の母港はレニングラードにある。クラスノドン号は船齢20年余りで、もう新しいとは言えない。重量トン数は一万二八〇〇トン、全長一四七・三m、時速15・8ノット。進水してから20年のあいだクラスノドン号はさまざまな国の何十という港を訪れた。現在はカナダ、ラテンアメリカ、西欧諸国の港を往復する定期航路についている。積み荷は普通各種建築資材で、たまに食料品を積むことがある。

船乗りの収入

36人の乗組員は年齢も職種もまちまちだ。この船で皆から〝古老〟と呼ばれているワシリー・カナビンは53歳で先任機関員だが、なんでも屋という評判を得ている。メーン・エンジンの整備を万全にしようと、旋盤工と仕上げ工と材料工の技術まで身につけている。クラスノドン号が進水して以来の乗組員だが、この船にこれほど操を立てているのはなぜか。カナビンの答えはこうだ。

「エンジンが可愛いからだよ。なにしろこのエンジンは随分手塩にかけたから、別れるのがつらくてね」

カナビンの基本給は月一三〇ルーブルで決して多くないが、本人は満足している。カナビンは船舶公社の経理部からもらった給料明細表を見せてくれた。一航海当たり貨物予定輸送量の超過分特別手当、熱帯地航海手当、旋盤工と機関員の兼職手当、念入りなエンジン整備による燃料節約手当など、基本給にプラスされるあらゆる種類の追加手当がこまごまと記されてある。

全部ひっくるめたカナビンの月収は二八〇ルーブル、これは陸上で働いている高い技能資格をもつ労働者の月収とほぼ同じだ。

カナビンの収入のなかの大きな追加手当は、外国航路に出た場合外貨で支払われる出張手当である。



レニングラード港に停泊中のクラスノドン号



左からルイプキン船長、スメヤーノフ副船長、オパーリン船医、カナビン先任機関員、ミハイロフ四等航海士。

もちろん、機関士、航海士、通信士など高等教育を受けた専門職の給料はそれ相当な高給である。外国語のできる乗組員は基本給の10%の追加手当が出る。

船乗りの〃立身出世〃

電気係のセルゲイ・イサーエフは暇になると、船室にこもって教科書と首っ引きである。

セルゲイが甲板員としてクラスノドン号に乗り込んできたのは、中等学校の8学年を終えた16歳のときだった。その後軍隊に入り、2年後港へ帰ってきてみると、顔なじみの船員はその2年のあいだに上の役についてしまい、8学年修了のセルゲイの学歴はクラスノドン号の乗組員のなかで一番ぱっとしないものになっていた。

若者の自尊心が燃えた。セルゲイは夜間中等学校の9学年に入り、夜学に通いながら港で働いた。2年が過ぎ、中等学校の卒業証書をもらうと、すぐ航海に出た。こんどは船の上で、電気工学とディーゼルの勉強をやりはじめた。そして1年半後、船舶の電気係機関員の資格検定に合格した。

こんどはエンジニアの免状をとるのが目標だ。いまセルゲイはレニングラードの高等海事技術学校通信教育3年の聴講生である。記者がこの記事の主人公たちの写真をとったとき、あいにくセルゲイは学校の試験に行っていた。

通信教育を受けている船員には（船員だけに限らないが）、試験勉強と受験のために年間36労働日の有給休暇が与えられる。卒業試験の時はさらに20日間休暇がもらえる。この試験休暇のあいだは船員の平均賃金の範囲内で国が給料を出してくれる。セルゲイは6カ月の有給休期がくると、卒論を書く時休暇がもらえることになっている。

クラスノドン号の乗組員で勉強している者はセルゲイのほかに、高等海事技術学校が二人、中等専門学校が一人いる。

セルゲイ・イサーエフは間もなく船舶機関士の資格をとれるだろう。まだ若いから、このディーゼル貨物船の乗組員の役職をひとつずつ上がるだけではおさまらないかもしれない。クラスノドン号の機関員をやっていて後に機関士になったラジー・ゴリャーチェフがそのよい見本だ。ラジーもやはり通信教育で中等学校と高等海事技術学校を卒業し、いまでは海運公社の機関・船舶課の課長をしている。

先任副船長のゲオルギー・スメヤーノフ（大学卒）は振り出しが舵手だった。それから3等航海士、次に2等航海士になり、いまでは押しも押されもせぬ実質的な船長の役をしている。乗組員の給食、いろいろな日常の世話、当直の割り振り、管理上の問題などは全部スメヤーノフが取りしきる。さて、出世頭はなんと言ってもゲンナジー・チストフだ。チストフは元クラスノドン号の船長だったが、いまはバルト海運公社の次長の要職にある。

頑健な乗組員と船医

もちろん、船乗りというのは原則として頑健な人間だ。重い病気にかかっている者は、医務委員会が航海に出させない。船の乗組員は毎年この委員会の検診を受けてパスしなければならない。それでもやはりソ連の船には必ず船医が一人乗り組む。クラスノドン号の船医オレグ・オパーリンは船医の仕事について次のように語る。

「実を言うと、病人の治療をするということは大してありませんね。患者は胃痛、脊髄神経根炎、高血圧などの慢性病が悪化した連中ぐらいですよ。また軽いケガ、歯痛、頭痛に応急手当てをすることもありますね。24時間いつでも診ています。そのほか、給食の質の監督、食料の正しい保存管理、船室の衛生状態の監督なども船医の毎日の仕事です」

オパーリンの職場は船内の診療室で、物療機器、歯の治療イスと器具、薬局の設備がある。だが、オパーリンは体育室か甲板のプールにいることが多い。この船医は自分もちょっとしたスポーツマンで、全乗組員を引っ張り出してスポーツをさせている。船上では運動不足になりがちな船乗りにはスポーツが一番必要で、スポーツをやっていれば病気にかかりにくくなることを船医はだれよりもよく知っているからだ。

非番の時間

非番の、ひまな時間には何をしているのか？　これは別に下らない質問ではない。長い航路中、船乗り、全乗組員はだれでも気分壮快でなければならず、仕事のないときは休養を十分にとらねばならない。そこで、ほかの船と同じく、クラスノドン号にも四〇〇〇冊以上も文学書（本はバルト海運公社の図書館蔵書で定期的に入れ替える）を備えた図書室があり、夜になれば食堂で映画を見れるし、娯楽室でいろいろな卓上ゲームを楽しむことができる。

祝日が近づくと、乗組員は非番の時間にコンサートの準備をする。そういう夜のパーティーの終わりには前からのしきたりでボリス・ルイプキン船長がギターを手にする。ルイプキンは10年前から作詞を始めた。もちろん、そのほとんどは、辛くてきびしい船乗りという職業、しかしながら人々のなかでも大のロマンチック人間がなる職業を題材にした歌である。

ソ連共産党第27回大会に向けて

ソ連経済――実験から完全な管理方式へ

本誌経済評論員　ゲンナジー・ピサレフスキー

ソ連共産党は来年開かれる第27回党大会を準備する過程で、科学技術進歩を土台にした社会・経済的発展の促進を主要課題に掲げた。この課題を達成するには、経済問題を総合的に解決する新たなアプローチが必要である。これらの経済問題のうちで最も重要なのが管理の再編成である。

M・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長はさる6月の科学技術進歩促進の諸問題に関する党中央委員会における会議での報告の中でこう指摘した。

「経済管理の立て直しの主要方向は、社会主義経済の長所をさらに十分に、全面的に活用することである。われわれは民主集中制の一層の強化と発展の方向に進まなければならない。管理と計画化での中央集権方式の効率の引き上げ、企業の自主性と責任の拡大、指導のより柔軟な形態や方法、独立採算制や商品・貨幣関係の積極的利用、大衆の創意の大々的発揚――以上が再編成の原則的要点である」

さてそのための第一歩はすでに踏み出され、工業における大規模な経済的実験が進められている。この実験には工業生産高の約12%を占める幾つかの産業部門の企業二三〇〇が参加している。

実験の目的は、中央集権的管理と企業の自主性との最適の結びつきを探求することにある。企業は中央から企業におろされる限られた数の指標を土台にして計画を立てる。企業の活動は、発注者に対する契約義務や新しい技術の導入課題がどのように遂行されたか、労働生産性や利潤の伸びはどうだったか、製品コストはどれだけ下がったかなどを基に評価される。企業の管理部は、高い技能資格をもつ従業員の賃金に同人の月平均賃金の50%以内の割増金を加算してもよいことになっている。

新製品の卸価格を定める企業の権限は著しく拡大された。輸出製品の生産を刺激するために、外貨収入の一部を企業の手元に残して、設備、原料、資材の輸入に使わせている。

同時に企業の活動に対する企業の責任が加重された。たとえば供給計画の未達成分1%について、物質的奨励基金が自動的に3%削られ、逆に全部の注文を遂行した場合物質的奨励基金は15%増やされる。

これまでの実験の成果は全体として歓迎すべきものである。増産分のほとんど全部は労働生産性の向上によるものであり、企業の従業員は減っている。これは、人手不足に悩んでいる経済にとってきわめて重要なことである。

しかし実験の過程で誤算や誤り、手落ちも現れた。まず第一に科学技術進歩の促進、新技術の導入や生産物単位当たりの資材消費額の減少、投資効率の上昇などの最適のバリエーションが発見されなかったことである。

ソ連における社会主義の成果は、まず失業者がいないこと（すでに3世代にわたってソビエト人は失業というものを知らない）と赤字企業の存在が保証されていることである。これらはあらゆる現象と同じく逆の面も持っており、そのため、仕事の面での消極性、怠けていても食ってゆけるという気持ちを生み出している。こうした否定的現象は、経済的刺激の方法で取り除くことができる。その方法とはまず、商品・貨幣関係を効果的に利用することであり、いたるところ、あらゆる点で独立採算制を導入することである。

ソ連経済では、このほか、サービス分野、商業、学術機関などでも実験が行われているが、これらの実験は保守主義、消極性、悪い経営に対する総攻撃前のいわば〃戦闘偵察〃にすぎない。一言でいえば、企業の目標を最も重要なこと、つまり科学技術の進歩の促進や国の巨大な知的潜在力の効果的な利用に向けるような、完全な管理方式への移行が必要である。

この課題を解決するのは容易ではない。労働者から大臣まで、技師からアカデミー会員まで各人の頭と気持ちの切り替えが必要である。この仕事は張りつめたもので、革新的なものである。学ぶことは、沢山あるし、数多くの慣れを捨てなければならない。しかしこれよりほかに道はない。国を社会・経済的進歩の新しい段階に引き上げようとの決意に燃えているソ連の人々は、このことをよく自覚している。

グルジアの国を挙げての祭り "トビリソバ"

エレーナ・アレクサンドロワ
カメラ　A・グシチン



グルジアの民族舞踊"キンタウリ"

統計では大抵のことが分かるが、"トビリソバ"にどのくらいの人が参加するかは、統計でも分からない。トビリソバはグルジア共和国の首都トビリシで毎年秋行われるお祭りである。この祭りは7年前に生まれ、トビリシ市とトビリシ市民をたたえて命名された。文字通り詩と音楽、踊りと民族芸能のカラフルな一大シンフォニーである。

グルジアの村々では大昔から、ブドウの収穫が終わったことを祝う祭り"ルトベリ"が行われてきた。都市では、秋のカーニバルとも言うべき"ケエノバ"なしの生活は考えられなかった。トビリソバは、ルトベリの儀式的な性格とケエノバの華やかさを取り入れただけでなく、民族的伝統とグルジア芸術の民族的性格を現代と結合させて、これらの古い習慣を変えてしまった。トビリソバは夏の農作業が終わったことを祝い、大地の豊かな恵みと豊作を誇示する祭りである。さらにトビリソバは"トビリシは平和と友好の都市"をスローガンに掲げる平和と労働の祭典でもある。

トビリシには80の民族の出身者が住んでいる。祭りの日にはそのすべてが、友好の広場と人々が呼ぶリケ広場にやってくる。古いメテフ寺院の前は巨大な舞台となり、人々は笑い、歌い、踊る。ドラムが打ち鳴らされ、笛がメロディーを奏で、グルジア語、ロシア語、アルメニア語、アゼルバイジャン語その他の言葉でメッセージが交わされる。

グルジアの隅々から農民が収穫物を持ってトビリシに集まってくる。ブドウ、モモ、カキ、香りのいい薬草の束。街じゅうに市が立つ。

クラ川に沿った広場には野外民俗博物館が出現した。グ



民族衣装を着たグルジアの娘



グルジア人は歌が好き。すぐにコーラスの輪ができる。



ベランダから高みの見物

ルジアの各地方を代表する農民が、ここに農村生活を再現して見せてくれたのだ。農家があり、その脇に機小屋があって、チーズ製造小屋、ブドウ圧搾所も配置されている。だが、これは単なる野外博物館ではない。トネと呼ばれる特殊な窯でパンが焼かれ、その場で焼き立てを味わうことができる。コンロの上ではシャシリク（羊肉の串焼き）がおいしそうに焦げており、手に取って食べることができる。薬味を添え、アンズの特製ソースをかければ頬が落ちるほどだ！

ちょっと夢中になりすぎたようだ。先へ進もう。ここではじゅうたんを織っている。おとぎ話でしか見られないようなすばらしい模様。少し離れたところでは、群集が見守る中でレスリングが行われている。

貴賓席には白髪の老人たちが座っている。こんなところにも、ちゃっかりした少年たちが割り込んでいる。ここからなら、居ながらにして何でも見ることができるからだ。

テレビのカメラマンがいいところに陣取っている。メーンストリートのルスタベリ大通りを選んだのだ。ここでは今日ばかりは自動車は影をひそめ、牛に引かれた荷車や、いかめしい御者が乗った古めかしい馬車が幅を利かせている。

諸民族の友好と団結、友情をたたえる歌〝ムラバルジャミエル〟が街の上に流れる。トビリソバの開催中はトビリシは巨大な即興劇場と化し、広場がその舞台になる。木彫りをあしらった家々のベランダ、石造りの塔、古い城壁が何万というプロやアマの芸能人のための天然の舞台装置になる。



メーンストリートを悠然と走る馬車



祭りにはつきものの民族格闘技



祭りでにぎわう市内の広場



木彫りの飾りのあるグルジアの民家のベランダ

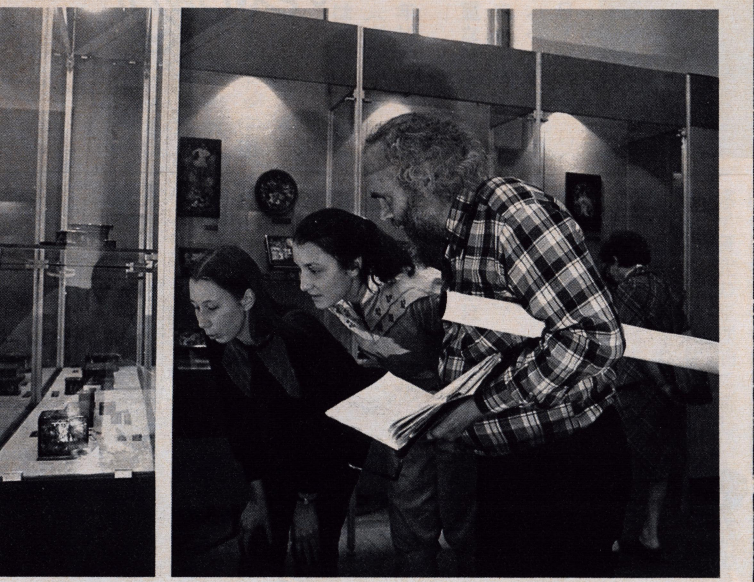


トビリソバには老いも若きも参加する。



▶街頭で糸を紡ぎ、じゅうたんを織る婦人たち

パレフ細密画60周年記念展





今年の7月、モスクワの全ロシア装飾工芸・民芸博物館で、パレフの細密画60周年を記念する展覧会が開かれた。

パレフ村（ソ連欧州部中央、イワノボ州）はすでに15世紀には存在していた。昔は聖像画で有名だったが、20世紀初頭、かつての聖像画家たちは技術を生かした新しい応用分野を探求し、イワン・ゴリコフが初めてコンクリ紙細工（パピエ・マシェ）に絵をかくことを思いついた。1924年12月5日、パレフ村に細密画職人組合が組織された。

技術にも工夫が加えられ、パピエ・マシェの手箱、盆、化粧品入れ等の黒いラッカー地に極彩色や金の幻想的な絵を描く方法が確立した。写真右上はイワン・ゴリコフ（1886-1937）作『ヤロスラブナの嘆き』、右は同『トロイカ』





トビリシに「虎と若者」の像

グルジア共和国の首都トビリシの西の入口に「虎と若者」の像が建立された。この像は12世紀のグルジアの大詩人ショタ・ルスタベリの叙事詩『虎の皮を着た勇士』をテーマにしたもの。叙事詩は愛のために偉業を成し遂げた若者についての民間伝承がモチーフになっている。像の作者はグルジア人民芸術家でソ連国家賞とルスタベリ賞の受賞者E・アマシュケリ、碑の設計は建築家でソ連国家賞受賞者V・ダビタヤ。



80歳になったコズロフスキー

今年の春、ソ連の名テノール歌手でソ連人民芸術家のイワン・コズロフスキーは80歳の誕生日を迎えた。コズロフスキーは長い間ボリショイ劇場の主役歌手を務め、チャイコフスキー、ワグナー、リムスキー＝コルサコフのオペラのアリアで鳴らした。コズロフスキーの美声はいまも衰えておらず、故郷のキエフ州マリヤノフカ村の児童音楽学校で子どもたちを指導している。80歳の誕生日を祝うコンサートには子どもたちのコーラス隊と一緒に出演し、満場の喝采を浴びた。夏にはウクライナ、ウラル、シベリアの諸都市でコズロフスキーのリサイタルが開かれた。

文化トピックス

——金星からデータを送信——

ベガ計画の第1段階成功



ベガ探査機の降下装置から分かれて金星の大気中を飛んだ観測気球と同じもの(宇宙研究所の実験室で)



▲ベガ1号、ベガ2号の金星・ハレー彗星探査計画についてソ連外務省プレスセンターで行われた記者会見。左からV・L・バルスコフ・アカデミー準会員、R・Z・サグデーエフ・アカデミー会員（宇宙研究所長でベガ計画の指導者）、一人おいてV・M・コフツネンコ・アカデミー準会員。

モスクワ時間6月15日7時1分、ソ連の自動ステーション「ベガ2号」の降下装置は金星のアフロディテ大陸の北西の縁に着陸し、貴重なデータを送信し始めた。

こうして、一九八四年12月15日に開始された「ベガ」計画（本誌ことしの4号参照）の第1段階は見事に成功した。

昨年の12月15日、バイコヌール宇宙基地から惑星間ステーション・ベガ1号が打ち上げられ、6日後の12月21日には同型のステーション・ベガ2号が出発した。一九八五年6月9日、ベガ1号から金星に向かって降下装置が切り離された。降下装置はその後、二つの部分に分かれた。調査カプセルは金星に着陸し、大気の温度、気圧、風速、水分、光の吸収と拡散、ガスの組成、地面の性格、放射性元素の含有量について貴重なデータを地球に伝えた。降下装置のもう一つの部分――観測気球は金星の雲の中を自由に漂いはじめ、惑星研究の原理的に新しい方向に基礎を置いた。気球観測は降下装置では解決できない多くの問題に答えを出すことができる。気球は雲層のほぼ真ん中を一万km飛んだ。この雲層は驚異的な形成物の一つで、地球のものとは全く似ていない。

ソ連科学アカデミーのV・コテリニコフ副総裁はこの実験について次のように語った。

「実施された実験は宇宙空間の研究に新しい一ページを開くものだ。金星大気の気球観測実験は特にすばらしいものだと言わなければならない。周知のように、金星自体はゆっくりと回転している。金星の自転周期は二四三日だ。その代わり金星の上層大気は、地球からの観測によれば、非常な速度で動いており、4日間で金星を完全に一周する。ヘリウムを詰めた気球につるした浮漂観測ステーションを金星の空に飛ばそうという考えは、ここから生まれた。惑星研究史上このような実験は前例がない。ベガ1号の気球の観測機器は2昼夜にわたって情報を送ってきた」

6月15日、世界のすべての大電波望遠鏡は再び金星に向けられた。ベガ2号ステーションが金星へ接近していたからだ。ベガ2号の降下装置はベガ1号の降下装置から一七〇〇km離れた地点に着陸し、金星のオレンジ色の空にもう1個の地球製の気球が浮かんだ。

つい最近まで、金星を包んでいる厚い雲層の下でわれわれが送り込んだ探測機を待ち構えているものについてはまったく分からなかった。一九六七年に金星を訪れた金星4号の降下装置は20気圧に耐えるように設計されていたが、着陸する前に情報の送信を止めた。

一九八二年、金星13号と14号が地球へ送ってきた写真でわれわれが目にしたのは、岩石の多い陰気な荒野で、その荒野は地平線まで亀裂と層を成している角ばった薄い石の板、大きさのいろいろな石で覆われていた。そして今回、ソ連の降下装置はプラス四五二度Cの気温と86気圧の条件の下で作動した。操作は自動で行われている。信号を地球から金星に送るには約6分（正確には三四三秒）と時間がかかりすぎるため、地球から観測機器を操作するのは事実上不可能だからだ。降下装置は地面をドリルし、標本を採取し、装置内部で気温と気圧を地球上のレベルにまで下げ、標本を分析して情報を地球へ送ってきた。

信じられないほど苛酷な金星の条件の中で、降下装置は予定された時間よりも長時間、そして肝心なことは故障せずに作動したのである。

地球化学・分析化学研究所長のV・バルスコフ・ソ連科学アカデミー準会員は語る。

「われわれは今のところ金星の岩石の構成についてほとんど資料を持っていない。降下装置が着陸した3地点の天然放射性元素の含有量は分かっている。そしてわずか2地点だけで岩石の完全な化学組成が分かっている。ある地点では地球の古い岩石に似たいわゆる霞石閃長岩が見つかっており、別の地点では海洋玄武岩に近い岩石が見つかっている。これは全く当然のことだ。金星は地球と同じように大きな惑星であり、原始惑星物質の分離過程はさまざまに進行した。これらの過程をもっとよく知るには、つまり、地球の過去をもっとよく知るには、統計学的資料を集めなければならない。今回、二つの降下装置は大きさではアフリカ大陸に近い広大なアフロディテ大陸に着陸している。ベガ2号の降下装置でわれわれは初めて岩石中のウラン、トリウム、カリウムの天然放射性元素の含有量についてのデータを入手し、同時にドリリングで採取した標本の完全な化学組成を知ることになろう。これは非常に意義のあることだ」

金星への二重のゴールは成功裏に終わった。

ベガ1号、2号の飛行装置は活動を続けている。これらの探査機は来年3月にハレー彗星に出会う予定である。

邦楽4人の会のソ連公演

邦楽4人の会代表・尺八演奏家　北原篁山

邦楽4人の会・YONIN NO KAI TOKYOは、日本の尺八・三味線・箏の演奏団体で、一九五七年夏モスクワの第6回世界青年学生・平和友好祭に際し開かれた世界民族楽器コンクールにおいて、第一位金賞を受けた4人の演奏家によって創立された。

その後、世界35カ国に11次の演奏旅行をおこない、今年も外務省・国際交流基金の派遣により、米国・カナダ・西ドイツ・イタリア・モロッコ・チュニジア・フランスを巡演のあと7月9日モスクワ空港に到着した。





モスクワの中央テレビ・大ホールで行われた公開録画の模様

車が都心に近づくにつれ28年前の感激と興奮が昨日のことのようによみがえってきた。あのときレーニン・スタジアムに集まった10万の世界の若者が鳩を飛ばし誓った「平和と友好」の旗じるしは今も生きている。

そこにいた私や、箏の後藤すみ子さんが日本音楽を世界の人々に聴かせる仕事を続け、モスクワで共に受賞した外国の奏者と、世界各地の音楽祭などで再会をよろこびあい、時には同じステージで腕を競いあうことも出来るのである。

4人の会のコンサートは、友好会館で開かれ、ソ日協会副会長の歓迎のスピーチで始まった。最前列には片山潜の娘のヤスさんのお顔も見え、日本に関心の深い聴衆が多いらしく、地味な古典曲も浸み透るようで嬉しかった。盛んなアンコールの後、丹波駐ソ代理大使夫妻ほか、日ソ各方面より華やかな花束が贈られ終演となった。

翌日はモスクワ中央テレビ大ホールで公開録画がおこなわれた。プログラムは昨夜のコンサートと同じで、箏独奏「みだれ」／尺八独奏「慷月調」／三味線独奏「新砧」／「春の海」／一柳　慧作曲「四重奏曲」／牧野由多可作曲「沖縄民謡による四重奏曲」である。

公開録画は、モスクワ中央テレビの人気アナウンサー、ウラジーミル・ウーヒンさんの司会・解説で進められた。ウーヒンさんは、数年前まで東京でNHKロシア語講座講師としてテレビに出演していた人で、私も見覚えがあり話しているうちに気持が楽になり、演奏を始める前の緊張がやわらいだ。

各楽器の独奏曲の前に、私と後藤さんが楽器と曲の解説を話し、ウーヒンさんがロシア語で満員の聴衆に話したので、その反響が盛んな拍手でかえって来るのが楽しく、また聴衆に若い男女の多いことも嬉しかった。1時間40分ほどで録画は終了、ステージにはサインを求める多くの人々が昇り、私たちも疲れを忘れてサインに応じた。

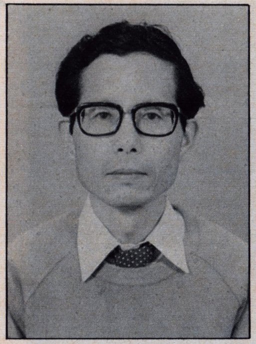
この邦楽4人の会・特別番組は、八月下旬に全ソ連邦に放映されるとのことで、帰任直後の鹿取大使とお会いした際も「日ソ文化交流の一環のなかで、日本の民族音楽をソ連邦の人々に親しみ理解して貰う好番組」と喜ばれた。

私たちはモスクワ公演後、ボリショイ劇場で、バレエの現代作品と、ワーグナーのオペラに招待され、世界中の人々から尊敬と愛情を受けているソ連邦の芸術を楽しむときを過ごした。それは今回の世界一周旅行の全公演を終えた私たちに、さらに将来に向かい奮起をうながす高度の公演であった。

私たちが日本に帰国するのと入れ替わるように、私と後藤さんの指導している三人の若い音楽家が今回の友好祭に参加した。彼等もまた今回の体験が、その将来に大きな成長のきっかけとなることを祈りながら帰国した。

クイズ1等賞の旅をして

中山　好教



本誌ことしの愛読者クイズ〝あなたはソ連をご存じですか?〟で1等になった中山好教さん(新座市、会社員)は、規定により6月27日から10日間、ソ連旅行に招待され、モスクワ、レニングラード、ムルマンスクの3都市を訪れました。以下はその感想です。

長年の望みが叶えられ、ソ連国土を旅行出来た。我が人生における大きな出来事となった。

飛行機に乗ったのは初めてである。成田からモスクワ、レニングラードからムルマンスク、ムルマンスクからモスクワ、モスクワから成田と、合計4回、搭乗時間は約21時間、距離は約2万5千キロになると思われる。これだけのことでも、巨大旅行とでも言いたくなる。

費用は、宿泊費、食事代、車代を含めて全額、ノーボスチ通信社が支払ってくれた。

レニングラードに2泊、モスクワに3泊、モスクワからレニングラードへの車中で一泊——有名な〝クラースナヤ・ストレラー(赤い矢)〟号である。

レニングラードでは、十月革命の時、当初革命本部の置かれた建物を見た。レーニンの立像が、広々とした前庭にあり、マルクスとエンゲルスの胸像は、木立の中に向い合っている。ペトロパブロフスク要塞は、ネバ河に浮かぶ。

地球儀で見ると、ソ連ヨーロッパ部の国境近く、しかも最北で北極海に近く、ムルマンスクという都市が確かにある。人口は現在40万で、大学、病院、労働組合会館、ホテル、飛行場と、近代都市としての風貌は十二分に備えていて、主産業は漁業という。気温は、夏プラス15度平均だが、冬は平均マイナス15度、最低記録はマイナス39度であったという。寒さのためか、市民の平均年齢は28歳である。日本人でも、ソ連人でさえも、ここを訪れる人は多くないそうだが、今は白夜の季節であり、夜の10時、11時になっても、ホテルの窓から見た外の明るさは、昼間とそんなに違わない。ムルマンスクの〝アルクチカ(北極圏)〟ホテルに3泊した。残念なことに咽頭炎にかかり、スケジュールを半ば消化出来なかったが、医師が往診して下さり、病院での受診、薬の投与や、インツーリストガイドの女性が喉によいからと蜂蜜を、地方プラウダ紙記者のシュヴァーロフさんという方もお見舞に、ホテルのサービスも大変丁重で、心のこもったものであった。

市の労働組合会館に案内された。漁船員や労働者や少年少女達が、美術、音楽、映画、クラシックバレエ等のアマチュア創作活動にたずさわるための文化会館と思う。美しい婦人が館内を順に案内し、館長さんにもお会いした。

隣接するコラ市(人口一万)の民俗博物館も見学した。

モスクワでは僕の希望で、モスクワ放送日本語課を、ビルの入口から、レービン課長のお部屋まで、つぶさに見学した。ラジオでおなじみのレービン課長さんは、同じく日本人の古参アナウンサー清田さんや、主としてソ連人から成るスタッフに紹介して下さった。その上放送番組出演の特典も与えられ、スタジオに課長と、2台のマイクに向って坐り、気ままなおしゃべりをした。出演料として39ルーブル(約一万2千円)頂いた。

滞在中、「今日のソ連邦」編集部のハルラメンコさん、プラテさん、レニングラード大学生で観光案内をつとめた女性、モスクワ放送日本語科のレービン課長と課員ガーリャさん以外は、日本語は通じなかった。そのような国にいて、拙ないロシア語でも意思の疎通が成されると、胸がすーっとする。モスクワで僕は、買物をしている元気のよい小母さんに尋ねて牛乳店をさがし牛乳を買い、ビュッフェでウインドーに並んだサンプルの名前をそのまま読んで料理を注文し、クツーゾフスキー通りを散歩しながら、ジュースとアイスクリーム、それに薬局で体温計を買い求めた。

ソ連人は、歴史的遺産を誇りとし、大切にしている。クツーゾフスキー通りとは、一八一二年のナポレオン戦争に勝利した名将軍にちなむ、モスクワ第2の大通りである。レニングラードのエルミタージュ美術館は、大美術館の名にふさわしく天井は高く、広く、けんらんとしている。ネバ河を船で行くと、ピョートル宮殿があり、2メートルの長身であったピョートル一世とその妃の肖像画がかかげられ、18世紀の大皇帝へのソ連国民の尊敬と思慕の念がにじむ。ネバ河、モスクワ河、トーポリの並木、菩提樹、公園のリラの花盛り、レニングラード郊外オリギノの白樺多い森林、ムルマンスクの丘からのコラ川は、祖国の自然、風物へのロシア・ソビエト国民の愛情に美しく染っているようだ。日本の自然が、日本国民の愛情に美しく染っているように。

最終日の7月6日は、編集部のプラテさんが案内して下さった。赤の広場とクレムリンである。レーニン廟、聖ワシーリー寺院を眺め、最高会議場建物(国会)の前を通り、大砲、大鐘を見た。

今回与えられた旅行の機会を感謝しつつ、日ソ善隣友好が保たれ、40年前の悲惨な状態に逆戻りしないようにと、心から祈る。

書道に挑戦したソ連の留学生

モスクワ大学アジア・
アフリカ学院5年生
カーチャ・ヤリコワ

モスクワ大学付属のアジア・アフリカ学院の学生たちは約10ヵ月東海大学に留学し、このほど帰国した。ここに紹介するのは5年生のカーチャ・ヤリコワの留学奮闘記——


玉置先生の指導を受けるソ連の留学生

私は日本語を習いだしてからもう5年になります。もちろん、最も難しかったのは漢字でした。まず漢字は一定の意味をもつ一つ一つの要素からなる小さな絵ではなく、全く無秩序な画の寄せ集めだというふうに理解していたのです。

しかし日本語をマスターするには、漢字に親しみを持ち、それぞれの漢字の意味を究明することが必要です。ですから東海大学に入ってから、まず書道をやろうと思いました。


日本の学友と一緒のカーチャ・ヤリコワ（右）

書道部に入れたときはうれしくてたまりませんでした。1週間たつかたたないうちにもうレッスンが始まり、書道を習うことになったマリナ・フルイノワ、ジーマ・ラゴジン、アーニャ・カルペコワ、それに私の4人は、試験の前のように興奮しました。

書道部の部長佐藤さんは書道の用具やすずりの使い方、墨の磨り方、筆の種類、筆の正しい持ち方を詳しく説明してくれました。

すべてが非常に分りやすく、簡単なように見えました。しかしすぐに予想しないことが起こったのです——私たちは各自筆を取って、一という漢数字を書くように言われました。ところが大変、いざ書き出そうとすると、筆は手から滑り落ち、紙には一の代わりに油のしみのようなものができました。「大丈夫。最初の一が最も難しく、一が書けたら、あとはごく簡単ですよ」と、先生たちからなぐさめられました。

こうして、毎週火曜日と木曜日に私たちは筆と墨を持って書道部に通いました。玉置先生は古代の書道の歴史、有名な書家たち、書道のさまざまな書体について説明してくれました。私たちは時間の大半を書道の練習に費やしました。

まず一がどうにか書けるようになって、いくらか進歩し、自信もついて、さまざまな書体で書いてみました。でも、それはほんの初歩でした。ですから書道部の展覧会（新宿で開催）に漢字を一字書いて出すようにとの玉置先生のおすすめは、全く意外でした。しかしお断りするのは気がひけたので、一か八か展覧会に出す作品の準備を一カ月余り前から始めました。

先生は私たちの誤りを辛抱強く直し、私たちは選んだ漢字を何回も書き直しました。ついに展覧会の日がきました。立派な出来のプロの作品の中に、私たちのロシア語の署名入りのまずい作品が4点見付かりました。

展覧会は終わりました。お別れパーティーが開かれ、皆で『モスクワ郊外の夕べ』、『カチューシャ』を合唱しました。帰国の時が来たのです。

私たちはモスクワへ帰ってからも、書道部で教わったことを忘れないように努めます。

本だな

『イギリスから日本まで』

——シベリアのジャーナリストが書いた紀行記



本書の表紙

本書はイルクーツクの記者セルゲイ・オストロウーモフの海外旅行の印象記集。東シベリア図書出版所から刊行された（一一〇ページ、発行部数二〇〇〇部）。

著者はノーボスチ通信社の東シベリア担当記者で、「今日のソ連邦」誌上にもバム鉄道の建設とか、バイカル湖の環境保護問題とか、イルクーツクまたはブラーツクの日本人観光客のことなど、東シベリア関係の記事をよく書いているおなじみのジャーナリスト。

こんど刊行された紀行集は、著者のイギリス、日本、スウェーデン、フィンランドの旅の印象、各地での人々との出会い、海外での見聞と随想を日記風にまとめたものだが、一九七二年と八二年の2回にわたって訪れた日本の印象が約1/3を占めている。この、いわばジャーナリストの旅日記は簡潔なスタイルだが、内容は非常に濃くて、細かな隅々にまで行き届いた著者の目はきわめて生彩に富み、細かなデテールのどれもがはるかに複雑な印象や事物の謎を解く鍵になっているところとか、描写の対象となっている人間の運命を温かく見守っているところなど、読者の心を強くとらえる箇所が多い。

日本の印象記やメモはソビエトの新聞雑誌やいろいろな作品集に毎年現れるので特に珍しくもないが、オストロウーモフの日本印象記がとくに面白いのは、当の日本人が当たり前すぎて話題にするほどのことがないと、久しく注意してもみなかったほんの些細なことをめざとく沢山取り上げていること。これは注意深い、そして肝心なことだが、好意に満ちた観察眼の持ち主でなければできないことだ。

著者はソ日協会イルクーツク支部の活動的な理事の一人で、イルクーツク市と金沢市、シェレホフ市と根上町、ブラーツク市と七尾市との姉妹提携運動に一役買っており、ソ日両国間の全面的な接触の拡大に努力している。本書にも、両国の交流の改善に力を尽くしている日本側の人たちを一々紹介し、その活動ぶりを物語っている。

イルクーツクの姉妹都市であり著者の友人が多い金沢市や石川県全体の説明にもかなり多くのページが割かれているので、読者はまるで著者とともに、金沢市内をそぞろ歩き、有名な兼六園（イルクーツク市のソ日友好青年クラブの名称になっている）や金沢城址を見物した気になってしまう。

街路の清掃人たち、道路修理の作業員、大工、喫茶店のウエートレスなど金沢市民の勤勉ぶり、またしても茶の湯、欧州にとっては驚くべき日本式旅館や城のインテリアなど、昔からいつも日本的生活の特徴として取り上げてきたものにこの著者も触れているが、これまで見逃がされてきたことを掘り出してまったく新しい語り口で説明しているところがおもしろい。

オストロウーモフは外国の読者にソ連やシベリアの話をいつもおもしろく書いてきた記者であるが、こんどの海外旅行記でもその特色は少しも変わらず、読者はまるで自分が絶えず著者と肩を並べ、著者とともに現実を「内側から」眺めようとしているような気分になってしまう。そして、著者が海外旅行で見つけたよき知己が、読者自身のよき知己になってしまうような気がするのである。

☆　☆　☆

ノーボスチ通信 特派員報告

デタントは生きている

E・ジェレズノフ記者（ヘルシンキ）

全欧安保・協力会議の最終文書調印10周年を記念して開かれた会議がヘルシンキで終了した。ノーボスチ通信社のエブゲニー・ジェレズノフ特派員はフィンランド代表団の一員であるエルキ・リーカネン国会外交委員長（フィンランド社会民主党書記長）と会って、次のような印象を語ってもらった。

「一九七五年の夏ヘルシンキで開かれた全欧安保・協力会議はデタントのクライマックスとなった。国際緊張の緩和こそすべての国家の共通の利益に合致するものであることが多くの人に明らかになった。ところが、残念なことに、この数年の間に情勢が変わってしまった。デタントはある国を利し、ほかの国には損になるという意見が生じた。こんな理解の仕方が信頼の空気を強める助けにならないことはいうまでもない。

私の考えでは、現在のような国際情勢下では誰かが建設的な平和の音頭をとることが必要だ。その意味でも、ソ連が本年8月6日から一方的に核実験を中止するというゴルバチョフ氏の声明は肯定的に評価すべきだ。

西側と東側の国々の意見はちがうが、デタントの精神は生きていて、全欧に普及する過程が続いていると、最後に強調したい。また、最終文書が調印されてから過ぎた10年は、この歴史的文書に盛り込まれた諸原則が国際関係において守られることの必要性と重要性を実証するものであった」

米警察の人種差別主義

V・シーモノフ記者（ニューヨーク）

一九八三年9月15日の曇った朝、警察のパトロール隊がニューヨーク市内のある病院に手錠をかけたひとりの黒人の若者を連れてきた。若者は意識不明のまま13日後に死んだ。司法解剖後ニューヨーク市の病理解剖主任医のエリオット・グロス医師は検死欄に「心筋梗塞」とかなり月並みな死因を記入した。

黒人青年マイクルが逮捕された場所はユニオン・スクエア・パーク地下鉄駅の、一番街と十四番通りの交差点で、つまらぬことが原因だった。交通警察の警官が、マイクルが車の横腹にスプレーのペンキを吹きかけたと勘違いしたのである。

馬鹿ばかしいような冤罪だが、実はその場の様子を目撃していた人間がいた。レベッカ・ライス（20歳）という女子学生で、ちょうど窓がユニオン広場に面したアパートの住人だが、午前3時に学生だけのパーティーから帰ってくると、通りから「ぼくがなにをしたというのだ」と何度も叫ぶ声が聞こえたので、窓からのぞくと、恐ろしい光景が見えた。6人の警官がひとりの黒人の若者をげんこつ、靴、警棒でなぐったり蹴ったりしたあげく、押さえつけて手足に手錠をかけた。あわれな犠牲者は「助けてくれ」とうめくのみであった……

マイクルは警官に脳脊髄に重傷を負わされたのであった。このような犯罪的行為の動機は、ニューヨーク市警に大分前から滲みこんでいる人種差別意識以外にない。しかもここでは、黒人にたいする暴行は警官が昇進するための手柄のように考えられているのだ。

カプリビは熊蜂の巣

A・ジグノフ記者（ダルエスサラーム）

ナミビアの北東部にボツワナ共和国とアンゴラ人民共和国に挟まれた細長い地帯がある。その尖った部分はジンバブエ共和国とザンビア共和国の南の国境に突き当たっている。ここカプリビをアフリカの新聞は「アフリカ大陸の心臓部に向けられたクサビ」と呼んでいるが、正にそのものずばりだ。

現在ナミビアは一種の要塞地帯と化し、カプリビは立ち入り禁止になっている。南アフリカ諸紙の報道によると、カプリビに軍用飛行場や大軍事基地がいくつもつくられ、熱帯地方での戦闘のための訓練所が1カ所できている。これまでにもこの地帯の国境沿い数百kmには一面の地雷原や巧妙な落とし穴や鉄条網が設けられていたのに、また新たな高圧送電線が建設されている。

カプリビには第32特殊大隊が常駐している。残忍非道で鳴るこの大隊の隊員はSWAPO（南西アフリカ人民機構）部隊の制服を着こみ、ナミビアやアンゴラの村々を襲っては住民を皆殺しにして、その罪をSWAPOになすりつけ、この人民の抵抗組織にたいする人々の信頼感を失わせようとしている。

だが、人種差別主義者どもの軍事・戦略計画上のカプリビ地帯の重要性はこれだけではない。南アフリカ共和国政府はカプリビの絶好の地理的位置を利用して、隣接諸国に脅しをかけてアフリカ南部の解放運動を応援しないようにさせ、ついでにアフリカ諸国の国内情勢を不穏に陥れて、その経済的困難をつのらせようとしているのである。アフリカ諸国の主権を犯してカプリビ地帯から反革命匪賊どもを送りこみ、工業企業や鉄道などの破壊工作をおこなわせているのはこのためだ。SWAPOのサム・ヌジョマ議長が言ったように、南アフリカ政府はカプリビをナミビアのほかの部分から切り離してエセ自治領のホームランドにしようとしているのだ。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年8月前半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、第12次5カ年計画中と西暦二〇〇〇年までの長期間にわたる技術水準と機械工業製品の質を抜本的に引き上げ、科学技術進歩の基盤である機械工業の振興をはかる措置に関する問題を審議した。

また機械工業コンプレクスを優先的に発展させることと国民経済における労働生産性を大幅に高める新世代の機械、設備、計器の生産への急速な移行に必要な条件をつくることを定めたソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議の決定を採択した。科学機関と設計機関の仕事の効率を高め、それらの試験・実験基地を抜本的に強化する数々の措置を決めた。一九八六―一九九〇年の機械工業振興投資は、第11次5カ年計画中に使われた金額の1・8倍となる。投資総額の少なくとも半分以上は既存企業の設備更新と改修、固定フォンドの資産部分の更新に使われる。

（ソビエツカヤ・ロシア紙8月2日号）

※　※　※

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、石油、コンデンセート、ガスの採取に関するソ連エネルギー計画の目標達成を保障する、一九八六―一九九〇年の西シベリアの石油・ガス産業の総合的発展に関する問題を審議した。次の5カ年計画では、しかるべき生産設備の操業を開始させ、石油ガス・コンプレクスの諸施設での建設・組立作業量を現行5カ年計画の1・6倍に増やすことになっている。第12次5カ年計画では、西シベリア石油ガス・コンプレクス地域に住宅や社会施設、文化・生活サービス施設が大量に建設される。

さる7月にノボシビルスクで開かれたシベリアの生産力発展と科学技術進歩促進に関する全ソ会議で出された党、ソビエト機関、経済機関の学者、代表者の提案が審議された。これらの提案が第12次5カ年計画と二〇〇〇年までの国の経済・社会発展の基本方向の作成のさいに検討され、採用されることが目的にかなっていると認められた。

政治局は全欧安保・協力会議の最終文書調印10周年を記念するヘルシンキ外相会議へのソ連代表団の参加に関するE・A・シェワルドナゼの報告を聴取した。

外相会議は、欧州諸国民の安全保障、あらゆる分野での信頼の強化と協力の発展や、諸国間の相互関係におけるデタントの復活をめざすソ連と他の社会主義諸国の積極的な政策が諸国民の利益にかない、多くの国の間で良い反響を得ていることを示した。

（プラウダ紙8月10日号）

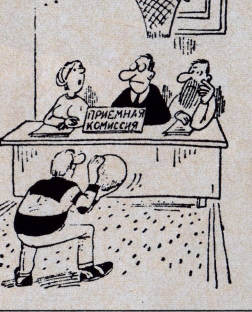
ソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議の決定

ソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議は「新経営方法の普及と科学技術進歩の促進に対するこれらの方法の影響の強化に関する」決定を採択した。

決議は、計画化と経営活動における工業生産合同（企業）の権限の拡大と仕事の結果に対する生産合同の責任の強化に関する経済実験が成果を収め、生産効率と製品の質の向上の大きな可能性を引き出したことを指摘した。

経済実験に参加している各省の生産合同（企業）は、一九八四年に生産量、労働生産性の向上、利潤、コストの引き下げ、優良製品の生産に関する目標課題を超過達成した。そのさい全増産分は人手を増やさず、逆に多くの場合人手を減らして達成された。契約による製品の納入義務の遂行が著しく改善された。よい成績を上げている労働集団は、従業員の物質的奨励や住宅、就学前児童施設、ピオネール・キャンプに対する勤労者の要求の充足などの社会問題の解決のための広範な可能性を得た。設備更新における生産フォンドの役割が増大した。

（プラウダ紙8月4日号）



入試選考委員会（E・ミルトカ作、トルード紙8月3日号）

アムール州でタンチョウの調査

このほどソ連の鳥学者たちは、アムール州のヒンガン自然保護区の沼沢地に生息するタンチョウの営巣地を調査し、国際ツル保護計画に従って登録し、鳥の脚に環をはめた。

ソ連ではタンチョウは主にヒンガン自然保護区域内で営巣する。保護措置のおかげでツルの数は増えており、ソ連、日本、中国の専門家たちはこのほどタンチョウの移動コースの共同調査に取りかかった。

（イズベスチヤ紙8月7日号）



音楽の影……（Y・アブラモチキン撮影）

短信アラカルト

新しい水中翼船

新しい河川用の「ラストチカ」型ディーゼル水中翼船が、ことしから試運転に入っている。乗客定員は70人。船室にいてもエンジンの音はほとんど聞こえない。時速は90kmなので、都市と都市とを結ぶ航路に使うことができる。

また、ことしから海上航路に「アリバトロス」型のディーゼル水中翼船が登場している。西側の多くの国に輸出され、好評だった従来の「コメータ」型に比べて新型の水中翼船の航行性は著しくよく、5バールの波浪も心配ない。「アリバトロス」は空調装置を備え、船室（定員一二〇人）の騒音と振動は最小限に抑えられている。時速は60km。環境の保全に最大の配慮がされている。

エルミタージュのシュメール文書修復

レニングラードのエルミタージュ美物館の修復技術者たちが考案した熱処理法で、古代の貴重な文化財――シュメール文字の彫られた小型の粘土板の生命を永久に延ばすことができる（シュメール人は紀元前三〇〇〇年―二〇〇〇年に現在のイラク南部に国を作っていた民族）。こうしてエルミタージュ東方部に保管されている三五〇〇点余りのシュメール文書のコレクションが救われることになった。

熱処理法で、ウル第三王朝時代の楔形文字の文書類もレニングラードの気候の悪影響から救われた。これらの文書は、古代文字の貴重な遺産であるだけでなく、約五〇〇〇年前ティグリス、ユーフラテス両河の中間地帯にあった国家に関する貴重な情報を伝えるユニークな文書でもある。

北極の寒さを発電所の動力に

ソ連の学者たちは、気温と海の水温の差を活用する温度差発電所を北極地方に建設しようと考えている。世界初のこの発電所の図面はすでに出来ていて、一年のうちで最も寒い時（6カ月ないし9カ月間）に運転される。

北極地方の冬の平均気温はマイナス20―30度C、深さ二〇〇mの海水の温度は2度Cで、この温度差が発電所のエネルギー源になる。発電所は不活性ガス――フレオン12で動く。このガスは約3気圧のもとで、ポンプで汲み上げた海水の熱を奪って蒸気になる。フレオンの蒸気はタービンを動かし、そのあとまわりの空気で冷やされて水になり、サイクルを繰り返す。

歩行するコンバイン

グルジア共和国科学アカデミー機械力学研究所は、さまざまな農具を装着できる山の斜面用のコンバインを開発した。

テスト版のコンバインは前部には関節のある2本の脚が、運転席下の後方には車輪が二つついていて、どんな土地でも車体を水平に保つ。車の脚は自動的に地形を考慮に入れるだけでなく、互いに動きが正常かどうかを監視する。

コンバインの運転は簡単だ。運転盤には「前へ」、「右へ」、「左へ」という表示のついた押しボタンが三つあるだけで、エンジンをかけ、その押しボタンの一つを押せば、あとは万事、機械が自動でやってくれる。

放送開始20周年を迎えたソ連の教育テレビ

一九六五年にソ連教育省、教育学アカデミー、全ソ知識普及協会「ズナーニエ」などのソ連の権威ある機関が参加して、ソ連中央テレビに教育番組のスタジオが設立された。

やがて学校にテレビが設置され、教育テレビ番組が授業時間に放送されるようになり、テレビはソ連の学校教育に欠かせないものとなった。教師向けの番組も製作された。

一九七〇年代初め、教育テレビはソ連中央テレビの第4放送として独立し、教育番組スタジオは教養・教育番組製作総局に変わった。こうして製作総局は教養と教育という相互に関連のある二つの機能を正式にもつようになった。

教育テレビ放送の番組は、大きく分けて学童向け番組、学生（主に通信教育学生）向けのもの、科学技術革命時代の新しい職業知識を提供する番組、一般向けの教養番組の四つから成る。

いま教養・教育番組はソ連のテレビ放送の$\frac{1}{3}$を占めており、第4チャンネルのほか、ソ連最大の第1放送や第2放送（一九八二年開設）でも放送されている。「科学と生活」、「人間、地球、宇宙」「健康」などの教養・教育番組があって、熱心な固定ファンがついている。こういった番組には視聴者から毎年約四〇万通の投書が寄せられており、番組の編成や改善に役立っている。ほとんどの番組には、投書に対する回答のコーナーがあって評判がよい。

教育テレビの評判が高い理由は、鋭い問題提起と今日性であり、性急な情報伝達を排し、考察と思考の動きの伝達を重視していることだ。

教育テレビは一九九〇年までには衛星経由でソ連全土の人が見れるようになろう。



走り幅跳びのママさん選手

室内世界最高記録のガリーナ・チスチャコワ

カメラ I・ウトキン

スポーツ

モスクワ体育大学の22歳の学生ガリーナ・チスチャコワは今年の2月、女子走り幅跳びの室内世界最高記録――7m25をマークした。チスチャコワは7m29のソ連記録（一九八四年）を持っている。今年の3月にアテネで行われた冬季陸上欧州選手権では金メダルを獲得した。

チスチャコワはドナウ河畔のイズマイル市（ウクライナ共和国）の生まれ。10歳のとき少年スポーツ学校の陸上部に入った。チスチャコワは最初から走り幅跳びの才能を示した。14歳で5m25を跳び、2年後には6m43のソ連ジュニア記録を樹立した。

その後のチスチャコワの歩みは必ずしも順調ではなかった。一九七九年にはナショナルチームに加えられ、さまざまなコーチの指導を受けて練習に励んだ。だが、6m43の壁をどうしても突破することができなかった。一九八〇年のモスクワ・オリンピック出場も夢見たが、それは実現しなかっただけでなく、あやうくスポーツをやめてしまうところだった。記録が伸びない。すべてはこの一言に尽きた。運命が彼女の忍耐力を試しているかのようだった。

それでも彼女は、7mの壁を越えられると信じていた。それどころか、すばらしい支援者を得た。合宿で三段跳びの最強選手のひとり、アレクサンドル・ベスクロブヌイと知り合ったのである。ベスクロブヌイとコーチのビャチェスラフ・ソコロフは大胆な実験に取り組んだ。一九八二年に二人はチスチャコワをモスクワに招き、学生スポーツ協会〝ブレベスニク〟のソコロフのグループに入れたのである。このグループはもっぱら三段跳びを練習していた。成果は上々だった。だが、練習は中断された。チスチャコワがベスクロブヌイと結婚し、大学に入り、娘イリーナが生まれたからである。

娘が生まれてから4カ月後にチスチャコワは練習を再開した。彼女には十分な自信があったわけではなかった。ところが、意外なことが起こった。記録がぐんぐん伸び、練習のつらさにも楽に耐えられるようになったのである。

こうして、一九八四年には絶頂を迎えた。6m99を跳び、次に7m21を跳んだ。「友好84」国際スポーツ大会では7m11で3位に入賞した。そして今年に入ってからは、本文の冒頭で紹介したように、7m25の室内世界新記録と欧州冬季選手権での優勝という活躍ぶりである。

これらのすばらしい成績にもかかわらず、チスチャコワ自身はまだ絶好のコンディションに達したとは考えていない。自分の記録にも批判的で、どうすれば跳ぶ技術を改善できるかを知っている。彼女にはまだそのための時間がある。専門家たちの考えによれば、走り幅跳びの選手の最適年齢は25歳だということだ。



▲アテネの冬季欧州選手権で（一九八五年3月）



チスチャコワは身長169cm、体重54kg。軽快でしなやかな生まれつきの資質に加えて、非常な努力家でもある。



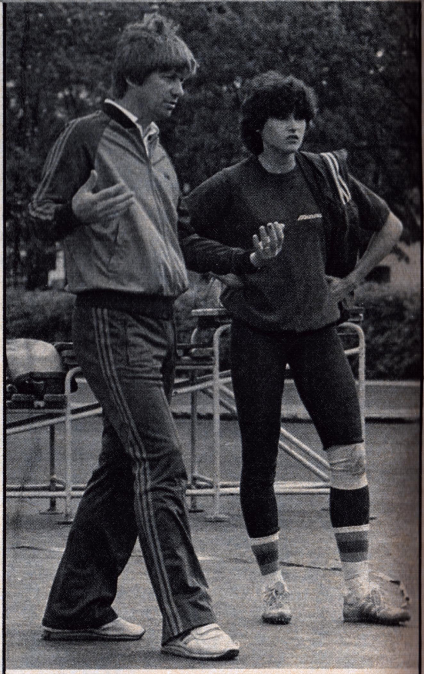
練習中のチスチャコワ



夫のアレクサンドル・ベスクロブヌイとはよく一緒に練習する。



▲失敗！



コーチのビャチェスラフ・ソコロフと



夫と娘のイリーナと

トランペットによる日本の抒情歌

──ドクシツェルの名演奏でメロディア社から新盤



ソ連の名トランペット演奏者、ロシア連邦共和国人民芸術家チモフェイ・ドクシツェルの演奏は、日本の音楽ファンにはよく知られている。すばらしい演奏家であり、著名な教育者（モスクワ音楽院教授）であるチモフェイ・ドクシツェルは何度か日本で公演し、そのコンサートはラジオ、テレビで中継され、ビデオ・フィルムも作られた。ビクター音楽産業では彼のレコードをすでに7枚出している。

この夏ソ連のレコード会社〝メロディア〟は、日本音楽の愛好家とドクシツェルのファンにすばらしい贈り物をした。ビクター音楽産業の企画で〝メロディア〟がドクシツェルの新しいレコード（「ドクシツェル・トランペットによる日本抒情歌集」）を発売したのだ。これは日本の音楽家宮本良樹氏がトランペットのために特別に編曲した日本の歌を、ドクシツェルがソロ演奏したもので、ピアノ伴奏はセルゲイ・ソロドフキン。

収められた曲は次の13曲。『花』、『荒城の月』（滝廉太郎作曲）。『雪のふるまちを』、『夏の思い出』（中田喜直作曲）、『この道』、『待ちぼうけ』、『赤とんぼ』（山田耕筰作曲）、『早春賦』（中田　章作曲）、『故郷』（岡野貞一作曲）、『城が島の雨』（梁田　貞作曲）、『浜千鳥』（広田　竜作曲）、『宵待草』（多　忠亮作曲）、『さくら　さくら』。

このレコードについてドクシツェルは次のように語っている。

「このレコードに収めた曲は器楽編曲の可能性を考えながら自分で選んだ。編曲の宮本良樹氏は格調高く、本質的なところを変えずに曲のモチーフを発展させた。曲の大多数はバイオリンやフルートの技法、声楽曲のカデンツァに近いトランペットの可能性を最大限巧みに生かした変奏曲になっている。こうして日本の歌というひじょうに珍しい素材のトランペットとピアノのためのコンサート用の小品集ができた。これらの曲は私の同僚のトランペット奏者たちによい刺激となり、これからのコンサートのレパートリーにも必ず入れられよう。

モスクワでの録音は全ソ・ラジオ、〝メロディア〟、ビクター音楽産業の三者が一致協力し、プロとしての厳しさと善意の雰囲気の中で行われた。ビクター音楽産業の構想が実現したこと、私が好きで、そしてまたこれからも演奏する日本の曲をレコードにできたことに非常に満足している」

このレコードはすぐにモスクワの音楽ファンの注目を引いた。ジャケット（写真）に美しく印刷された安藤広重の『東海道五十三次』からの版画がこのレコードに日本的雰囲気をかもし出し、レコード店でも異彩を放っている。

なお、ドクシツェルのこの録音はビクター音楽産業から「ドクシツェル⊙トランペットによる日本抒情歌集」（VIC　二八〇六二）として発売されている。

今日のソ連邦
一九八五年9月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可 発行人 加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03・447・3536）
定価 一五〇円